

# ラストーン

～失われた都より～

8

segakiyui

## 1.失われた記憶

(あなた、誰.....か)

アシャは重い憂いを浮かべて、草の上に腰を降ろしている。憂えた表情がどれほど整った顔立ちに悩ましさを与えているか、それがどれほど女性の心を魅きつけるか、そんなことはよくわかっていることだが、今の彼にはそう言ったことは全て瑣末時、興味も湧かない。髪留めから一筋二筋ほつれ落ちた髪をうっとうしくかきあげる。光が跳ねて瞳の奥に眩い煌めきが差し込む、それに僅かに目を細めて溜め息をつく。

(誰に抱かれてるつもりだったんだろうな)

あの瞬間は、さすがにアシャ自身だろうと思い込んでいたのだが。

(俺じゃ、なかった)

では誰だ。

「...ふう」

決まっている。

ユーノがあればどの想いを寄せている相手だ。

思わずもう一度深々と、胸の奥からのもやもやを溜め息に吐き出す。

「...それはないだろう.....」

「...アシャ」

「.....シートス」

近づいてきた気配に振り返ると、日焼けした精悍な肌に黒々と髭をたくわえたシートスが向かってきていた。

「様子は？」

「元気は元気ですが.....どうもやはり、裂け目に落ちた時にどこかで頭を打ったんでしょうな、一時的な記憶喪失.....それに...」

シートスは困ったように肩を竦めてみせた。

「自分を男だと思い込んでいるようです」

「.....」

アシャはもう一度溜め息を重ねた。

何せ、目を覚ましたユーノが最初にアシャに投げつけたことばが、『放せ、変態!』。訳がわからずに戸惑うアシャに、続いて『男を襲ってどうする気だったんだ』と言い放った。

それから、アシャに近づこうとしないし、近づけようもしない。見かねたシートスがとりあえずアシャについて改めての紹介をした後でも、ふいとそっぽを向いてアシャの顔を見なかった。

「私もユカルもひやひやものですよ。今は右手が使えないからまだいいものの、ちょっと目を離すと、他の男連中に混じって着替えかねませんからな.....何とかならないんですか？」

「俺が近づけないんだ」

アシャはうんざりしながら応じた。

「何ともしようがない」

「自分の名を星の剣士(ニスフェル)、野戦部隊(シーガリオン)の一員だと信じ切っているし...」

「それがまた問題なんだ」

このまま、ユーノに因果を含め、レスファート達の所へ連れ戻して、旅を続けることは不可能ではない。アシャのことばでは聞かなくとも、野戦部隊(シーガリオン)隊長シートスからの命とあれば、野戦部隊(シーガリオン)の一員である星の剣士(ニスフェル)としては、聞かぬわけにはいかないだろう。

だが、レスファートはレクスファの王子、人の心の像に精通している一人なのだ。自分でその能力の高さを意識しているかどうかはわからないが、ユーノの心像が以前と全く違うばかりか、自分の存在がそこにひとかけらもないとわかったら、どれほどの衝撃を受けるかは容易に想像がついた。

(せっかく元気になったレスファートが、また逆戻りするのを見たくないな)

姿形が愛らしいだけに、自分の抛り所を失って殻に閉じこもっていく光景は痛々しすぎる。

(どうする? いっそ、ユーノを野戦部隊(シーガリオン)に委ねるか)

むしろその方がレスファートにとっても、そしておそらくはアシャがこれ以上ユーノに拒まれないためにもいい方法だろうが.....。

「ユカル!」

ふいに朗々とした声が響いた。何かの急用か、ユカルの天幕（カサン）にユーノがいそいそと走って行く。

見つめているアシャの視線に気づいたように、ふっとユーノがこちらを振り向いた。だが、すぐに険しい表情で顔を背け、災厄から逃れようとするようにユカルの天幕（カサン）に飛び込む。

それはまるで、アシャの存在そのものが不快でしかないと語るようだ。

（何だ、それは）

どれほどの想いで探し回ったと思っている。

どれほど眠れない夜を過ごしたと思っている。

見つけ出した瞬間の喜びを一気に突き落とされる傷み、しかもそれは今もどちらかという警戒を深められ続けているとしか見えない。

（俺は）

「...前途多難ですな」

「.....ああ」

（俺は）

シートスのことばにアシャは唇を噛みしめ、俯く。

（俺が、何をしたって言うんだ）

子どもっぽい愚痴に胸がじくじくする。

（なぜなんだろう）

ユーノは振り返って、天幕（カサン）の入り口の垂れ幕の合わせ目から外を覗き見た。

赤茶けた草の上に、尊敬すべき長、シートス・ツェイトスがいる。

そして、その側に、シートスがあれほど親しく話す相手としてはかなり不似合いな、きらびやかな男が居る。

黄金の髪を無造作に止めた飾り紐、風に吹かれ乱れる金の炎に囲まれた端麗な顔は女性的だ。眩く輝く双眸は紫水晶、しかも差し込む日差しに刻々と色を変え、表情を変え、飽きさせない。彫刻じみた整った容貌、けれど時折零れる笑顔が生き生きと温かく、綻ぶ唇が甘い果実を思わせる柔らかさで、同じ男なのにどきりとする。何かを悩むような表情、厳しく考え込む頬の鋭さも、見惚れるほど印象的だ。

アシャ・ラズーン。

なるほど、ラズーンの第一正統後継者というだけある。

だから、なのか。

（あの人の目を見返せない）

思い出してぼんやりする。

あの紫の目を見てみると、妙に心が乱れて切なくて、おかしい話だが、胸が苦しくなってくるのだ、恋いこがれる娘を目の前にしているように。

「馬鹿な！」

相手は男だぞ。

胸の中で叱咤する尻から、数日前のことを思い出してしまう。おぼろげな記憶から現実に引き戻された瞬間、抱き締められて口づけをされていた。感うよりも先に、抵抗する気が失せて、ただただ心が寛いで。このままもっと引き寄せられてもいい、そんな甘さにうっとりして。

「くそっ！」

顔がみるみる熱くなって、急いで唇を手の甲で擦る。

（そんな趣味があったのか、ボクは）

確かに耳にしなくもない、同じ危機を凌いだ仲間が互いを求め合うようになる、そういう噂は耳にもする。

だが、アシャは初めて会った人間だ、並外れて女のように美しかろうが、とにもかくにも初めてで。

（初めてで、あんな）

ぞわりと震えた体にうろたえる。

（あんなふうに）

唇を開かれて、触れた柔らかな感覚に意識が溶けて。

（何もかも、奪われたいと？）

「違う違う違うっ！」

「だから何だよ、星の剣士（ニスフェル）！」

「へ？」

ふいに響いた声にぎよっとして振り返ると、ユカルの敷物の毛皮の上で胡座を組み、冷たい目でこ

ちらを見ている。

「いきなり、人の天幕（カサン）に飛び込んで来たと思ったら、妙な顔して返事もしない、あげくにおかしなこと口走りやがって！」

「あ、ああ……」

悪い、と慌てて謝った。

「何か用があったんじゃないのか」

「それだ。少し北の方でモスを見たよ」

「北の方って…おまえ、怪我もちゃんと治らないうちから！」

険しく眉を逆立てるユカルに苦笑する。

「怒るなよ、ユカル」

首を竦める。

「ちょっと暇だったから」

「暇だったからじゃないっ！ 怒られるのは俺なんだぞ！」

「ユカルが？ どうして？」

一瞬相手が勘弁してくれ、と言いたげな情けない顔になったのをきよとんと見返す。

「そ、そりゃ、い、いろいろと…いろいろとあるんだよ！」

「いろいろ？」

「いろいろ！ それより、モスが居たのはどの辺りだ？ 隊長に報告しておいた方がいいな」

「だろ」

「よし、ちょっと行こう。来いよ」

「え、あ、その」

立ち上がったユカルに促されて、ユーノは口ごもった。

隊長は今アシャと一緒に。できるなら、顔を合わせたくない。

「何だ？ 見た人間が報告するのが掟だぞ？」

訝しげなユカルに顔をしかめる。掟を持ち出されては、野戦部隊（シーガリオン）としては、背く訳にはいかない。

「そうだ、な」

「心配するな、俺もついてってやるよ」

「うん」

隊長に報告するのは初めてだったかな、お前、と見当外れな部分を心配してくれるユカルにすまなく思いながらついていくと、隊長の側にはもうアシャはいなかった。

（いない）

思わずきよろきよろしてしまう。

（どこに行った？）

ほっとしたけれど、それはそれで何か淋しい。太陽の光さえ少し翳った気がしてくるのが不思議だ。

「なるほど…モスカ」

「星の剣士（ニスフェル）」

「あ、はい。ジャントス・アレグノの遠征隊のようです。北の大岩を拠点としているような動きでした」

人数、装備などを確認したシートスが考え込んだ顔になる。

「わかった。斥候を送ってみよう。……ああ、ユカル、少し残れ。星の剣士（ニスフェル）は行っていい」

「はい」「わかりました」

引き止められたユカルを置いて、ユーノはシートスの側を離れた。

(あの人、どこへ行ったんだろう)

居ると居たたまれないのに、居ないとなると行方が気になる。

吊った右手を体に引きつけたまま、天幕(カサン)の間を擦り抜けて行く。あれだけの美貌、むさ苦しい野戦部隊(シーガリオン)の中ならすぐに見つかるだろうと高をくくっていたが、一通り回ってみても姿がない。

(どこかへ出かけたんだろうか)

ふと浮かんだ考えに身を翻す。

確かにアシャは野戦部隊(シーガリオン)ではないのだから、ここに居続けなくてはならない理由はない。いつ旅立っていてもおかしくないはず、そう考えて不安になる。

(もう会えない?)

自分がアシャを探し回っているという自覚はない。ただなぜ急に居なくなってしまったのか、どこへ行ってしまったのか、それだけが気になって気になって、平原竜(タロ)置き場へ走る。確か、彼の馬もそこに繋いでいたはずだ。

(、いた!)

平原竜(タロ)の中に、アシャの金褐色の髪を見つけてほっとした。息を切らせながら、今さらのように、自分がかなり駆け回っていたのだと知った。額から流れてきた汗を急いで擦って、相手が栗毛の馬に荷物を積んでいるのに気づく。

(出ていく、んだ.....)

ラズーンの第一正統後継者であるはずの、この鮮やかな男は、なぜかずっとラズーンを離れて旅から旅を続けている。全国の視察をして回っているのだとも、地方の監視に向かっているのだとも、あるいはまた、全くに気まぐれだとも聞く。

その目的が不明で、今回も訪れた場所が、たまたま野戦部隊(シーガリオン)の野営場所だっただけのこと、そういうことなのだろうが、置いて行かれる、とふいに胸が淋しきで一杯になった。

思わず一歩足を踏み出す。距離はあったし、物音をたてたつもりはない、けれど、

「誰だ」

低く鋭い声で誰何されて、立ち止まった。くるりと振り返った瞳は殺気に満ちて猛々しい。だが、次の一瞬、胸を貫くようなその色が、豊かな水をたたえた湖を思わせる柔らかさに凪いで、思わず見惚れる。

(宝石が、果実に変わったみたいだ)

唇を寄せて味わいたい、と思った瞬間、自分の思考の危うさにひやりとする。

「...やあ」

「あ...」

口にすることばを失って怯むユーノに、アシャは少し黙ってから笑いかけてきた。温かみのある甘い笑み、瞳がとろりと潤んだ気がして思わず唾を呑む。半身を振り返らせた姿は神々の彫像のよう、無駄がなく、緩みがなく、しかも滑らかで均整がとれている。

「星の剣士(ニスフェル)、だね?」

「あ.....うん」

おどおどと頷く。頬が熱くなった。そんなつもりはないのに、声が震える。格が違い過ぎるというのか、自分では相手にならないと疎む感覚を堪える。

「...この前は、すまなかった」

「っ」

淡々と謝られて、顔が熱くなり、慌てて芽を背けた。

「君を助けるには、ああいう方法しかなかったのね」

「助ける...?」

それは初耳だ。

「ラーシェラの花粉を吸い込み続けると、囚われて命尽きるまで力を貪られる」

ぞくりとした。『風の乙女(ベルセド)』というのが、地底深くに根を張った太古生物のラーシェラが原因であることは聞いた。自分が裂け目に落ち、そこから助け出されたことも。

「呼吸を止めておくしか、手がないんだ」

「呼吸を止める」

「だから」

途切れたことばに横目で見やると、微笑んだアシャが指で軽く自分の唇を押さえて、片目を閉じて

みせた。黙っているという合図、だがそれは、重なった感触を思い出させるのに十分だ。

「あっ」

(畜生！)

かああっ、と見る間に熱くなった顔を慌ててまた背ける。

この人は天性の魔性だ、そう感じた。人の心をどうすれば揺さぶれるのか引き込めるのか、知り尽くしている。

「それに...たいしたことはしていない」

顔を背けたユーノの耳に届くか届かないかの囁きで眩かれ、仕方なしに振り向く。

相手はいつの間にかユーノに背中を向けている。

「ユカルに協力した程度だよ」

声がどこか淋しそうだ。何だか、せつかく助けた恩に報いていないと詰られた気がする。

「.....あり、がとう」

「構わないよ」

アシャは背を向けたまま応じた。

「こっちが助けてもらったことだってあるんだ」

「え...？」

声が眩き程度のせい、思わず少しずつ近づいていく。

「あなたを？」

「ああ」

「ボクが？」

「ああ」

確かにユーノは裂け目に落ちる前の記憶がいささかあやふやだ。だが、目の前の男は、まるでその部分を知っているように応えている。

「いつ.....って言うか、あなた、ボクのことを知ってるの？」

そうだ、考えてみれば、ユーノが裂け目に落ちた時に、アシャはここに居たということになる。ユカルとも親しげだったから、ユーノと話していたこともあるのだろう。

(どうしてそれに気づかなかったんだろう)

ひょっとして、意外に親しく関わっていたのではないか。

(だとしたら)

ここ数日のユーノの振舞いは、あまりにも不躰で無作法ではないか。

(しまった)

野戦部隊(シーガリオン)の名前を汚すようなことだったのではないか。

どきどきして急ぎ足に相手の側に近づいた。

「ボクと...親しかった、の？」

「記憶がないそうだね」

「うん」

「.....君を知っているよ」

ああ、やっぱり。

「そうなんだ、ごめ」

「知っているも何も、セレドからここまでずっと、一緒に旅をしてきた」

「え？」

「ずっと一緒に居たんだ、ユーノ」

振り返ったアシャの瞳は、妖しい炎をちらつかせていた。まるでこちらの心を呑み込むような。

「俺はお前の付き人で。お前は俺の主人で」

静かな口調に熱がこもる。

「え？ え？」

「そればかりじゃない、俺にとってお前は」

「待って！」

慌てて遮る。混乱と困惑に頭がぐるぐるする。

「ボクは星の剣士(ニスフェル)だ！ ずっと野戦部隊(シーガリオン)で、額帯(ネクト)も受けて、ユカルと一緒に」

「.....らしいね」

一瞬、何かとても痛いものを無理矢理呑み込んだ、そういう顔になって、アシャは顔を背けた。それ以上は話さず、ひらりと馬に跨がる。

「どこへ行くの」

我に返って、急いで相手を見上げた。

「ちょっとその辺りを回ってくる。斥候と……頭の整理をしに」

「でも！」

モス兵士は下っ端ではなかった。ジャントス・アレグノ率いるモスの遠征隊だ。

「モスがうろうろしてる、あなた一人じゃ危ないよ！」

ラズーンの第一正統後継者なら、宮殿育ちだろう。荒くれ男達の相手ができるとは思えない。

「…心配してくれてありがとう」

ふ、とアシャは瞳を和らげた。

「だが、多少は腕に覚えもあるから大丈夫だよ」

「大丈夫って…」

思わず相手の出で立ちを見直した。

鎧一つつけているわけではない、焦げ茶色のチュニックの下にはベージュの上着と同色のズボン、野戦部隊（シーガリオン）の物見（ユカル）と言えども、これほどの軽装はしないに違いない。おまけに帯びている武器が、金の、如何にも宮廷に出入りするような男が好みそうな装飾的な短剣一つときた。

（殺されにいくようなものじゃないか！）

「ボクも行くよ！」

次の瞬間、そう叫んでいた。

「二頭は目立ちすぎる」

けんもほろろに突き放されて、慌てて言い募る。

「平原竜（タロ）なら二人乗れる！」

「……」

なおも応じないアシャの目が、じっとユーノの右手に注がれている。

（あ…）

足手まとい、それはユーノの方だったのかも知れない。

竦んだユーノに、豊かな響きの声が応えた。

「わかった。確か、左も遣えたな」

「うん、剣士としては当然…」

ほっとしてにこりと笑って答えかけ、ユーノはことばをとぎらせて瞬きした。

（いつか、同じようなことを言った？）

口に乗せたこの感覚、覚えがあるような気がする。

だが、アシャはユーノの戸惑いに頓着しなかった。黙々と荷を積み替え、平原竜（タロ）の一匹に跨がると、すっとユーノに手を伸ばした。

「ほら」

「うん」

それぞれの所有者があり、主以外に乗られるのを嫌がるはずの平原竜（タロ）は穏やかだ。数日滞在していただだけの男に示す恭順ではない。

（やっぱり、この人は）

ぐっと手を握られ、空気よりも軽々と平原竜（タロ）の背中に引っ張り上げられる。右手が利かないため、いきおいアシャの両腕の中に身を取めたが、普通なら感じるだろう、囚われて身動きできない感覚はなかった。柔らかな布を一枚隔てて包まれている、そんな快さにまた戸惑う。左手ですぐに剣が抜き出せるように配慮してくれているのも感じる。

（この人は、本当によく知っている、野戦部隊（シーガリオン）のことも……ボクのことも）

そっと肩より上にある横顔を盗み見た。

（剣が左で遣えることも知ってた……一体ボクは、この人とどんな関わりがあったんだ？）

それになぜ、シートスもユカルも、それについて話してくれないのだろう。

「行くぞ」

「はい」

（ひょっとして、ボクはこの人に、何か不愉快なことをしていたんだろうか）

今のようなそっけないだけのものではなく、この人が大人だから何もなかったように振舞ってくれているだけで、シートスもユカルも口に出して説明するのを憚られるような不敬なことでもしたのだろうか。

（でも、それなら隊長はきっと叱ってくれるはずだし）

「……??」

ユーノは何度も首を捻った。

「レス！」

バンッ。

宿の扉が激しい勢いで開け放たれた。中から飛び出したレスファートが駆け出し、すぐに、宿の前に繋いであった馬の鎧に足をかけて伸び上がり、鞍に両手を伸ばす。小柄な体では大人用の鞍に掴まるのが精一杯だが、少年は必死にしがみついて、体を鞍の上へずり上げた。

「レス！」

後から飛び出したイルファが、鞍の上で危なっかしく均衡を取りながら手綱を握る少年を見つけ、慌てて走り寄る。

「待てよ！」

「いやだ！」

レスファートはプラチナブロンドを乱して叫び、きつとイルファを睨みつけた。淡い色の瞳が激しい色に燃え上がっている。

「ユーノの所へ行くんだ！」

「アシャが待ってると言っただろ！」

イルファは、馬の前で大手を広げて立ち塞がった。

「でも！」

少年は瞳をなおも煌めかせて言い返す。

「ユーノに何かあったに違いないんだ！ 感じるんだもん!!」

「だからと言って、お前が行ってどうするんだ！」

埒が明かないと見たイルファは、声を荒げた。

「アシャが行ってるんだ、大丈夫だろ！」

言い争う声に怯えたのか、馬が不安そうにいらいらと体を揺する。

「イルファにはわからない……」

レスファートは小さな手で鞍の端を掴んだ。きつく噛みしめた唇から血の気が引いて真っ白になっている。

「母さまをあきらめろっていわれて……ぼくがどんな気持ちだったか…」

見る見るアクアマリンの瞳が曇る。

「母さまはいないんだって……どんな気持ちで思ったか……」

滲んでくる涙を飲み下そうとする努力も虚しく、光る粒は零れ落ち、レスファートの頬を伝った。

通りがかる人々が何事かと訝しげな目で彼らを見て行く。

「どうして……ぼくは……母さまにおいていかれたんだろうって……いつも……わかんなかった」

「レス……レスファート王子…」

その後を続けられずに、イルファは口を開いたまま、その彼にレスファートは胸を絞るような声で被せる。

「それでも…母さまはあきらめたんだ……でも」

かっとな強く大きく目を見開く。

「ユーノだけは絶対あきらめない!!」

激しく鞍を掴んだ指、腕がぶるぶる震えている。紛れもない、人に自分の意志を満たすことを求める力、王子としての誇りが幼い顔に過るのに、イルファはしかめていた眉を和らげた。こんなところで、その能力を使わなくてもいいだろう、と溜め息をつく。

「わかった……ああ、わかったよ、レス」

肩を竦める。

「宿に伝言を残して、南西の台地へ行こう。その代わり、ユーノの一を捉え損なうなよ」

「うん!!」

ぱっとレスファートの顔が明るくなった。片手を放し、ごしごし濡れた頬を擦る。と、それでバランスを崩したのか、ぐらりと少年の体が傾き鞍から一気に滑り落ちた。

「きゃ…」

「わ!!」

必死に滑り込んだイルファの腕に、間一髪、どさりと小さな体が転がり込んでくる。

「いたあ…」

「ふう…」

(やれやれ全く何て惚れ込み方をしてるんだか)

これじゃあ、旅が終わってレクスファに戻ったとしても、ユーノを召し抱えるとか言い出すんじゃないだろうな。

(まあ、それも悪くないか)

あの気づき、あの剣の冴え、隣に居れば百万の味方を得たようなもの。乱世をしのぐに必要な人材



には違いない。

(そこにアシャが居れば言うことはないんだが)

「ありがとう、イルファ！」

土塗れになっても嬉しそうに笑いかけてくるレスファートに、イルファはおどけて片方の眉を上げてみせた。

「よし...」

アシャの声が静かに平原竜（タロ）を止めた。

あまりすっきりと晴れ渡る事のないスオーガ、灰色の空の下には相も変わらず赤茶けた草と岩が渺々と広がっている。街があるのは国の東の方のみで、後は畑にもならねば牧畜にも使えない 荒れた土地だ。

「モス兵士を見たのはこの辺りか？」

アシャの問いかけに、ユーノは周囲を見回した。

暮れ始めた日の光は、物の形を妙に歪めて照らし出していたが、ここではないようだ。

「もう少し北だと思うけど」

「そうか」

それっきり、また口もきかずに平原竜（タロ）を進めるアシャを、ユーノはちらりと見上げた。

女性的な顔立ちに不自然な隙のなさ、不安定な揺らぎをそのまま凝縮したような不思議さ。儚さと力強さ、静けさと激しさ、相反する要素が絡み合い入り交じって調和している。

（この人を描こうとする絵師は大変だろう）

数瞬ごとに移り変わる美をまとめあげ封じ込めるには、途轍もない才能が必要になる。

「さっきさ...」

「ん？」

ユーノの問いかけに我に返ったように瞬きし、それでもアシャは前方遠くを眺めている。

「斥候と、頭の整理、と言ったよね」

「ああ」

「悩み事？」

「まあな」

「.....恋愛の？」

「どうしてだ？」

ひょいと覗き込まれた。

「いや...なんとなくさ.....」

瞳が眩く、思わず顔を逸らせながら応じる。

「あなたに合いそうだったから」

「合いそう、か」

微かな苦笑がアシャの片頬に広がった。

「そんなに難しいの？」

如何にも手詰まり、そういうどこか苦しげな表情に思わず突っ込んでしまう。アシャの頬にぴくりと緊張が走った。

「.....相手がか？」

「うん」

「.....まあな」

曖昧にことばを濁された。お前如きでは相談相手にならない、そう突き放された気がして、ユーノは急いでことばを継いだ。

「信じられないや」

「ん？」

「あなたほどの人だったら、嫌う女なんていないような気がするけど」

沈黙。

やがて、スオーガを吹き渡る風を追うように、アシャは天を振り仰ぎ、小さく溜め息をつく。

「それが全然だめでね」

乗り手の不安に応じたのか、走りかけた平原竜（タロ）の気配を敏感に察し、手綱で軽く制してアシャは続ける。

「こっちの気持ちを全く...気づいてくれない」

唇が軽く尖った。不満そうな子どもの声、この綺麗な人にそんな顔をさせる相手が想像できない。

「いい女？」

仲間内でよく話題になるような、街の女みたいなんだろうか。豊かな胸と腰、柔らかでまろやかな肌、微笑んだ顔にほっとし、甘い匂いに体が脈打つ、そんな類の？

「.....俺にとっては、誰よりも大事な女だよ」

「...」

ずきん、と胸の奥に痛みが走って戸惑った。

(どうしたんだろう?)

やっぱり傷が治り切っていなかったのを無理して出て来たのはまずかったのか。けれど、痛み の場所が微妙に違うような気もする。なぜか、その先を考えたくなくなって、急いで問いを重ねた。

「美人？」

「かなりの」

「優しい？」

「ああ、どんな女より、な」

「色っぽい？」

「たぶん。.....守ってやりたいよ」

けれど、いつも、できない。

「.....っ」

こちらの胸を甘酸っぱく滲ませるような切なさを込めて呟かれ、思わず眉をしかめた。頭のどこかを痛みが貫く。裂け目に落ちた傷はあるが、こちらは完全に治っているはずだ。

(何か、思い出せそうな.....何か)

守ってやりたい女。

(ボクじゃないな)

「っ！」

思わずぶんぶんと頭を振る。

(当たり前だろ！)

「どうした？ 傷が痛むのか？」

「え、いや」

アシャの不安そうな声に、ぎくりと体を強張らせる。傷が痛い、などと言えば連れ戻されるだろう。

「大丈夫」

笑い返したとたん、

『優しくしないでよ』

(え?)

胸の中で響いた、もう一つの声にユーノは瞬きした。

『期待してしまうから.....優しくしないでよ』

同じ声がもう一度、胸の奥で呟く。

(何を考えてる?)

困惑し、次々湧き上がる声に混乱する。

『何を期待する』『期待するものなどありはしない』『ずっと一人だった』『守ってもらえる相手なぞいない』

(誰? 何?)

「ユーノ？」

訝しげに尋ねてくるアシャの顔が視界でぼやけた。痛みが急に広がる。血の気が引く。肩から頭から痛みの渦が次々襲ってきて目眩がする。息が弾んで、それでも必死に反論する、それが唯一気を失わない方法のように思えて。

「ボクは...ユーノじゃない.....っ...」

一人ぼっちのユーノではなく。

仲間が居て、強大な敵にも皆で立ち向かえる野戦部隊(シーガリオン)の。そこには女はいなくて男だけだから、比較されることも自分の存在を否定されることもない、ただ仲間だけが居る世界の。

「ボクはニスフェル.....野戦部隊(シーガリオン)の...っ」

ことばだけでは負けそうな気がして逃げようとした、その瞬間、塞がりかけていた傷を大きく捻った。ざくりと響く激痛、視界が一気に暗くなる。

「く...っ」

吐き気に目を閉じる、このまま地面に落下する、そう覚悟した矢先、

「星の剣士(ニスフェル)！」

ぐっと確かな腕が自分を支えるのを感じて薄目を開けた。

アシャの腕の中にいつの間にかすっぽりと包み込まれているのを知る。

「ふ...」

どうやら痛みの衝撃で、アシャの方へ倒れ込んだらしい。それとも、落ちかけたユーノをアシャが引き寄せてくれたのだろうか。

右肩からじんじん熱い波が広がっていく。回復を早めようと大人しくしていなかったのが裏目に出

たのか、体を起こそうとしても目眩がして動けない。

「無理をするな」

労るようなアシャの声がした。

「前の傷を擦ってるからな……それに……女にあの槍傷は堪える」

「は...？」

ぼんやりとする頭の中に聞き慣れないことばが飛び込み、瞬きする。

「女……？ 誰が...？」

「お前だ」

「そんなはず...」

「お前だよ、ユーノ」

ふいに何かを耐えかねたように、アシャが腕の力を強めた。包まれる、というより、抱き締められる形になって、首筋に低い声が届き、背筋が震える。

「お前だ...」

俺の.....。

続くことばに思わず首を振った。抵抗しようとした力がアシャの胸の中へ吸い込まれていく。戻されたのは深く穏やかな安心。

『わたしの』

胸の奥の音が華やぐ。

「ちが...」

いきなり襲った強い眠気は、限界を越えた体のせいかな、それともこのまま続く会話の果てに響くことばを聞くまいとしたのか。けれど同時に感じた、自分の手足の細さ脆さ、アシャの体の強さ温かさ。

『あなたは、私の』

すんと落ちた闇はひどく深く快く。

「あ...しゃ...」

「星の剣士（ニスフェル）！」

腕の中で、戸惑いを越え、ついにこちらへ落ちてくれそうだった体が、ふいに別の重さで沈んだのにぎよっとして、アシャは慌てて相手を支え直した。

「ユーノ？」

覗き込んだが、微かに呼吸はしているものの、完全に気を失ってしまっている。

「ちっ」

気づけば、ユーノの右肩あたりに薄赤い染みが滲み出していた。

「俺か？」

もう少しで記憶を取り戻す、そう焦って力を込め過ぎたのかと確かめると、どうも今すぐの出血ではなさそうだ。この斥候に出たあたりからもう出血し始めていたのを、意識して話さなかったのか、無意識に気がつかなかったのか。

（どうしていつもいつも、こいつは）

歯ぎしりするような想いに苛立つ。苦しいなら苦しいと早く言ってくれればいいのに、こうして気を失ってしまうまでアシャの腕に戻ってこない。

（どうせ、ここ二、三日、碌に休んでないんだろう）

野戦部隊（シーガリオン）の野営場所までそれほど距離は離れていないが、もう日も暮れ切る。モスがうろついているのなら、夜襲をかけられては応戦できない。傷の具合も確認したいし、手当もしたい。

（来る途中に洞穴があったな）

『風の乙女（ベルセド）の住みか』のような深い裂け目ではなく、すぐ先に奥の壁が見えている程度のものであったが、一夜の宿ぐらいにはなるだろう。

「...よし」

取り急ぎ右肩を強めに圧迫して抱え直し、アシャは平原竜（タロ）の向きを変えた。

哀しい……。

(何が?)

自分が……。

それともこれも自己憐憫とやらの一種なんだろうか。

右肩が痛い……ズキズキと絶え間なく神経に牙をたててくる。ユカルが怒っている。動き回るからだぞ、と。

「ごめ……ユカル……」

小さくユーノは呟いた。

どうしたんだろう。呼吸が苦しい……息がうまくできない。陸(おか)に上がった魚みたい。

陸(おか)に上がった魚……彼らは歩いていったのだよ、と心の中の何かが呟いた。進むべき道へ。より、陸(おか)で生きていくのに適した体を得、心を得、魂を得た。あるものは空へ、あるものは地へ、あるものは再び水の中へ。

ああ、しかし、それは何と長い旅であったことだろう。だが、歩き続けたのだ……ゆっくりと……一歩ずつ。そして、彼らが陸(おか)をのし歩くのに、そう時間はかからなかった。彼らはいつの日か、こう思い始めたのだ。自らの意志で、この道を歩いて来たのだ、と。自らの意志で、よりよい、より高度な生を手に入れたのだと。

それは、彼らが覚えた最初の驕りであった。

(どうして、こんなことを考えているんだろう?)

詰まる胸を喘がせ、忙しく息を継ぎながら、ユーノは考えた。

(ボクは一体……誰なんだ?)

「う……」

顔を背けると、冷たい岩肌が頬にあたった。

(気持ちいい……)

苦しい呼吸、岩肌にもたれて辛さをしのぐ。

そっくりなことがあった気がする。いつだっただろう。同じように、右肩の傷を庇いながら岩にもたれていた。

そう言えば、この右肩は何で負傷したんだっけ……変だぞ、覚えがない。

(では、これは名誉ある野戦部隊(シーガリオン)として戦った傷ではないのか?)

疑いがよく肥えた土壌にまかれた麦のように素早く芽を出す。

(麦……麦……何かひっかかるもの……麦の祭り…)

祭り? ああ、そうだ。ボクはいろんな祭りを経験してきている。麦の祭り、結婚式、花の祭り…  
…花の……舞台……逃げ出して……。

ズサアツ!!

(っ!)

記憶の隙間から突き出された剣が、いきなり背中を切り裂いた。

(っあ…っ)

声も上げられぬ苦痛

(あ…っああああ)

身悶えして絞り出す絶叫。

「う…あああああっ……」

「星の剣士(ニスフェル)！」

「あ……ああ……あ……っ！」

「星の剣士(ニスフェル)!!」

ぱん、と強く頬を叩かれて、ユーノは目を覚ました。

視界がもやもやと霞んでいる。もう一度目を閉じると、頬を焦がすほど熱いものが目尻から流れ落ちていく。

(ボクは……泣いてたのか…?)

「大丈夫か？」

呼びかけられて再び目を見開くと、薄明かりの中で、アシャの顔が心配そうにユーノを覗き込んでいた。ああ、と答えようとして声にならず、息を呑んで思わず、ひっく、としゃくりあげる。

叩いた頬を労るように手が当てられ、アシャの指がそっと涙を拭いていった。

「うなされていた」

柔らかな声が囁く。

「うん……」

弱く頷き、ユーノは目を閉じて、当てられた手の温かさを味わった。ふいに肩越しに風が流れ込んで来たのがひどく生々しく感じられ、びくりと体を竦めて目を開く。

「……っ」

風から庇うように左手で体を探り、自分が半裸に近い状態なのを知った。だが、それより何より、ユーノの心を衝撃で震わせたのは、明らかに男とは違う自分の胸の微かな膨らみだった。

(ボクは……やっぱり女……だったのか？……)

おそろおそろアシャの方に目をやると、相手はユーノの横に寝ていたらしく、上半身を起こした姿勢でユーノの上に屈み込んでいた。体を竦めているユーノにそっと毛布をかけて肩まで包んでくれないながら、この上なく優しい目で見つめ返してくる。

「大丈夫か？」

「うん…」

まるで雛を守る親鳥のようだ、そう思いながら頷く。

「傷の手当が不十分だったんだな。槍傷で治りにくいところへ無理をしたからな」

「槍…傷…」

(槍で、傷ついた……?)

「何か思い出せるか？」

「……そんな気もするんだけど……」

なぜそんなことを知っているのだろうか、そう思う反面、槍で傷つく、それではまるで仲間に裏切られたようなものだ、そう思う気持ちをユーノはとっさに隠した。

(仲間と信じた相手に…裏切られる…)

息を吐いて目を閉じる。体の芯がぼうっと熱くなっている。

(それは…辛いな…)

ずきずき痛むのは、傷の部分ではなく、心のもっと奥底だ。視界の裏にくるくる翻る花びらの舞、なぜそんなものが浮かぶのかわからないまま瞬きしたのを、アシャは別の意味にとったようだ。

「疲れているようだな。もう少し寝るか？」

「うん……平原竜(タロ)は……？」

「穴の入り口で丸くなっている。風よけと侵入者よけになる」

「穴……」

言われて今自分達が休んでいるのが小さな洞穴だと気づいた。ぼんやりと明るいのは光石(ひかりいし)があるせいらしい。

(光石(ひかりいし)…)

ぶるっとユーノは体を震わせた。

嫌な思い出がある。光石……何か、禍々しい影の記憶。

「寒いのか？」

「うう…ん……？」

アシャの問いに応じながら、眉をひそめる。

(前にも同じ問いかけがあった……あの時、ボクは何と答えた……?)

「……うん……ちょっと……」

「そうか」

アシャは毛布をより引っ張り上げ、しっかりユーノの体を包んでくれた。羽織っていたマントもその上からユーノに着せかけてくれる。それを見ながら、心に膨れ上がってくる違和感に捉えられる。

(違う……もっと……違うこと……)

「アシャ…」

「うん？」

ユーノは呼びかけて左手を抜き出し、アシャに差し伸べた。不審気な表情になる相手におかまいなしに、近づいたアシャの体に巻き付け、引き寄せる。

「え…あ…」

拒みはしなかったが、アシャは複雑な表情でユーノを覗き込んできた。

「星の剣士(ニスフェル)？」

「違うんだ……あの時は……違ったんだ」

「あの時……？ ……っ」

繰り返してアシャははっとしたようだった。ユーノを見つめ、上半身の着衣を脱ぐ。ためらう間も拒む間も与えずに、するりとユーノを覆った毛布の中へ滑り込み、傷に障らないようにユーノを抱き寄せてくれる。

「ん...」

(そうだ.....これだ...)

安心して、その腕に包まれて、なのに同時に、居たたまれないような切なさに胸が詰まって、ユーノは身を竦めた。これで正しいはずなのに、なぜこんなに不安になるのか確かめようとして目を開けると、まるでそれを待っていたようにアシャが囁いてくる。

「まだ.....寒いかな？」

「うん...」

(そうだ.....確か.....こう答えたんだ)

アシャの手が優しくユーノの頭を抱き寄せる。吐息が髪にかかって、体が思わず震える。甘い.....甘い波.....切なさに心が砕けそうだ。

「アシャ...」

「ん？」

(どうして、ボクは)

ここに居ることに、こんなに安心して、ここに居てはいけないんだと、これほど強く思うんだろう？

「アシャ.....」

「どうした？」

(もう少しなのに)

確信したい、この腕の中に居ることが正しいのだと。なのに、思った瞬間に、氷の底に閉じ込められるようなこの寒さは、胸を断ち割られるような痛みは、どこからやってくるのだろう。

「ごめん.....」

「.....」

涙がにじむ。ここから踏み込めないもどかしさだけではなくて、何か取り返しのつかない出来事を味わっているような気がして。

「ここまでしか.....思い出せない」

嘘をついた。

「.....」

ふっとアシャの体が緊張したが、すぐに緩んだ。静かに手を離してくれる。

「無理なくていい。今は休んでいる」

「うん...」

頷き、ほっとする。アシャの胸に頭を寄せて、腕の中に潜り込む。

(あったかいね.....アシャ)

今はもうそれだけでいい。

それだけで、全ては報われ、何もかもうまくいくような気がして、今度は夢も見ずにユーノは眠り込んだ。

(切ないよな)

すうすうと寝息をたてるユーノに、アシャは小さく溜め息をついた。

(せっかくこいつが側にいる、というのに)

アシャはそろそろと両腕を頭の後ろに敷き込んで指を組み、岩天井を見上げる。

今夜はまんじりともできないだろうとは覚悟の上だが、ユーノにこれ以上手を出さないためにはかなりの克己心がいりそうだ。

毛布の下、まるで胎児のように丸くなって眠っている相手を覗き込む。荒れた頬にまだ微かに涙の跡が残っている。

(笑顔を見てないな)

アシャは眉を寄せた。

そうだ、ずいぶん長い間、ユーノの笑顔を見ていない。特に、ガズラの『忘却の湖』での鬨い以来、ユーノには寛いでいる暇がほとんどなかった。戦っているか、緊張しているか、疲れ切って眠っているか、だ。

(記憶喪失、か)

或いはそれは、運命の神とやらの配慮なのかも知れない。十七歳の少女の身には、あまりにも辛すぎる運命を、一時なりと忘れさせようと言う。

(いや...そうじゃない)

もし、運命の神がそれほど慈悲深いのなら、そもそもユーノにこんな運命を負わせたりはしなかっただろう。ユーノは、世の幸せを一生約束された『銀の王族』だ。もし、そう望むのなら、その人生はもっと明るく楽しいものとなっていたはずだし、セレド皇族の第二皇女として、何不自由ない日々を送ることができただろう。家族を守りたがいたために一人戦って傷つくこともなく、温暖なセレドの地でのびのびと生きていけたに違いない。ドレスを身に付け、髪に花を飾り、愛しい人の名を呼びながら微笑する.....。

『アシャ!』

「!」

ぼんやり夢想していたアシャは、空想の中のユーノが自分の名を呼んだのにぎくりとして我に返り、苦笑した。

(俺も結構しつこいな)

再び視線をユーノに落とす。

男の子のように短い髪は疲れた表情を浮かべる頬に乱れている。細い首筋は痛々しく包帯を巻き付けた肩へと続き、華奢な体には白くくっきりとした傷痕が走っている。

(ドレスの代わりに包帯、花を飾るのではなく剣を髪に当てる少女...)

「『銀の王族』か...」

眉を潜めた。

ラズーンで『銀の王族』を待っているのは、決して楽しいものではない。『氷の双宮』に迎えられた彼らを待ち受けるのは、情け容赦ないラズーンの洗礼であり、時には洗礼を受けたことでこの世に戻ってこれない者もある、心への審問なのだ。

「ん...ユカル...」

ユーノが小さく呟き、思わず顔がひきつるのを感じた。

ユーノがユカルを呼んだのはこれで二度目だ。

唇が少し開いている。微かに寄せた眉が不安そうで、アシャはそっと指先を頬に触れさせた。と、その指を追うようにユーノの顔が動き、ふわりと柔らかい唇がアシャの指に触れた。

(おい、そいつは...っ)

ぎよっとして目を見開き強張ったアシャは、やがて顔を歪めた。

指先にじん、と甘い痺れが走る。そのまま相手の唇に、自分の指を含ませてしまいたくなる、凶暴な欲望とともに。

「.....」

静かにユーノの唇から指を離す。その手をユーノの横に突き、じっと相手を覗き込んだ。

ユーノは目覚めそうにない。指が離れたからといって、追ってくる様子もない。これほど無防備な状態で、アシャの側に居るのは、もう最初で最後かもしれない。

目を伏せ、顔を近づける。ためらいがちに唇を重ねようとして、寸前はっと身を起こした。

何かの気配.....大勢の人間が移動していく気配だ。



「……」

目を細め、アシャは静かに外を伺った。

(ほう)

洞穴の外を軍勢が密やかに移動していく。時折閃く黄色いマントでモス兵とわかる。かなりの数、野戦部隊(シーガリオン)といい勝負だ。概要を見て取ったアシャは、軍の半ばほどにひたてられていく人影を認めた。

近くの村の住人だろうか。それにしても服装が妙だ。人影は二つ、大柄なのと、まるで子どものように小柄なのと。

(まさか)

緊張を高めて人影を目で追う。小柄な方が躓いたらしく、前にのめる。背後にいたモス兵士がぐい、と剣で突くのに、小柄な人影は抗議の声を上げた。

「痛いよ！」

(レス！)

「子ども相手に何をするんだ！」

「うるさい、さっさと歩け！」

低く凄みのきいた声が命じた。同時に何かの示威行動があったらしい。大柄な男も黙り込む。

(イルファの奴もいるのか)

舌打ちし、アシャはすぐに自らの気配を殺した。傍らのユーノを見下ろす。せっかく安らいで気持ち良さそうに眠っているのを起こしたくはなかったが、この場合はそうするしかなかった。

「星の剣士(ニスフェル)……」

モスの軍勢が遠ざかり、気配が感じられなくなると、アシャは低い声でユーノに呼びかけた。ん、と身動きしてユーノが目を開ける。寝覚めの良さは天性のもの、すぐにはっきりした意志を満たしてアシャの目をとらえる。

「何？」

「野戦部隊(シーガリオン)に戻るんだ。来た時と違うコースを取れ。平原竜(タロ)は左手でも操れるか？」

「うん、何とか」

頷いてユーノは、物問いたげにアシャを見つめ返した。

「モスの遠征隊が野戦部隊(シーガリオン)の方へ向かっている。一足先にシートスに知らせてくれ」

「わかった。アシャは？」

「俺はちょっと用がある」

答えて、なおも続きを待つ相手の顔に苦笑する。

「仲間がモスに捕まったようだ。先に動いて何とかする。人質がいては、シートスも動きにくいからな」

「あなた一人で！」

まさか、と言いたげにユーノは体を起こした。痛そうに顔をしかめたが、心配そうな色を隠さないまま、

「無理だよ！ その短剣一振りだろ」

「そう思うなら、早めにシートスに伝えてくれ」

にやりと笑ってアシャは体を起こした。よほどふてぶてしく見えたのだろう、ユーノは呆気にとられた顔でこちらを見ている。この人は馬鹿なのか、それとも本当に凄いのか、と瞳が迷っている。

くすりとアシャは笑った。ささやかな悪戯を思いつく。

「じゃ」

ごく自然な動きで、自分を見返すユーノの頬に唇を触れた。呆然としたまま抵抗もしないユーノが、唇が離れたとたんに我に戻る。

「気をつけて」

「そっちもな」

頷いて洞穴を出る。闇の中を遠征隊に向かって走りながら、アシャは甘ったるく緩みかける唇を何度か引き締めた。

(ユーノは拒まなかったな)

全く望みがないわけでもないらしい。

正直なもので心身が生き返ったような気になってきた。

(今の……キス……?)

ユーノはアシャが出て行った後をぼんやりと見つめ、おずおずと頬に手を当てた。

柔らかく軽く、何かが触れたと思った次の瞬間には、それはもう離れていた。

不快感はなかった。むしろ、心が甘く切なく、鼓動がわずかに速まっている。

(アシャ...)

顔がほてる。毛布の上のマントに気づいて、そっと触れる。

(あの人のだ)

引き寄せ、胸に抱き締める。鼻先を埋めると、安堵が広がる。ここなら安心して眠っていい、そう知らせる深く安らかな感覚。

いつまでもその甘さに浸っていたかったが、すべきことは忘れていなかった。左手で何とか服を羽織る。マントを巻き付け、毛布を掴み、平原竜(タロ)に近寄った。

「.....」

平原竜(タロ)が目を開け、緑の鱗を鈍く光らせて、体を起こした。その背に毛布を投げ上げ、背を低めてくれた平原竜(タロ)に何とか左手一本でよじ上る。手綱を握ると、一人闇夜に駆けていったアシャの後ろ姿を思い出して胸が詰まった。

(あなたのためなら)

強く唇を引き締める。

甘やかな頬への感触、唇に受け止められれば、どれほど嬉しいだろう。上気する体に、自分の願いが何であるか、はっきり覚る。

(あなたのためなら、この身を捨てても役目を果たすよ、アシャ)

「は、あっ！」

低く気合いのこもった声をかけ、ユーノは平原竜(タロ)で野戦部隊(シーガリオン)へと駆け戻って行った。

「いたっ！」

片腕を捻り上げられ、レスファートは悲鳴を上げた。

「何すんだよ！」

きつとした目で、モス兵士の浅黒いしかめっ面を睨みつける。が、それで罪悪感を覚えるような相手ではなかったようだ。それどころか、逆にますますレスファートの細腕を捻り、少年の体を軽く浮かせたまま引きずり始めた。

「や...あ.....い...た...っ」

「やめろよ！ 子ども相手に...」

喚きかけてイルファは体を強張らせる。突き出された剣の切っ先が、冷たい感触で腕に当たり、斜めにずれ込んだと思うと、生暖かいものが腕を伝い降り始める。

「わかった。動くなっただら。じゃあ、レスをこっちに返せよ」

横目で背後の気配を伺いながら続ける。

「所詮、子どもの足じゃ、あんた達の速度についていくのは無理というもんだ。それに...」

ちらっと、痛みを堪えて歯を食いしばっているレスファートの方を見やる。

「そのままじゃ、今にも泣き出すぞ。夜襲に騒ぎつてのは、あんまりよくねえんじゃねえのか？」

「.....」

しばし逡巡している男を尻目に、イルファは素早い目配せをレスファートに送った。涙に潤んでいたアクアマリンの目が少し見開かれ、意図を察したように閉じられる。

「うっ」

顔を歪め、レスファートは絞り出すような声を上げた。

「い.....たあ.....い.....っ.....うっ...」

見る見るポロポロと涙を零してしゃくりあげ始める。掴んでいた男がさすがにぎょつとした顔になって、レスファートの口にごつい手を押し当てる。だが、それでおさまるようなレスファートではない。

「うっ...わ、ああああ...！」

「こらっ！」

ジャントスが振り返って男を睨みつけた。

「そのガキを何とかしろ！」

「しっ、しかし」

「だから、返せって言ってるだろ！」

「黙れっ！」

「いたあいつ！ わあっっ」

「わ、わかった！ ほら、泣かせないようにしろっ」

男はレスファートの腕を捻り上げたまま引きずり、イルファに引き渡した。苦痛に眉を寄せたままのレスファートをイルファは急ぎ抱き上げる。

「大丈夫か？」

「う...ん...」

歯を食いしばってレスファートは頷き、弱々しく笑った。が、澄んだ大きな瞳からは涙が零れ落ち続けている。それに気づいたレスファートが、手の甲で涙を擦り取ろうとしたが、唐突に眉をしかめて動きを止めた。

「どうした？」

「何か...痛いの」

レスファートは不安そうな顔で右肩に手を当てた。

「捻られたからな」

「ちがう.....何か...熱くって.....痛い」

唇を噛み締めて傷みを耐えるレスファートに、イルファは不安を飛ばすように笑い返した。相手の小さな体をしっかり抱え、頭を引き寄せて包む。

「気のせいだろ」

「そう、かな」

ことん、とイルファの肩に頭を乗せ、レスファートは小さく呟いた。

「それより、ユーノのいる方向はわかるか？」

「うん...」

声を落として問いかけると、レスファートも微かな声で囁き返す。

「だいたい、こっちなんだけど…」

「そうか…」

イルファとレスファートは、レスファートの能力を頼りにスオーガの草原を西へ突っ切っていた。そこへちようどやってきていた、野戦部隊（シーガリオン）へと向かうジャントス・アレグノ率いるモスの遠征隊に出くわしてしまったのだった。

もう少し相手が少なければ、イルファも何とかできたのだが、腕利きを集めたジャントスの隊、レスファートを庇いながらでは、こうして捕まるしか長らえる術はなかった。

「レス？」

ふと、レスファートが顔を押し付けている肩のあたりがじんわりと熱くなったのに、イルファは眉を寄せた。少年の頭に手を乗せ、相手が小刻みに震えているのに気づく。

「レス……お前」

「ひ…っく」

「……いつから声を殺すなんてこと、覚えた」

「だ…て…」

レスファートはひくりと体を震わせた。

「イルファ……ぼくを……泣かさ……ない…て…」

「ばか」

ごしごし、と小さな頭を乱暴に擦る。

「こんな奴ら、気にすんな」

「うん……っ」

く、とレスファートはなおも堪えたが、しばらくして身悶えしながら呟いた。

「だめ…だもん…」

「レス？」

「……一ノ……ユーノ…お…」

「レス…」

涙声の合間に絞り出される名前を聞き取って、イルファは思わず顔を歪めた。奥歯を噛み締め、きつくレスファートを抱き締める。頭を引き寄せ頬ずりして、低く唸った。

「わかった。必ずユーノに会わせてやるからな。安心してろよ、レス」

「イ…イルファ…あ」

「ああ、ああ」

「うるさいぞ！」

テメエの方がうるせえんだ、そう怒鳴りつけようとしたイルファは、相手の向こう、岩陰に煌めいた金褐色の反射を見てとって口を噤んだ。夜闇の中、僅かな星の灯でさえも見まごうことないその色合いは。

（アシャ！）

「どうした？」

「あ、ああ、すまん、悪かった」

「うむ」

謝るイルファの口先だけのことばにモス兵は満足そうに頷く。その肩越しに、イルファはもう一度岩の方を見やった。

そっと岩陰から灰白い顔が突き出され、にやりと不敵な笑みを返してくる。

（側に居たのか）

どこからとか、いつからとかはどうでもよかった。アシャが近くに居るなら、イルファにとっては百人力だ。

アシャは親指だけを立ててこぶしを握り、くいくい、と少し先の岩塊が寄り合った所を指差した。進行方向にあるその岩塊群はかなりの広範囲に渡っていて、迂回するには厳しい。だが、そこを通り抜けるとなれば、どうしても隊も分散しがちになるだろう。

（ようし）

イルファは周囲に気づかれぬように、微かに首を頷かせた。

「？ ……イルファ？」

なおも、声を殺して泣いていたレスファートが頭を浮かせるのを、イルファは軽く押さえた。

「少々騒動が始まるぞ。しっかり掴まってろよ」

「うん」

岩陰を伝って次第にジャントス・アレグノの隊へ忍び寄るアシャに、イルファはお互いの呼吸を計り始めた。剣は真横の男のものを奪う。レスを庇い、とにかく逃げる。

（だが、俺の剣は必ず取り戻さなくちゃならん）

イルファは固く決意した。

「星の剣士（ニスフェル）！」

「あつっ！」

「あ、悪い」

戻ってすぐ、再び飛び出しかけたユーノの片腕をユカルが捕らえ、思わず声を上げた。それでもユカルは手を離さず、むしろ咎めるような目になって、

「どこへ行くんだ！」

「決まってる！」

訳のわからぬ問いを投げた相手を睨みつける。

「アシャの所へ行くんだ。野戦部隊（シーガリオン）が動くには、まだ時間がかかるだろ。その前に、あの人の所へ行って、加勢して来る！」

「傷の手当もしないでか！」

ユカルは激しく詰って、ユーノの右肩に広がる鈍い紅の染みを見つめた。

「手当ならアシャにしてもらった。ぐずぐずしてたら、あの人一人で」

「気になるのか」

「っ」

すうっと見る見る顔が熱くなるのがわかって、慌てて反論する。

「何がだよ」

「アシャのことが」

「...当たり前だろ！」

少しためらった後、ユーノは叫び返した。

「あの人は、アシャ・ラズーンで、視察官（オペ）の中の視察官（オペ）だろ！ ラズーンにとって大切な人なら、当然、ボクら野戦部隊（シーガリオン）にとっても大切な人じゃないか！」

「それだけか？」

ユカルのはしこそうな焦茶の目が、悩みながらユーノを見つめた。

「本当に、それだけなのか？」

「.....どうということさ」

「.....お前が女で良かったよ」

「え？」

「お前が女で.....俺は嬉しかった」

「ユカル...」

ユーノは茫然として、頬を紅潮させたユカルをまじまじと見た。

「お前が好きなんだ、星の剣士（ニスフェル）」

きっぱり言って、ユカルは一步、ユーノに近づいた。じり、と無意識に後じさりしながら、顔にさつきよりももっと早く、一気に血が昇ってくるのがわかった。

「そんなこと.....言われても...」

「星の剣士（ニスフェル）」

「そんなこと言われても、無理だよ！」

叫んで、ユカルの熱っぽい視線を避ける。顔を背けたまま、吐き捨てるように、

「だって、自分が女だっていうのも、ついさつきわかって.....それで、そんなこと言われたって.....ボクにはわかんないよ！」

「じゃ、アシャは」

ユカルはじれったがるように口を挟んだ。

「アシャはどうなんだ」

「どうって...」

「前はあんなにアシャを避けてたじゃないか。なのに、どうしてそんなに急に、アシャを心配するんだ？」

「どうしてって」

混乱してくる頭の中繰り返す。

（どうしてって）

何か無性に怖かった。あの人の、あの綺麗な人に魅かれていくのが怖くて、でも、こらえようもなく魅かれて.....けれど、心のどこかで、魅かれちゃだめだという声がかいつも呟っていた。

（だけど...）

だけど？

「星の剣士（ニスフェル）」

「だけど.....どうしようもないんだ...」

どこか遠く、自分の声を聴いている。

「どうしようもなく.....だって.....『私』.....アシャが」

「星の剣士（ニスフェル）！ 物見（ユカル）！」

ユーノのことばはシートスの声に遮られた。

「何をしている!! 移動するぞ!!」

「は、いっ！」

「はい!!」

名残惜しげに、けれどユーノのことばの先を読んだように、ユカルはどこか硬い表情で身を翻し、シートスの元へ走り出した。

後から追いながら、ユーノは心の中に弾けた想いに、どこか陶然とした気持ちを味わっていた。

（アシャが.....好きなんだ）

右肩が熱っぽい。じくじくした痛みが身動きするたびに広がる。

けれどその痛みも、ユーノの想いを消しはしなかった。

（私は.....アシャが.....好きなんだ）

その想いの行き着く先を、未だ思い出せぬユーノだった。

## 2.国境

「ったく、どうしてイルファまで捕まってるんだ」

岩陰に身を潜めながら、アシャはぼやいた。とは言え、ことばはどうんざりしているわけではない。むしろ、いろいろと鬱々とした状態が続いているので、これからやろうとしていることに少々期待もしている。

「...」

僅かに岩陰から顔を突き出し、イルファ達の方を窺う。

モスの遠征隊の中でも、名の知られたジャントス・アレグノ率いる勇猛果敢な隊だけに迂闊には動けないが、遅かれ早かれ野戦部隊（シーガリオン）と当たるのなら、先手を打っておくに越したことはない。

（ん？）

が、アシャはそこに、さっきまでは見なかった男達を見て取った。

岩の陰にでもなっていたのだろう。一人は如何にも横柄そうな平たい顔、もう一人はまずまず整った顔はしているものの、目の奥に妙に不安定なものを浮かべている。

二人ともモス兵士特有の黄色のマントを羽織っているが、それがちらりと翻った瞬間見えたのは、紛れもなく野戦部隊（シーガリオン）の茶色の長衣と緑の鎧だ。

「ふ...ん」

アシャは目を細めて冷ややかな唸り声を出した。

思い当たる名前があった。シートスがここに居れば激怒して、誇り高い野戦部隊（シーガリオン）の名誉のために真っ先に屠るであろう二人の男、言わずと知れたコクラノとジャルノンだ。

（あいつらがユーノを襲った人間か）

心のどこかが冷たく固く凍てつくのがわかる。

（俺のユーノを狙ってくれた借りはきちんと返さないとな）

自分が薄く嗤うのを感じた。引き裂いてもいいと差し出された獲物の前で、容赦なく力をふるえる快感を思う。

ジャントスの隊はじわじわと岩塊の点在する場所へ入っていく。イルファが素早くこちらを見た。目が間合いを計っている。イルファ達の前方に、大きな岩塊が二つ、人が一人、かろうじて通り抜けられるだけの幅をあけて転がっているのに、イルファの前後にいた兵士がやや戸惑って隊を乱す。

（今だ！）

「は...っ?!」

ドッ、ゴグッ！

イルファの側に居た男が気配に振り向いた時は既に遅かった。ひらりと動いたアシャの腕が、傍目には緩慢な、その実、死角を一つも持たない信じ難い動きで閃き、数人の兵士が喉や首筋、鳩尾を殴られ昏倒する。

「レス！」「うん！」「うあっ」「こら!!」「ぎゃっ!!」「どうしたっ...」「敵が...っ！」

たちまち辺りに悲鳴と怒号が充満した。

仰け反り倒れる兵士の間を、イルファは首にレスファートをしがみつかせたまま駆け抜けた。同時に、側の兵士の剣を奪ったが、斬り掛かってきた別の兵士に奪い返される。だが、イルファに対して至近距離はまずかった。

「んなろっ！」

ぶんっ、と風を切る音をたてて、イルファは片腕を振り回した。拳をまともに顔面に食らった相手のはね飛んで岩に叩き付けられ、呻いてずり落ちた。先頭から引き返してきたジャントス達は、転がっている岩塊と混乱して走り回っているモス兵士に邪魔されて、おいそれとこちらへ来れない。

「ぎゃあっ」「ぐわっ！」「はっ！」「ええい退け！」「イ、イルファ！」「しがみついてろ、レスっ！」

「イルファっ！ 受け取れっ！」

アシャは倒したばかりのモス兵士が、イルファの両刃の剣を持っているのに気づき、それを奪って放り投げた。薄闇の中、妙に鮮やかに柄の赤いリボンが宙に閃く。

「おうっ!!」

ごんっ！

一人をぶん殴って倒し、イルファは片手を差し上げた。飛んで来た剣をがしりと受け止め、鞘から引き抜き、にまりと笑う。

「貴様ら、よくも今まで小馬鹿にしてくれたな。お返しをしてやるぜえっ！」

「うわああああっ」

うおおおお、と派手な叫びと共に、手近の四、五人が一気に吹っ飛ぶ。

「お見事」

息も切らせず次々斬り掛かってくる相手をあしらいながらアシャは褒めた。

「まだまだあっ！」「きやああああ」

「.....ほどほどにしとけよ」

勢いを得たかのように、転がる岩塊もしがみつクレスファートもおかまいなしで、野獣さながらに暴れ回るイルファに、思わず眩く。

そのアシャを、隙ありと見たのだろう、突っ込んで来た男が一人居たが、所詮アシャの敵ではない。くるりと身を翻し、柔らかく腕をしならせて舞えば、剣を交えるまでもなく一蹴りで吹き飛ばされていく。イルファの参戦でアシャの敵は一気に減った。いささか物足りなくなったアシャが敵を求めて周囲を見回すと、

「ふん」

いた。仲間が激戦に喘ぐ最中に、こそこそとその場を抜け出していく二人の男。

アシャはにっこり笑った。ふわりと浮かせた体を岩塊へ、続いて幾つかの岩塊を蹴り、混乱の戦場を飛翔するように軽々と越え、逃げ出そうとしていたコクラノとジャルノンの前に降り立つ。

「ひ」

「どこへ行く気だ？」

冷えた声で問いかける。びくりとジャルノンが体を竦め、慌て気味にアシャとコクラノを見比べ、おもねるように応じた。

「あ...俺...俺達は.....その.....今まで...そうだ、今まで、ジャントス・アレグノの捕虜になっていたんだ！」

やはりシートスが聞いたら二重に激怒しそうな言い訳を続ける。

「逃げる機会をずっと窺っていた、な、コクラノ！」

納得の顔も、仲間を助けられたという喜びも見せないアシャに不安になったのだろう、隣のコクラノに同意を求めたが、コクラノは平たい顔を強張らせてアシャを見ている。

「う、嘘じゃない！ 俺達は野戦部隊（シーガリオン）だ！」

答えぬコクラノに、ジャルノンはますますうろたえ、マントを脱ぎ捨て、ことさら下の茶色の長衣と緑の鎧を示した。

「野戦部隊（シーガリオン）？」

アシャは皮肉っぽく唇を歪めた。

「堕ちたものだな、野戦部隊（シーガリオン）も。シートスがさぞ嘆くだろう」

「隊長を知ってるなら、話が早い」

ジャルノンはアシャの嘲笑にも気づかず、続けた。

「どこの国の人間か知らんが、俺達は実は野戦部隊（シーガリオン）の密使なのだ。邪魔をするとためにならんぞ」

「よせ...」

逆に脅しにかかったジャルノンを、コクラノは青ざめた顔で遮った。

「言っても無駄だ」

「だが、コクラノ」

「こいつを知らんのか？ .....こいつは、アシャ・ラズーンだ」

「アシャ...ラズーン.....？」

ぼかんとジャルノンの顔が惚けた。きちんと唇を引き締めていればそれなりな顔も、だらしなく口を開けているだけで数倍愚かに見える。そのままのろろと顔をアシャに振り向ける。

「こいつが...？」

「悪かったな、こういう男で」

アシャは微笑した。だが、すぐに笑みを消して冷ややかな目になる。

「どちらがユーノを追い詰めた？」

「ユーノ...？ ああ.....星の剣士（ニスフェル）...」

ジャルノンがぼんやりと眩き、はっとしたようにまくしたてた。

「お、俺じゃない！ やったのはコクラノだ！ 俺はただ頼まれて」

「黙れ、ジャルノン」

コクラノは追い詰められた表情で剣を抜き放った。アシャを自分が倒すという、幻のような可能性に賭けることにしたらしい。このまま、アシャに服従しても、待っているのはシートス自らの裁きとわかった今、無理からぬことだった。



「お前を倒せば、俺達の安全が手に入るばかりか、俺はたいした遣い手として認められる……そうだろ」

ぎらぎらと血走り光り出す目、口調ほどに楽な仕事ではないことは重々わかっている、だがもう他に生きる術はない、そう決意した顔で飛びかかってくる。

「はあああっっ」

ガシッ。

アシャの短剣が、思いつき振りかぶって落とされてきた長剣の切っ先を受け止めた。ぎりぎりと押されてきても、アシャに焦りは一切ない。むしろ、まるで攻撃の力を楽しむかのように、じり、じり、とほんの僅かずつ押し上げてくる、その剣を挟んでアシャを凝視するコクラノの額に見る見る脂汗が浮く。と、それを見たジャルノンが咄嗟に剣を引き抜き、アシャに切りつけた。

「っ…」

ふ、とまるで体重がないかのように飛び退いたアシャは微かに眉を寄せる。なるほど、伊達や酔狂で野戦部隊（シーガリオン）に居たわけでは不らしい。タイミングの掴み方は素晴しかった。届かないと思った切っ先が最後の踏み込みで距離を縮め、片腕を掠めたらしく痛みが走った。

「でええい！」「たあっ」

押したと見て誇りも何も捨てて、短剣一振りのアシャに長剣二人が襲い掛かる。岩塊を利用して、飛び退き、避け、身を翻し、体の両側に切り込む剣を火花を散らして防御する。イルファはレスファートを抱えた大乱戦の真っ最中、見れば大岩を背に動きようがなくなっている。

（野戦部隊（シーガリオン）が来るまで持ちこたえるか）

「いやああっっ！」「おおうっ！」

獣のような叫びを上げて突っ込んでくる二人を数歩の動きで躲し、剣の切っ先を跳ね上げ、アシャは意識して戦い方を変える。円を描く動き、翻る短剣、舞うような手足、見る見る二人が不安そうな困惑した顔になってくる。同時に浮かんできた表情は恐怖だ。どれほど踏み込み、渾身の力で切り込もうと、どうしても届かない。それどころか、まるでアシャの短剣につられるように体が動いて、攻撃をするつもりがないところへ長剣を導かれ振り回される。

「く、くそおっ」「何だこいつうっ！」

（光栄に思えよ）

アシャは唇の片端で嗤う。

（視察官（オベ）の実戦訓練なぞ、めったに受けられるもんじゃないぞ）

「コ、コクラノ！」「もう少しだあっ！」

押しているはずなのに、足下がふらつき、視界が霞み、剣が重くて今にも倒れそうだ、そう悲鳴を上げるジャルノンにコクラノは悲痛な励ましを送る。

「もう少しなんだあっ」

（確かにもう少しだ）

お前達が身動きできなくなるまで。

アシャは薄笑みを浮かべたまま、速度を上げる。

遠い所からめまい……打ち寄せてきては、ぎりぎりのところで引いていく。

「あ……つつ…」

閃光のように激痛が貫いてゆき、ユーノは思わず体をふらつかせた。握りしめた自分の指先が、氷のように冷えている。

「星の剣士（ニスフェル）！」

側に居たユカルが気づいて叫ぶのに、ユーノは首を激しく振って我に返った。走り続けている平原竜（タロ）の中、転げ落ちようものならあっさりと肉塊になってしまう。

「大丈夫か？」

「大丈夫だ」

声が強張っているのを感じて、ユーノは必死に顔を上げ、笑み返した。ユカルの目が心配そうだ。心の中で謝罪と感謝を呟く。

（ありがとう……そして……ごめん、ユカル）

痛んだ胸を慰めるようにアシャの姿が脳裏に浮かんだ。金の髪、美しい笑み、すらりと立って衣を翻し、こちらを見つめている、その深く鮮やかな紫の瞳が、甘い。

（至上の…宝石だな）

抱き締めてくれた腕、柔らかなキス。

（あなたも、私を好いてくれている？）

もしそうならば、と思った。

もし、そうならば、この戦いにケリがついたら、アシャに気持ちを伝えよう。いや、好いてくれていなくてもいいから、好きなのだと打ち明けよう。野戦部隊（シーガリオン）の一員と、ラズーンの正統後継者ではあまりにも格が違うけれど、それでも某かの望みがないわけではない。たとえば、忠誠を誓い、直属の守り手を志願する事は出来るかも知れない。アシャはあちらこちらへ旅をすると聞いたから、その旅に付き添い、守り、同じ夜と昼と過ごせば、きっとそれは十分満たされた暮らしに違いない。

「星の剣士（ニスフェル）！」

「はいっ」

シートスの声に応じてヒストを進める。それだけのことなのに、ずきっ、と鋭い痛みが肩から走った。急所は逸れていたにせよ、傷を受けている身で当たり前に振舞おうというのが無茶なのだが、アシャの危機にじっとしてられるわけもない。

「ジャントスの隊を見たのはどの辺りだ？」

「もう少し東だと思えます」

答えながら、ユーノはゆっくり頭を巡らせた。転がる岩塊を一つ一つ確認していく。岩塊はごつごつしていて、どれも同じようにも見えるが、焦げ爛れたように黒いものや、文字か紋様のようなものが刻まれたように見えるものもあり、一度しっかり覚えてしまえば、それほど位置の確認には困らない。夜目が聞くのは野戦部隊（シーガリオン）としては当然だ。

「という、かなり北東だな……モスとラズーンの国境付近になるか」

「そこまではいかないでしょうが…」

重い闇は次第に薄れつつあった。風が爽やかな澄んだ気配を含み始めている。夜明けが近いのだろう。

「と、すると……うむっ…」

シートスが不意に声を緊張させて、前方に目を凝らした。つられてそちらを見たユーノも、はっと目を見開く。

赤茶色の岩が転がる向こうに、微かに砂埃が立って、もやもやとした空気が蠢いている。

「隊長！」

「らしいな、ユカル！」

「はいっ！ オーダ・シーガル！ オーダ・レイ!!!」

シートスの命令を待っていたユカルはぐいっと頭を逸らせ、高々と槍を突き上げた。

「ユカル、クアント！ オーダ・レイ！」

「レイ！」

「レイ、レイ、レイ！」

「レイ、レイ！」

すぐに怒濤のような声が呼応する。次第に速度を上げる平原竜（タロ）の群は、地響きをたてて草

原を疾駆した。舞い上がる埃と草、上がる鬨の声、振りかざされる紅の房の槍、刀剣の煌めき、額帯（ネクト）に乱れる髪、鳴る鎧、翻る茶色の長衣の裾！

「おおおおっ！！」

見る見る近づいたジャントス隊の混乱に、野戦部隊（シーガリオン）はまっしぐらに突っ込んだ。

「きゃ...」

「レス！」

危うく剣に難払われかけ、首を竦めたレスファートをイルファが引っぱり寄せる。

「っっ！」

一瞬遅く、レスファートの滑らかな頬を切っ先が擦った。真紅の筋が浮かび上がり、つうっと紅の糸を引く。

「てめえらあっ！」

ガシッ！

目を剥いたイルファは、怒りに任せて相手を剣でぶん殴った。うめき声一つ立てずに絶命し倒れていく男、その向こうを見やったレスファートがいきなり頓狂な声を上げる。

「ユーノ！」

「レス?!」

「ユーノ!!」

ばあっと明るい笑みを浮かべて走り出そうとするレスファート、その先を見たイルファの視界に、地響きをたてて押し寄せてくる竜の群れが映った。あれこそは、噂に聞くラズーン守護の野戦部隊（シーガリオン）と呼ばれる隊、しかもその先頭付近、黒髭の男の隣に、短い焦茶の髪を乱した小柄な少年が馬を駆っている。きっとこちらへ向けた瞳は黒、表情が以前より険しいものの、それは紛れもなく探し求めたユーノの姿だ。

相手も追い詰められたレスファートとイルファの姿を見て取ったのだろう、頷いて速度を上げ、見る見るこちらへ駆け寄ってくる。

「ユーノ！ ユーノ！」

レスファートが歓声を上げて無鉄砲に走り寄ろうとするのに、慌てて手近の敵を片付ける。少年の目にはユーノしか入っていないのだ。

（相変わらず凄い腕をしてやがる）

これほどの混戦の中を楽々と切り抜けてくるユーノに、イルファは思わず満足の笑みを漏らす。

（たいした奴だ）

離れている間にまた一層、動きに切れが増したんじゃないか。

「ん？」

だが、その視界の端にアシャの慌てた表情が飛び込んできて、眉を寄せた。コクラノ、ジャルノン、二人の男をあしらいながら、アシャが何かを伝えようとしている。

（何だ？）

レスファート？ 確かにそうだ。レスファートを何とかしろと言っているようだ。

（どういう意味だ？）

しきりと合図を送ってくるが、こちらも、駆けつけてくれている味方の軍勢を頼りにかろうじて保っている状態、飛び出そうとするレスファートを庇うので手一杯だ。そうこうしている間に、ユーノは二人の前にやってきていた。

「大丈夫か?!」

ヒストの上から二人を見下ろす。

「ああ！ 久しぶりだな、ユーノ」

「久しぶり？」

思わずほっとして笑いかけたイルファに、ユーノは訝るような視線を向けた。イルファの側に居るレスファートには目もくれない。

「どういうことだ？」

不審そうに問い返されて、思わず苦笑いする。

「どういうことって」

悪い冗談だぞ、と言いかけたイルファは、レスファートがびくっと身を強張らせたのに気づいた。少年を振り返ると、今の今まで浮かべていた、この上なく幸せそうな表情を失っていた。顔色は蒼く、いつもよりなお色素を失ったように白々としたアクアマリンの瞳が、馬上のユーノを信じられぬよう見つめている。

「ユー.....ノ...？」

レスファートは掠れた声を絞り出した。

「うそ...だよ...ね.....」

「？」

ユーノは訳がわからぬように、ようやくレスファートへ目を向けた。気が逸れたと思えたのだろうか、背後の野戦部隊（シーガリオン）が押さえ損ねたモス兵士の一人が飛びかかったのを、瞬間振り向く動作で防ぎ、あっさり相手を敗退させる。そのまま、再びレスファートを振り返ったが、いつものような笑顔は見せない。ただただ不審げな、不安そうなレスファートを見つめる視線の違和感に、イルファもようやく気づいた。

「ユーノ？」

「うそ.....で...しょ...？」

レスファートがもう一度、堪え切れぬように問いかけるのに振り向く。

「レス、どうしたんだ？」

「ユー...ノ...」

きゅうっとレスファートの眉が切なげに寄った。瞳が見る見る曇り、白くなった唇が震え出す。

「そ...んな...」

「おい！ レス！」

異常な様子に思わず少年の肩を掴む。とたん、ぐらりと揺れた相手の体を危うく支える。レスファートはユーノを食い入るよう見つめている。信じたくないことを見ないために、より心の奥深く入っていくような視線だ。きよとんとした顔のユーノと、瞳一杯に涙を溜めているレスファートを、イルファは交互に見比べた。

（何だ？）

聞こえないことばで会話しているようなユーノとレスファートの間に、何が起こったのかわからない。

「星の剣士（ニスフェル）！」

戦い続けている野戦部隊（シーガリオン）から呼ばれて、ユーノは振り返った。ユカルを始めとする野戦部隊（シーガリオン）が楽な戦いをしているのではないと見て取ったのだろう、

「アシャの側に居てくれ！ すぐに加勢に戻る！」

言い捨ててあっさりと身を翻す。あり得ない振舞いにイルファも呆気にとられた。

「おい！ ユー...!!!」

呼び止めようとして、レスファートの体から力が一気に抜けていくのにはととする。

「レス?!」

「...い...ない...」

「え？」

「ユーノ.....心の...中.....ぼく.....いな...い」

俯いたレスファートの目から涙が零れ落ちて散る。

「どこ.....にも.....ぼく.....い...ない.....」

「レス!! おい！...っ！」

イルファの背筋を寒くするような虚ろな口調で呟き、レスファートはイルファの腕に倒れ込んだ。

「はっ……っ！」

ヒストを駆って戦場のただ中へ戻ったユーノは、アシャの姿を認めて思わず息を呑んだ。

(凄い)

短剣たった一振り、コクラノとジャルノンを相手にしている。円弧を描く手足、緩やかな舞踏を思わせる動きは、よく見れば全て細かく計算されていて、どこにも死角を作らず、隙も生み出さない。鮮やかに空を切り裂いていく金の短剣は、一見、荒々しく凄まじい破壊力を持っているように見えるコクラノとジャルノンの剣を、ほんの少しも近づけていない。

(もし、この世に戦神がいるとしたら、きっとアシャのような人だろうな)

眩くて、思わず目を細めて見惚れたユーノは、次の瞬間殺気を感じて身を伏せた。パサッ…と一房の髪が流れて落ちる。視界の端に動いた人影に、ユーノは叫んでヒストの向きを変えた。

「卑怯だぞ！ ジャントス！ それがモスに名高いジャントス・アレグノのやり方か！」

「卑怯…」

相手はくっくっく、と妙に嘎れた笑い声を上げた。

「卑怯などということばは、我らのことばにはない、星の剣士（ニスフェル）」

ジャントスはゆっくり唇の両端を吊り上げた。禍々しい気配を満たして剣を構える。その背後に、黒く重い霧のようなものが漂っているのに、ユーノはぞくりと身を震わせた。

(何だ?)

この世ならぬもの、だが、決して見知らぬものではない、その気配。記憶にはなかったが、それは自分に命の危険をもたらすものだと思っていた。同時に、根拠などないのに、この戦いに負けるかも知れないという恐怖が湧き起こる。なぜなら、

(剣に隙があるんだ)

心の中で誰かのことばが弾けた。

(私はそれを埋め切っていない)

だからこそ、殺されかけたんだ。

(あの城で……あの湖で……あの荒地で…)

「え…？」

がっつり、と後頭部を殴られたような気がした。一瞬視界が霞んでぶれたような奇妙な衝撃。心のどこかに穴があって、そこからポロポロと零れてくるものがある。

(城？ 湖？ 荒地?)

そんなところへ遠征したのだろうか。

(どこ……?)

覚えがない。

(私…は……私は? ……)

踵から崩れ落ちていくような不安に瞬きする。

「覚悟！」

一瞬の隙を、ジャントスは、いや、その背後の黒い霧は見逃さなかった。翻った剣が、ユーノが咄嗟に反応し切れない経路を生き物のように襲ってくる。

ガッ！

激しい音とともに、かろうじてその一撃を受け止めたものの、ユーノの頭は混乱し切っていた。

(この次、相手は腹を狙ってくる)

何かが囁く。

(前もそうだった、あの時は腹を抉られて)

激痛に崩れれば、鮮血が乾いたバルコニーと大地に散った……。

(前…?)

いつ?

(私…?)

どこで?

「あ…う…」

ギチギチと剣が鳴った。必死に支えている右肩に痛みが溢れる。引き千切られるような激痛とともに、生温かなぬめりが肩を濡らし始める。骨がきしみ、筋肉がたわみ、傷が新たな血を吐く。

(右肩が…)

剣を構えたまま、逆らい難い圧力で体から削ぎ落とされていく感覚。

「く...っ」

(誰か...助.....けて...)

心の片隅がついに小さく悲鳴を上げた。が、次の瞬間、

(何を言ってる！ それでも、セレドのユーノか！)

厳しい檄が飛んできた、でも、

(だめ...だ...)

ぐらりと体が揺らめいた。ヒストの背から滑っていくのがわかる。目の前が一気に暗くなる。

「！」

だが、その体はがっしりと中空で抱き止められた。薄目を開けると、ユーノを抱きかかえた人間は、いつの間にかヒストに跨がって、彼女の代わりにジャントスと剣を交えている。

(誰...)

しっかりした腕だった。ユーノを胸に抱きとめ、しかも柔らかく包んでくれている。

「く...くそっ」

ジャントスの歯噛みする声が聞こえる。何とか体を動かして、自分の剣を探そうとした腕は、そつと、しかし断固として押さえられた。

「じっとしている.....俺がいるから大丈夫だ。守ってやるから...」

低い声が胸から直接響いてくる。

(アシャ...)

そのことばもどこかで聞いた気がする。

(守ってやる.....本当.....？ .....姫として...守って...くれるの...?)

体から力を抜く。それでも、腕はユーノを支え続ける。

(アシャ...)

小さく息を吐いて安堵する。

(私.....このままで.....いても.....いい.....?)

「ぐっ...あっ.....ああっ!!」

ジャントスの絶叫が響いた。どうっ、という重い地響きが続く。ジャントスが倒れたのだろう。

「くそっ.....退けえっ！ 退けえーっ!!」

切羽詰まったモス兵士の声がした。目を開け、体を起こそうとするユーノを、アシャがやんわりと拘束する。

「動くな.....軽傷じゃないんだ」

「うん...」

頷くユーノにアシャは深い色の目で覗き込んでくる。

「コクラノ...は？」

「...シートスがケリをつける」

厳しい表情になって言い放ったアシャは、すぐに瞳を和らげた。

「ばか」

甘い声で囁く。

「こんな怪我で動く奴があるか」

「ごめん...」

「ほんとにお前ときたら...」

小さくついた吐息が睦言のように切なげに聞こえた。

「こうして永久に抱き締めててやろうか...？ もう無茶をしないように」

「アシャ...」

蕩けるような声音、耳元で眩かれて、こちらの胸まで甘くなる。極上の酒を体中に注がれたようだ。ユーノは目を伏せて、その温かな感情に浸る。包まれて温められて、心が溶けていく.....溶けて小さな流れとなり、アシャヘアシャへと流れていく.....。

「星の剣士（ニスフェル）！」

「ん...」

ユカルの声がした。慣れ親しんだ、平原竜（タロ）の駆け寄ってくる音も。瞬きするユーノに、アシャは無言で体を起こしてくれる。

「大丈夫かあっ！」

すぐ側まで駆け寄ってきたユカルは心配に顔を歪めている。

「大...」

丈夫、と続けようとしたユーノは、そのユカルの向こうのコクラノ達に気づいた。踞り身動きできないようなジャルノンとは対照的に、石突きを地面に突いて仁王立ちしたコクラノが、今しもその槍を持ち上げ、ユカルの背中めがけて投げつけようとしている。

「コクラノ、貴様っ！」

まっすぐに駆け寄っていくシートスの叫びとともにその手から槍が飛び、寸分変わらずコクラノの胸を貫いたが、槍は既にコクラノの手を離れている。

「ユカル...っっ」

「星の剣士（ニスフェル）!!」

「ユーノ!!」

迷う間もためらう間もなかった。アシャの腕を離れ、渾身の力でユカルを突き飛ばしたユーノの右肩を、飛んできた槍が掠める。

「あ、うっ！」

悲鳴を上げて空に投げ出した体を、ユカルとアシャが伸ばした腕が受け止める、その瞬間、体を駆け抜けた鮮烈な痛みと共に、頭の中に閃光が走った。

（あ、あ、あ！）

今までの出来事が絵巻物のように一気に巡る。所々に空いていた小さな黒い穴が裂かれるように開き、そこから一気に記憶がなだれ込んでくる。

（私...私は...）

視界に入り交じる光景、脳裏を駆け抜ける幻、アシャ、野戦部隊（シーガリオン）、ユカル、星の剣士（ニスフェル）.....ぐるぐる回りながら右肩の痛みを増していく。

「.....ーノ！ ユーノ!!」

どれぐらい我を失っていたのだろう。

『自分の名』を呼ばれているのに、我に返る。

「う...」

瞬きして見上げる真上にアシャの顔、そしてその横に、見慣れてはいるが、遙か遠い昔の知り合いのように思える顔.....野戦部隊（シーガリオン）の物見（ユカル）。

「畜生っ！ コクラノの奴、最後の最後まで見苦しいっ！」

「大丈夫か？」

「ユカル.....アシ.....！」

苛立つ二人を宥めようと一人ずつの名前を呼びかけ、ユーノはぎくりとした。

「ユーノ？」

不審そうにアシャがユーノを覗き込んでくる。

鮮やかで華やかな、その、美貌。

（思い出した.....）

熱い波が見る見る心に広がっていく。

思い出したのだ、『すべて』。

（『姉さまの』、アシャ）

傷ついた自分の体を抱えてくれている人の名前はアシャ・ラズーン。ラズーンの第一正統後継者であり、視察官（オベ）の中の視察官（オベ）であり.....幾度もその名を呼ぼうとした人であり.....結局はいつもいつもその名を呼べなかった人、であり.....セレドのレアナの想い人.....であり.....。

右肩から再び激しい波が広がって、心を揺さぶっていく。

体が重い。熱っぽく燃え上がっていく視界が潤む。

（私は.....ユーノだ）

レアナの妹、セレドの第二皇女、『銀の王族』。

（ユーノ.....なんだ...）

ふ、と目を閉じた。呼吸が荒く乱れていくのがわかる。ついに限界を越えてしまったらしい。

「ユーノ！」

「星の剣士（ニスフェル）！ しっかりしろ！」

「ユカル、天幕（カサン）の用意を頼む！」

「わかった！」

慌てたように、平原竜（タロ）が側から駆け去っていくのをぼんやり感じた。

「ユーノ」

低い声でアシャが囁き、そっと髪を撫でてきた。思わず体を強張らせるユーノに手を止める。

「傷に障るか？」

「う...ううん...」

首を振り、ユーノはきつく唇を噛んだ。ことさら肩の痛みを意識を集める。

（アシャ...）

揺れる心が呻く。そうしなければ、口に出してしまいそうだった、思い出さねばよかったと。

（アシャは.....レアナ姉さまの想い人だった.....んだ.....）

それでも打ち明けてしまいたい。

強烈な衝動が心を揺さぶる。

(アシャ.....好きなんだ...)

ことばが胸から唇まで膨れ上がり、目を見開いた。アシャが心配そうに自分を覗き込んでいるのに気づく。

打ち明ければ、この温かな目を失ってしまうかも知れない。

(でも...こんな風に抱かれたままなんて.....苦しすぎる)

いくら動けないとはいえ、これでは一種の拷問だ。

(でも.....でも)

決心がつかずに目を逸らせ、ふとアシャの腕に一筋紅が走っているのに目を止めた。きりり、と心の奥が一気に硬直する。

(傷を...負わせた?)

「ア、シャ...」

「え? ああ、大丈夫だ。かすり傷だ、お前の肩に比べれば、な」

軽く片目を閉じて笑うアシャに胸が詰まった。

(打ち明けてどうする)

ユーノは『運命(リマイン)』だけではない、カザドにも狙われている。

(アシャが優しいから.....守ってくれるからといって.....打ち明けて? 引き込むのか? 私の戦いに?)

そしてまた、こんな風に血を流させるのか?

(嫌だ)

強い想いが胸に砕けた。

(あなたが傷つくぐらいなら、私が血を流した方がいい。あなたが苦しむぐらいなら、私は.....どこかの闇に沈んだ方がいい)

きつく噛み締めたせいで唇を噛み切ったのか、鉄の味が口の中に広がった。

(ご...めん.....アシャ...)

「ユーノ?」

訝しげなアシャの顔を見上げて、声にならない。

(私のせいで.....傷つけた.....守れなくて.....ごめん.....)

そろそろと俯いてしまったユーノの顎を、唐突に掴んだアシャがそっと押し上げる。

「どうした? 傷が痛むのか? .....ああ.....唇...切ってるな...」

感うような声、顎に当てられていた指がゆっくりと唇を拭っていく。走った痛みを顔を引き攣らせたユーノを、アシャは奇妙な表情で見つめた。

「ユーノ...」

「.....ん」

「.....こんな時になんだが...」

アシャは珍しく口ごもった。瞬きを繰り返す、紫の目が濡れているように艶を帯びる。

「.....これ以上、お前を放っとくと.....本当にどこかへ行ってしまうかねないから...」

「...?」

口調は柔らかくて熱っぽい。

荒く呼吸を繰り返しながら、ユーノはそっと首を傾げた。アシャが何かを伝えようとしている、けれど、何を言いたいのがわからない。紫の瞳は真剣な色の中に、妙に心を震わせる光を含んでいる。

「ユーノ...いや、ユーナ・セレデイス」

本名を呼ばれて瞬きする。

(何、だろう?)

もう旅は続けたくないと言うのだろうか。もうユーノの側にいるのはごめんだとでも言うのだろうか。

「お前.....その.....もし、よければ、だな.....その.....俺の」

「アシャ! 天幕(カサン)の用意ができたぞ!」

「っ」

ユカルの叫びにアシャは複雑な表情でことばを途切れさせた。そのまま少し迷っていたが、やがて自分に言い聞かせるように、低く呟いた。

「手当が先だな」

(何を...言うつもりだったんだ?)

ユーノは閉じられたアシャの唇をじっと見る。

(俺の、の後は...?)

胸を過ったのは、優しく甘い空想。



(アシャの.....付き人として、ずっと側に、とか...)

「くっ...」

すぐに自分の愚かさを嗤った。

(いいかげんにしろ、ユーノ)

自分の詰り、目を閉じる。

(ただ今は、傷に甘えて一時の休息を取るだけだ)

もう少しだけ、もう少し気力が戻るまで。

繰り返し自分に言い聞かせて、ユーノはきつく口を噤んだ。

「え？」

ユーノはアシャのことばに振り返った。

モスの遠征隊との戦いから既に一週間以上たち、右肩の傷も、まだ剣を操れるまでは戻っていないが、日常生活に支障がないところまでは回復していた。

裏切り者コクラノの死体からは野戦部隊（シーガリオン）の衣服、鎧が剥ぎ取られ、名もない男としてスオーガの草原に葬られていた。もう一人、ジャルノンの方は野戦部隊（シーガリオン）から追放され、その後の消息は聞かなかったが、ああいう二重の裏切り者は、たとえモスを頼っていたとしても、碌な末路ではないだろうと思われた。

そして今、野戦部隊（シーガリオン）は、アシャ達三人を加え、再びラズーンへの帰還の旅に出ようとしていた。

「お前の傷がもう少し落ち着くまで言わないでおこうと思ったんだが、レスファートが...」

続くことばにユーノは大きく目を見開く。

「レスが...反応しない？」

「たぶん、星の剣士（ニスフェル）としてのお前の心象を読んで、そこに自分がいけないことに衝撃を受けたんだと思うが」

みなまで聞かず、ユーノは天幕（カサン）を飛び出した。

「よう、星の剣士（ニスフェル）！」 「もういいのか？」

野戦部隊（シーガリオン）の面々の呼びかけにも頷くだけで応じ、イルファとレスファートが寝起きている天幕（カサン）に飛び込む。

「イルファ！」

「おう、ユーノ、傷はもう」

「レスは?!」

「ああ...」

イルファはやや疲れた顔で頷いた。

「何とかしてくれ。俺の方が堪える」

「どこにいるの？」

「一人になりたいらしくて、大抵は草地に出てるが」

再びユーノはイルファの天幕（カサン）を飛び出す。

草地、とは、野戦部隊（シーガリオン）の野営場所から少し離れた、赤褐色の草はらのことだ。

（いくらモスを撃退したからって）

子ども一人放置しておくものじゃないだろう。

苛立ちながら周囲を見渡し、声を上げる。

「レス！」

一渡り眺めた草地に少年の姿はない。

「レス！ どこにいるんだ?!」

「...」

ふ、とどこかで気配が動いた感じがして、口を噤んで感覚を研ぎすませた。

さわさわと草が風に波打つ。弱い日差しが赤茶色の草原を淡く照らしている。

その草波を追っていた目のある一点で止めた。白銀の光がきらりと草の波間に輝いたのだ。

「レス？ .....そっちへ行くよ？」

呼びかけながら、それでも怯えさせないように、一歩、また一歩と草を掻き分け進んでいく。案じたように、レスファートはすぐに立ち去らず、プラチナブロンドが風に煌めく光がみるみる間近になった。だが。

「レス...」

少年のすぐ側まで来て、ユーノはことばを失った。

レスファートは小柄な体に、野戦部隊（シーガリオン）の茶色の長衣を着ていた。子ども用というのはなかったのだが、手先の器用な者がレスファート用に余分の布で仕立ててくれたのだ。アシャやイルファは先のモス遠征隊との戦いの功を認められ、額帯（ネクト）を授けられていたが、レスファートは茶色と緑の紐を組み合わせた額飾りを巻いている。

そして、少年は、草の波の中、何をすることもなく、ぼんやりと膝を抱えて座っていた。

瞳の虚ろさはぞっとするほど、薄い色だけに余計に精気がないように見える。結んだ唇は笑みもせず、白い頬には微かな血の色が頼りなく浮かんでいるだけだ。

「レスファート？」

声をかけても、少年はユーノを振り向きもしなかった。

じっと前方、いやおそらくは、この世界ではない、何か遠いものを見つめている。

「レス」

手を伸ばし、ユーノはそっと少年の肩に触れた。

だが、やはりレスファートの反応はない。ユーノの手を払いのける仕草はないが、それを受け入れる様子もない。

「レス...」

熱く苦いものが湧き上がってきて、ユーノは跪いてそっとレスファートの肩を引き寄せ抱き締めた。

「ごめん.....レス...」

謝っても少年は身動き一つしなかった。抱かれたまま、人形のように無言で身を委ねている。自分がこれから何をされようと、どういうことになろうと全く関心がない、その無関心さにぞっとする。

「レス...」

(どうしよう)

自分が愚かな夢に漂っている間に、繊細な心をここまで砕いてしまった。

(どうしよう)

苦しくて哀しくて、眉を寄せ唇を噛む。

「ユーノ.....ユーノ！」

アシャの声が響いて、ユーノは滲んで来た涙を飲み下し、立ち上がった。

「ここだよ、アシャ」

「食事だぞ」

「わかった。お腹減ったな」

強いて元気に笑ってみせ、ユーノは頷いた。再びしゃがんで、レスファートに囁きかける。

「レス、ご飯だって。一緒に行こう」

「.....」

「レス」

答えぬ少年の手を握り、そろそろと引いた。一瞬、拒むような抵抗を見せたレスファートは、心の何かにふいに気づいたように唐突に立ち上がる。無表情のまま、ユーノに手を引かれて歩き出す。

心得て、アシャは草地の端で待っていてくれた。痛ましいという顔でユーノに肩を並べる。

「辛かったら、俺が代わるぞ」

「.....うん」

ユーノは首を振った。一瞬目を閉じ、胸を食い破る傷みを堪え、弱く笑ってアシャを見る。

「...ボクの責任だ。ボクが側にいるよ」

するりとアシャの手が頭に回り、ユーノの髪を優しくまさぐった。

「わかった。無理するな？」

「...うん...」

目を閉じ、その温かさに憩ったユーノは、ふいにぐいと太腿のあたりを押されて目を開いた。見ると、レスファートが彼女とアシャの間に潜り込んできて、二人を離そうとしている。相も変わらず無表情なままだが、唇を引き締め、やや緊張してるようだ。

「レス...そうか」

アシャが思いついたように顔を上げた。やや芝居がかった大袈裟さでレスファートを押しのけんばかりにユーノを引き寄せ、抱き締める。

「な、なに...っ」

かあっ、と顔に血が昇ってくるのに慌てて問いかけると、アシャはじっとレスファートを見下ろしている。

「見ろよ」

「え...あ...レス？」

それまで全く表情のなかったレスファートの瞳が、生き生きと潤んできつつあった。手を伸ばし、ユーノの長衣を掴み、引っ張りながら小さく唇を開く。

「や.....っ.....や...っ」

「お前がよほど深く刻みつけられてるんだ」

アシャが静かに呟いた。

「俺がお前を奪っていくと思ってるのさ」

「レス...」

「さっき、お前がレスの手を引いてきたから、もしかしたらと思ったんだ。何せ、これまでイルファからさえ逃げていたからな」

「やあ...っ.....やっ...」

レスファートはぼろぼろと涙をこぼしながら、赤ん坊の片言のように繰り返した。ユーノの長衣をしっかり握り、渾身の力で引っ張っている。表情が次第に切羽詰まった怯えたようなものになってくるのに、ユーノは急いでアシャから離れた。

「あ...っ」

勢い余ってよろけ、うろたえたように手を伸ばしたレスファートを思い切り抱き締めてやる。そのユーノの首にぎゅっとしがみつ、レスファートは小さくしゃくり上げ始めた。

「えっ.....えっ.....や.....やあっ.....」

「大丈夫だよ、レス」

しがみついて泣き続けるレスファート、その温かみが愛おしく切なく、自分もまた泣きそうになりながら、ユーノは繰り返し頷いた。

「もう、どこへも行かない。ずっとここにいますから」

レスファートはそれから以後、片時もユーノの側を離れなくなった。食事の時も、移動するにも、ユーノの長衣を片手で握ってくっつき回る。

「どうなってんだ、ありや」

小さな器に入れた食べ物を吹いて冷ましてやったユーノが、一さじ、また一さじとレスファートに食べさせてやるのに、イルファがぼやく。

「あれじゃ、まるっきり赤ん坊だぜ」

「今のところは、それでいいんだ」

アシャは考え込んだ声になっている。

「レスは心の拠り所を失ってしまった。自分がどこにいるのか、わからなくなっている。ああやってユーノと接触することで、ちょっとでも心が開いてくれるなら、それに越したことはない」

「へえ、ややこしいな」

イルファが溜め息をついた。

「まあ、確かに前よりは今の方がましか」

「レス、あーん」

「あー...」

二人の会話を耳に、ユーノは次の一さじを開いたレスファートの口に入れてやる。

時間はかかるだろう、だが前のようにレスファートが笑うなら、ましてやそれが自分のせいなのだから、どれほど時間がかかっても構わない。幸い、野戦部隊（シーガリオン）と同道するなら、カザドや『運命（リマイン）』もそうおいそれと手を出さないだろうし、ラズーンへの道案内も得られているのだから、焦る必要はない。

「んむ」

「しっかり囁んで...っつて、ほら、レス」

口の回りについた食べかすに苦笑して、ユーノは指を伸ばす。セアラでもこんなことはしてやらなかった。もし、子どもが産まれたら、こんな感覚なのだろうか。自分の与える一さじをもぐもぐと含む唇も、一所懸命にこちらを見つめている瞳も、このままずっと食べさせていてもいいぐらい愛おしい。

「.....」

ふい、とレスファートは口を動かすのを止めて、小首を傾げた。ユーノを見つめる瞳の奥に、一瞬もがくような苛立たしげな波が動いた、と見えた。

「もう一口...いらぬのか？」

「.....」

レスファートは無言で頷き、いきなりぴつたりとユーノに身を寄せてきた。膝にしがみつくようにくっついているのに、なお不安なように小さな両手でユーノの長衣をきつく握りしめる。

ここ数日、時折こんな様子がある。

それは何かを思い出そうとしかけて、その思い出すことに伴う気持ちの揺れを何とかやり過ごそうとするような仕草だ。

まるでちょっと前の私だよな、そう苦笑しかけて、ユーノは顔を引き締める。

（ことばがでないな）

器を置き、そっとレスファートの頭を撫でる。始めの頃は触れるたびごとに体を強張らせていたのだが、最近ユーノがレスファートのどこに触れようが、任せ切ったように身動き一つしない。

心は緩やかに開かれている、進歩は進歩だ。進歩は進歩なのだが。

（このままってことは、ないよな）

ずきりと胸が痛んだ。

甘えん坊だけど、元気一杯はしゃいでいたレスファートが脳裏に浮かぶ。パチツ、と鋭い音をたてて爆ぜた炎に、日差しを浴びて満面の笑みのレスファートが重なる。

(それほど.....私が必要だったの、レス...?)

心の中で囁いて、レスファートの髪を手櫛で梳いた。気持ち良さそうに目を閉じているレスファートの指が、次第に緩んでくる。ふっとレスファートが目を開けた。ユーノがそこにいるのを確かめると、再び眠そうに目を閉じる。

(あ)

その唇がほのかに笑んだのに、慌てて顔を上げた。

(アシャ!)

「ん？」

じっと彼女を見守っていたらしいアシャが気づいて、足音を忍ばせ近づいてくる。そっと背後から覗き込んでくるアシャに、ほっとしながら告げる。

「今ね、レスが笑ったよ」

「そうか」

「うん...にこって、ほんの少し...」

「ああ」

「大丈夫だよ、少しずつ、戻ってくるよね...」

小声で話しながら、つつい目頭が熱くなってくる。

「元のレスに...戻ってくれる...よね...?」

「...もう少しだな」

アシャが低い声で囁き返してくる。

「後はきっかけだ」

「うん.....野戦部隊(シーガリオン)の行程、遅れてるんだろ...? .....ごめん、ボクのせいで」

「気にするな」

ぼん、と温かな掌が頭に載った。

「それより、レスを天幕(カサン)に運ぼうか。このままでは寝冷えする」

「頼むよ。もう寝入ってるから」

「よし」

アシャがそっとレスファートを抱き上げ、天幕(カサン)へ連れていく。後に従ったユーノは、レスの笑顔に広がった安堵で胸が一杯で、背後でぶつくさ唸ったイルファの声は聞き取れない。

「...気のせいか、夫婦に見えるぞ。気のせいだよな? ええ? 俺の気のせいだよな?」

寝苦しい夜、寝苦しい闇。

「んん...」

中途半端な状態で、今一つ眠りに落ちることもできず、ユーノは片腕を枕にしているレスファートを見やる。温もりが、レスファートの小柄な体から広がってくる。

(子どもって.....体温が高いんだな)

前も同じようなことを思った、とぼんやり考えた。

あれはいつ頃だっただろう、レアナのベッドに潜り込んで叱られたのは。夜の孤独に耐え切れず、そっと母親の元へ忍んでいった夜は。

柔らかく刻まれる呼吸のリズム、乾いたスオーガの冷えた大地の上で、人の吐息はこれほどまでに温かい。

温もりには、独特の甘さがあることを、ずっと忘れていた気がする。

(ううん.....覚えていたら、私は今頃生きていない...)

自室のベッドで一人凍えて、胸を抱いて泣きながら眠った夜があったからこそ、刺客はユーノを狙って部屋を襲った。レアナやミアナ、セアラ等を巻き添えにしなくて済んだのだ。

長く重い夜、刺客の気配に身を竦めながらも剣を手元に引き寄せていたからこそ、今日まで生き抜けたのだ。傷ついても倒れても、絶対に生き延びると決意していたからこそ、幾度もの危機を乗り越えられた。

(一人で.....頑張ったから)

今さら孤独やその夜の代償を求める気はなかったが、レスファートの温もりは胸を甘く締め付ける。

薄く開いていた目を閉じる。

(でも.....ずっと.....こうして一人.....なんだろうなあ...)

くすり、と笑った。残った片腕で目を覆う。

一人で生き、一人で死ぬ。

自分の生きる道がどれほど厳しいものなのか、重々わかっている。その道を共に歩ける人など、ま  
ずいない。

もっと美しい娘だったら、誰か申し出てくれたらどうか。もっと素直で優しい娘だったら？ もっ  
と賢く可愛らしい娘だったら？ もっと.....もっと。

(もっと、守りたいと思うような、娘であれば?)

「ふ...」

それでも、夢見たことはあったのだ。誰か愛しい人のために、美しい花嫁衣装を身に着ける日を。

ここまで傷だらけになった体では、もう遠い、遠い夢ではあったが。

だから、覚悟はしている。

この先も一人だ。これまで同様、一人で生きて、一人で死ぬ。おそらくは、誰も気づくことない荒  
野の果てで。

だから今ここで関わり合っている人々は、幻のようなもの。

けれど、その幻の、なんと温かく美しいことだろう。

(ひどいね...アシャ...)

当てた腕の下から熱いものが流れ落ちた。

(誰がこんな運命を組んだんだろう。二度、あなたを好きになって、二度とも駄目だって思い知らさ  
れるなんて。一度で十分なのに.....もう一度.....あなたがレアナ姉さまのものだって、心に刻ませるな  
んて...)

心が揺らいだせいだろうか。

一瞬でも、アシャが自分にだけ微笑みかけてくれればいいと願ってしまったせいだろうか。だから  
こうして、その望みは全く愚かなことなのだと、改めて思い知らされるのだろうか。

(どうしてユカルを好きにならなかったのかな)

そうすればこんな想いをすることはない。親切で優しいあの目を、辛そうに瞬かせることもなかった。

『いいよ』

ユカルはそっと呟いた。

『こればかりはどうしようもないよな。それに...』

続きは何だったのだろうか。口にせず、そのままふいと、茶色のマントを翻して離れていってしまっ  
たけれど。

(どうしようもない.....)

「はは...当たってるよ、ユカル」

ユーノにできるのは、この焦がれる想いを封じ込めてしまうことだけだ。

(アシャ.....アシャ...)

唇を噛み、声を堪える。

(頑張れ)

想いを封じろ。

(頑張れ)

外に見せるな。

(がんばれ...)

そうしなければ、側にさえ居られなくなる。

「ん...」

レスファートが身動きして、慌てて涙を拭った。

「レス？」

「ん...ーノ...」

レスファートは身悶えするように体を動かし、唐突に目を開けた。アクアマリンの瞳が真正面から  
ユーノを見つめる。愛らしい顔立ちにほっとしたような安堵が浮かび、レスファートは両手を伸ばし  
てユーノの首にしがみついた。

「ユーノ...」

「どうしたの？ .....汗びっしょりじゃないか」

気づけば少年の体が熱っぽく濡れている。体調が悪いのかと覗き込む。

「怖い夢を見たんだ.....ユーノがぼくを置き去りにして行ってね.....ぼく、一人で.....ユーノはぼくの  
こと忘れちゃうの...」

「大丈夫だよ、レスを忘れやし.....レス?!」

笑って応じかけ、ユーノは跳ね起きた。

「レス、元に戻ったの?!」

「な、なに...？」

レスファートはきよとんとしたまま座り込んでいる。

「元にもどる...？ 何のこと？」

「レス！」

「きゃ」

ぎゅっと抱き締められて、訳がわからぬように目を瞬いたが、そのうち嬉しそうに目を細めてユーノの頬ずりを受け止める。

「わかんないけど.....ぼく、ユーノ大好き」

「うん...うん...私もレスが大好きだからね！」

ちゅっ、ちゅっ、と思わずその頬にキスを降らせていると、くすぐったそうに肩を竦めていたレスファートも顔を寄せてきた。

「ぼくもー」

甘えて頬をすり寄せ、小さな唇を当ててくるのは、全くいつもの通りだ。

「レス.....よかった.....っ」

思わずにじんだ涙のまま、ユーノは抱きついてくるレスファートを強く強く抱き締め返した。

「しかしなあ……一時はどうなることかと思っただぜ」

「本当」

「ふん、だ」

イルファとユーノの会話に、レスファートは小さく拗ねてみせた。

「イルファなんか、ハクジョーなんだから！ ユーノはちゃんと側にいてくれたのに、イルファなんかぜんぜんっ、どっこにもっ、いなかったんだ」

ヒストの前に乗せられた体をユーノの腕と腕の間に押し込み、レスファートが見上げてくる。邪気のない笑みを満面に広げて、甘えるようにユーノの腕にもたれた。

「おい、そいつあ誤解だぜ！」

イルファが不服そうに反論する。

「俺だって、ちゃんと居た！ ユーノがどうしてもかわるって言うから、変わったんだぞ」

「ふーんだ、イルファの嘘つき！」

びーっ、と舌を出して、レスファートは悪態をついた。

「嘘じゃないってば！ おい、アシャ、何とか言ってくれ！」

「普段の行いが物を言うな」

「ほら！」

「あ、この！ アシャ！」

「ははは…」

イルファとレスファートのやり取りに、アシャは明るい笑い声を上げる。

空はスオーガ特有の気流の澱んだような薄曇りだ。

アシャ達を含む野戦部隊（シーガリオン）は、二日前に移動を始め、三日目の今日にはラズーンとスオーガの国境にかかろうとしていた。

（本当に良かった）

ユーノは腕の間で楽しそうに笑うレスファートを見下ろしながら、しみじみ思う。あのままだったら、旅を続けていくのも辛かっただろう。それに何と言っても、レクスファの王達に申し訳が立たない。

ふと頭を巡らせて、後方、シートスの平原竜（タロ）と並んで馬を進めてくるアシャを見る。野戦部隊（シーガリオン）の武骨な着衣を身に着けていても、その姿は目にしみるほど美しかった。

（アシャ…）

心の中でそっと呼ぶと、まるでそれが聞こえたように、こちらを向いたアシャが淡く微笑んだ。

心の底に微かな波紋が広がる。温かな、心を寛がせてくれるその笑みを、ずっと見つめていたいような気がして、ユーノは慌て気味に目を逸らせる。

レスファートが元気になったのと、いよいよラズーンという想いが入り交じって重なり、ひどく感じやすくなっている。胸の内を浸すような、切ない甘さをじっくりと噛み締める。

（全て、元通り、だよな…？）

記憶を失っていた間、アシャとひどく親しくしていたような気がした。かけがえのない長年の友人のように、何ためらうこともなく背中を預けて戦える安心、疲れ切った夜には柔らかな体温の側で、深く安らかな眠りを貪れる幸福。だがそれも、もうすぐ。

「ユーノ、見て！」

ふいに、レスファートがはしゃいだ声を上げて伸び上がり、ユーノははっとして目を上げた。

（凄い…）

そこには、頂上に雪を頂く峻険な山々があった。スオーガの赤茶けた草原を後方に、焦茶の土を踏みしめているユーノ達の少し前方から、まばらな緑の草が次第に多くなり、やがて一面、緑の野となる。その緑はセレドの穏やかな緑とは違って、何かはっとするほど鮮やかな色合いを含んでおり、彼方に広がっていく先で青みを帯び、そびえ立つ山の裾へと繋がっている。

今の今まで重苦しく押さえつけるようにのしかかっていた灰色の空も、水分を含んだ気流が急速に上昇しているのか、山へ近づくと従って晴れ晴れとした青に変わっている。

背後に青白い峰、そして前に広がる瑞々しく清冽な野、溢れんばかりの光と生命力に満ちた光景のほぼ中央に、今まで見たどんな都市よりも眩く光を跳ね返す、広大な白亜の都市があった。

人が住まうというよりは、この世ならぬ特別な存在が祭られるような、都市全体が巨大な神殿でもあるようなその気配。

「ラズーン…」

唐突にその理解が心に湧いた。



おそらく、これこそが、世界の統合府、性を持たぬ神々の住処であるラズーンに違いない。  
「きれい.....きれいだね！ ユーノ!!」  
レスファートが感極まったように歓声を上げる。  
「すげえな」  
ごくりとイルファが唾を呑み込む。  
「...帰ってきたな」  
静かなアシャの声が響いて、ユーノはぎくりとした。  
(そうか...アシャはこの住人だったんだ)  
では、ここで別れなのか、と胸苦しくなった。  
(もう、ここで)  
ついに辿り着いたのだ。だから、ユーノとアシャの関係は繋がる理由を失ってしまう。  
(もう、終わる)  
鋭く胸を刺すその想いに呼応するように、レアナの面影がユーノの心を過った。  
(でも...姉さまのために)  
ユーノは少し眉を潜めて、目を伏せて唇を噛んだ。  
(姉さまのために.....『太皇(スーグ)』にお願いするんだ。アシャをお遣わし下さい、と。どんな代償がいるのかはわからないけど)  
『太皇(スーグ)』の許しさえ得られれば、レアナを愛しているアシャはセレドに降りてくれるだろう。そして、アシャさえいれば、セレドはまず安泰とみていい。  
(アシャと姉さまが結婚して、セレドを守ってくれて)  
ユーノは必死に想像を重ねた。  
アシャがいるならカザドも動きを控えるだろう、何せラズーンと直接繋がる王だ。  
(いつか世継ぎが生まれて)  
二人の子どもはきっと愛らしいだろう。どちらに多く似ているだろうか。今セレドには養育係はいない。セアラがそれに応じるとは思えないから、何ならユーノがその任を引き受けてもいい、でも。  
(.....その時、私...生きているのかな...)  
虚ろな笑みが唇に浮かぶ。  
(生きて.....いたい...)  
それがどれほど遠い望みか、ユーノにはわかっている。カザドが狙っている。『運命(リメイン)』が狙っている。ギヌアが狙っている。災い全てを引きずり込んで、もろとも闇に沈んでいくとも、ユーノ一人の生命ではとても賄い切れないだろう。  
(でも、やらなきゃならない)  
ゆっくりと、しかし昂然と頭を上げたユーノの目に、白亜の都市はきらきらと眩い光を放っているように見えた。  
神々の里、ラズーン。  
全ての謎を含んで、なお沈黙するラズーン。  
(よし、行け)  
心で自らに命じて、ユーノは静かにヒストを進め始めた。

## 3.ミダスの姫君

白亜の都市に近づくに従って、ユーノは都市を包んでいる微妙な緊張感に気づいた。

「アシャ...」

「...」

無言で頷くアシャの顔も、いつもの甘い面立ちはどこへやら、厳しい表情で前方を見つめている。その視線に促されるように、ユーノも再び前方へ目を向けた。

都市が真白く輝いて見えたわけはすぐわかった。都市の周囲をぐるりと白い石の城壁が取り囲んでいるのだ。どちらかという守りに重点をおいた反り返った壁は、石を積んだとは思えないほど滑らかで、日の光を跳ね返しながらも妙に白々とした冷たさをたたえている。

冷たい、氷の都市じみた印象を与える理由はもう一つあった。

ユーノ達の目指している、おそらく都市の中央の門と思われるところが閉ざされているのだ。

「シートス！」

アシャはふいに肩越しに振り返り、呼んだ。すぐさま、平原竜（タロ）を蹴立てて、シートスが近づいてくる。

「どう思う？」

正面の門を見ながら、アシャは問いかけた。シートスが難しい顔になって、黒く短い髭をしごきながら答える。

「我々が出て来た時はここまではしていなかったんですが.....これは明らかに臨戦体勢ですね」

「そうだな」

アシャは紫水晶の瞳を猛々しい色に染めた。

「俺が知っている限りでも、『黒の流れ（デーヤ）』の反乱以来だ」

澄んだ青空から吹き下ろす風が、アシャの金褐色の髪を梳っていく。それを見るときも見ていたユーノは、視界の端から一頭の馬が近づくのに気づいて、鋭く目を向けた。体の細胞隅々に緊張が蘇る。無意識に左手を剣に滑らせながら、その騎士の一頭に続く騎馬隊を凝視する。

「アシャ、あれは」

「ああ」

シートス達も気づいたらしい。ユーノの視線を追うように頭を巡らせたが、アシャは微笑を零した。

「そうか。こっちはミダス公の分領地になるからな」

「とすると、あれはミダス公の？」

「ミダス公？」

アシャのことばに、ユーノは改めて騎士達を見やる。

騎士達はおよそ十騎ほどいるだろうか。屈強な体を白銀の鎧に包み、ラズーンの山の雪がかくやと思わせる白馬に跨がっている。片手には縦長の盾をかざし、兜に飾った銀色の羽根とともに煌めくような一群だ。

その中の、どうやら頭領格らしい一人の青年だけは、白い布を一筋額に巻いているだけで、兜を着けていない。今しもぴたりと馬を止め、朗々と響く声で言い放った。

「そこにおられるのは、野戦部隊（シーガリオン）隊長シートス殿と、聖なる方、アシャ・ラズーンとお見受けいたしました。私達は、ラズーン四大公が一人、ミダス公の下に仕える『銀羽根』、物見（ユカル）の塔からお迎えに上がりました」

「物見（ユカル）...そうか」

アシャはつい、と、白銀の騎士達の来た方向へ視線を投げて頷いた。

「御苦労！」

シートスが同じように声を張り上げ、ゆっくりと、紅の房の槍を突き上げた。

「確かに我らは野戦部隊（シーガリオン）！ 来られるがよい、『銀羽根』の諸君！」

「はっ」

見事なまでに足並みを揃えて、『銀羽根』と呼ばれた一隊が近寄ってきた。栗毛の馬に跨がり、飾り気のない野戦部隊（シーガリオン）の装束を身に着けたアシャを、声をかけてきた男が眩そうに見つめる。

「よく御帰還なされました、聖なる方」

「よく見分けられたな」

「それはもちろん！」

男は熱を込めて大きく頷き、周囲の視線に少し赤くなった。  
「あなたほどの方が、他におられるわけはありません」  
深い尊敬を思わせる声で続け、馬上から飛び降りて深々と頭を下げ、片膝を突いた。後ろに居た騎士達が一糸乱れず、それを真似る。  
「本当に、よく……御帰還なされました、アシャ・ラズーン」  
「ありがとう」  
アシャは生まれながらの皇族の持つ威厳を漂わせて、唇を笑ませた。  
「あのまま、もうラズーンへは帰還されないとも伺っていましたが…」  
「帰るつもりはなかったが、妙なことになった」  
にやりと悪戯っぽい笑みになって、ユーノ達の方へ視線を投げる。  
「『銀の王族』、セレドのユーノだ」  
「それでは！」  
男ははっとしたように顔を上げた。  
「ラズーンのことをお聞き及びでしたか」  
「うむ…ラズーンの中央門が閉ざされているところを見ると…」  
「はい、なりを潜めていた『運命（リマイン）』の跳梁は、今や『太皇（スーグ）』おわすラズーンそのものに迫っております。中央門は閉ざされ、出入りは我ら『銀羽根』、或いはアギャン公の『銅羽根』、ジーフォ公の『鉄羽根』、セシ公の『金羽根』など、大公方の『羽根』に守りを受けた者のみが、通行を許されております。それで、私達がお迎えに上がったのです」  
「そうか…」  
アシャは険しい表情を強めたが、ユーノ、レスファート、イルファとそれぞれの顔を見て行って、最後にユーノに目を止めた。ユーノの剣にかけている左手を見つめて眉を寄せ、男を振り返る。  
「名前は？」  
「はいっ」  
男は名高いアシャに尋ねられた喜びからだろうか、ぱっと瞳を輝かせて答えた。  
「『銀羽根』のシャイラと申します。ミダス公より一隊を任せられている者です」  
「わかった、シャイラ」  
にっこりと、おそらくはどんな女もここまで鮮やかには微笑めまいという笑顔を無造作に投げて、アシャはことばを継いだ。  
「では、守りを頼もう」  
「はっ！ 命に代えましても！」  
シャイラは、再び深々と頭を下げると、急ぎ立ち上がって白馬に飛び乗った。

「開門！」  
シャイラが二度目を叫ぶ間もなかった。  
一足先に伝令を送っておいたという彼のことに違わず、白く磨かれ、見事な彫りが施された金属の門は、ぎりぎりどねじ切られていくような音をたてて開いた。  
「アシャ！」  
「アシャ・ラズーン!!」  
「聖なる方！」  
「我らがアシャ!!」  
「っっ…」  
門が開くと同時に、わああっという歓声がユーノ達を包み、一瞬その場に立ち竦む。  
門から大通りと思われる真っ白な石を敷き詰めた通りがまっすぐに伸びている。その道の両側に黒山のような人だかりがしていた。  
男も女も老いも若きも、まるで数々の栄誉を勝ち得た武将を出迎えるように、満面に笑みを浮かべ手を振って、口々にアシャの名を叫んでいる。着飾った娘達はラフレスらしい白い花を撒き、頬を染めてアシャの視線を捉えようとしている。男達は誇らしげに、そしてどこか妬ましげにアシャの名を呼び、側に居るシートス、シャイラ、ユーノ達に羨ましそうな視線を投げてる。  
「へえ……こいつあ…」  
イルファは物珍しげに都の中を見回し、少しでも彼らに近づこうとして『銀羽根』に制される群衆を見て、今にも口笛を吹きそうだ。  
「わあ…」  
華やかな催しには慣れているはずのレスファートさえ、さすがに声もなく、辺りの光景に目を奪われている。長かった旅の終わりが、こんな賑やかな形で迎えられることになるとは、予想もしてい

なかったに違いない。

「……」

だがユーノは、その華々しさに息を呑みながら、全く別のことに気をとられていた。

(何と言う熱狂)

そっとアシャの方を盗み見る。

そこには、セレドの付き人のアシャとも、また天幕(カサン)の下に寝そべる旅人のアシャとも、全く違う人間が居た。これほどの興奮を、情熱を、気負いなく受け入れる姿、その存在が多くの人々に望まれて来た者の持つそこはかたない自信をたたえる、ラズーンの第一正統後継者、アシャ・ラズーン。

そこに居るのは、どれほどのボロを纏い、どれほど土に塗れようと、覆い隠されることのない高貴、世継ぎとしてのアシャの姿だった。

(これほど、ラズーンの人々に愛されているアシャが、本当にもう一度、この地を離れることなんてできるのだろうか)

夜の色を含んだようだと表現される自分の目が、なお暗く翳ったのを意識する。

(そして、このアシャを、このラズーンから奪っていく代償は、どこまで求められるのだろうか)

自分の命など、秤にも載らないのではないか?

「ユーノ」

「!」

声をかけられ、ぎくりとして我に戻る。

いつの間にか、隣に轡を並べていたアシャが、心配そうな表情でこちらを覗き込んでいるのに気づく。

「傷が痛むのか?」

「あ、ううん、ごめん、ちょっと」

強いてにっこり笑ってみせる。

「びっくりしてたんだ。まさか、ラズーンでこんな歓迎を受けるとは思ってなかったから」

「いや…」

道の向こうをちらっと見たアシャが、ちょっと困ったような笑みになる。

「これからだよ、歓迎は」

「え?」

「ほら、この辺りの領主、ミダス公だ」

囁かれて、ユーノは前方へ目を移した。シャイラがユーノ達から離れて馬を走らせ、近づいていく相手を見つける。

それは、色とりどりの糸で織った旗を先頭にした一行だった。

旗には、緑地を主体として、白銀のクフィラが描かれている。

「ミダス公の紋章だ」

「ふうん」

アシャの声に、その旗の後ろに続く一人の男に目を留める。

首の辺りで切りそろえたプラチナがかかった金の髪、薄緑の穏やかな瞳、年の頃は五十すぎと思われる温和な印象の男だ。襟が広がったブラウスに胴着、マントを身に付け、ゆったりとした動作でこちらに馬を進めてくる。周囲のざわめきから、ミダス公その人であるらしい。

周囲の熱狂が次第に静まっていく。その中を堂々と進み続けて、ミダス公はユーノ達の前に馬を止めた。

「よく戻られましたな、アシャ・ラズーン」

「その称号は、私にとってはそろそろ照れくさいよ、ミダス公」

「滅相もない」

ミダス公は穏やかに驚いてみせた。

「ラズーン動乱のこの時期に、あなたの名は輝かしい祈りです、アシャ・ラズーン。シャイラ、御苦労だったな」

「はい」

シャイラは深く体を曲げ、名残惜しそうに向きを変えた。肩越しに振り返りつつも、『銀羽根』を従えて、再び中央門の外に戻っていく。

「話にききますと、長い旅をされたそうですね」

「ええ、まあ」

「さぞかし、お疲れでしょう。今宵ささやかな宴を張りますので、旅の疲れをお癒し下さい」

ミダス公はユーノ達の方にも笑みを向けた。

「どうぞ、あなた方も。娘のリディノが喜びます」

「ありがとうございます」

軽く会釈を返し、ユーノは微笑んだ。

「ミダス公、残念なことだが」

シートスが遠慮がちに口を挟む。

「我ら野戦部隊（シーガリオン）はそうもしてられないのだ。ラズーン外縁に良からぬ企みが動き出しているのだ。明日か明後日には、再びラズーンを出す」

ちらっとユカルがユーノを見たが、すぐにシートスに目を戻す。

「それは残念なことだ」

ミダス公は鷹揚に頷いた。

「それでは、せめて、一夜二夜の宿を提供しよう」

「かたじけない」

「それでは、アシャ・ラズーン、こちらへ」

ミダス公が向きを変えるのに、ユーノ達はようやく馬を進めた。

陽はもう薄暗い闇に沈んでいた。

ユーノ達はミダス公の屋敷の一室で様々な話を聞き、話をし、そして多少なりとも、この統合府について、この世界が今迎えようとしている事態について知識を得ていた。

今は今夜の宴のために準備をしているところだ。

「どうぞ、こちらへ」

侍女がユーノを導いていく。幾つかの回廊を巡ったところで立ち止まり、深く腰を曲げた。

「ここが湯殿でございます。何かお手伝いすることは...」

「いいよ、自分でやれる」

「わかりました。もし御用がございましたら、その戸口の花の細工をお押し下さい。すぐに参ります」

「ありがとう」

「では...」

侍女は再び軽く腰を曲げ直し、元来た通路を戻っていく。

(どっちにせよ)

ユーノは溜め息をついて向きを変え、湯殿の入り口を飾っている花の彫り物を見つめた。

(戻る時は呼ばなきゃな。とつても一人じゃ帰れそうにない)

ミダス公はラズーン四大公の一人、いわば小領主だと聞いていたが、この屋敷の広さ大きさは、とてもセレド皇宮の比ではなかった。入り組んだ回廊があちこちの小部屋に繋がり、あるものは物見用の部屋、あるものはテラスへと突き出して終わっている。

今更ながら、世界の大きさと、自分が生きていたセレドの小ささを感じる。

湯殿の入り口を入ると、薄赤く煙ったような半透明の色の石板が互い違いにたてられていた。その間を擦り抜けていくと、こじんまりとした、だが嫌というほど手の込んだ造りの脱衣所に出る。

ラフレスの花を象ったらしい衣類入れ、二人の乙女の像によって支えられている等身大の鏡、壁一面に浮き彫りが施されているのは言うに及ばず、天井まで続く柱にはびっしりと小さなライクの花が彫り込まれている。床はおそらく、一度浮き彫りを施した上に、透き通った水晶のような板を重ねてあるのだろう、足の下の方に複雑な模様が立体的に浮かび上がって見える。

「ふう...」

隣から漂う甘い匂いと熱気に頬が熱くなる。急いでチュニックを脱ぎにかかって、つい右肩を強く擦り、眉をしかめる。傷は塞がっているものの、動かすのにはまだ傷みが残る。

『ユーノが女あ?!』

唐突にイルファの素っ頓狂な声を思い出して、くすりと笑った。

湯殿へ案内しようとした侍女が、ユーノだけを自分達と違う別のところに連れていこうとするのに、どうしてなんだと尋ねたのだ。アシャがきまり悪そうな顔で事情を説明しても、イルファはどうにも合点がいかないと首を捻り続けていた。

『ユーノが女かもしれないと思ったことはあるぞ、そりゃな。だが、あいつが女なら、俺だって女って可能性もあるかも知れんぞ？ だがそれはあり得ないからな』

『...どういう理屈だ、それは』

『いいかげんに失礼なことというの、やめてよ!』

訝しそうに眉を寄せたアシャときりきりしたレスファート、あげくには証拠を見せてみると言い出しかねないイルファに、急いで引き上げてきたのだが。

(女、なんだよね、残念なことに)

シートスの口調を真似て心で呟き、額帯(ネクト)を外す。

星の剣士(ニスフェル)としての役目ももう終わりだ。本来の、もっとも苦手な『ユーナ』・セレディスの役を務めなければならない。

(ユーナ・セレディス、か)

アシャがつい最近、ユーノのことをそう呼んだ。妙に生真面目な、不思議に熱っぽい目で見つめながら。

(アシャ)

あれは何だったんだろう。

(もしかして)

付き人としてとか、友人としてなら、あんな目をするだろうか。

(もしか、して...)

「ごめんなさい。アシャと一緒に来た人って」

「！」

ふいに声がかして、ぎくりとして振り返る。半透明の石板を透して深緑のドレスが動き、制止をかける間もなく、ひょいと石板の端から顔を出したのは、プラチナがかつた金髪に、日差しに淡く透けそうな薄緑の目、白い肌にほんのりとした紅の唇の少女。

「何かお手伝い……きや…」

あどけなく笑みかけたその顔が、一気に強張った。小さく上げてしまった悲鳴を恥じたように、口元に握った小さなこぶしをあてる。

「あ…」

その目がユーノの体の傷に注がれていると悟って、思わず顔が熱くなった。

「ご、ごめんなさい」

少女は慌てて身を翻し、立ち去っていく。

その足音を聞きながら、ユーノは次第に体中の力が抜けてくるのを感じた。のろのろと落とした目が、咄嗟に掴んだ片手の剣を見つける。

もし、今の少女が刺客であったなら、ユーノは確実に左手で剣を抜き放ち、一刀のもとに切り捨てていたに違いない。

（私…）

ぼんやりと目を上げる。自分の姿が鏡に映っている。ばさばさの短い髪、ぎらつくような黒の瞳、乾いた唇、片手に剣を持ち、腰布一枚の半裸の体には大小無数の白い傷痕がある。右肩には星形の大きく引き攣れたような傷痕。

「星の剣士（ニスフェル）、か」

何と皮肉な呼び名だろう。

そっと手を伸ばし、鏡に触れて、ユーノは淡く笑った。

（これじゃ確かに、怖がるのも無理ないや）

疲労が一気に溢れ出す。

（可愛いひとだったのにな）

金の髪、薄緑の目、あどけないおもむきの、だが、この配色はどこかで見たことがある。

（どこでだ？）

ユーノは考えを巡らす。

（昼間だ……ミダス公…？）

「！」

剣を降ろしかけてはっとした。入り口の方を慌てて振り返る。

ミダス公の一人娘、リディノ・ミダスカ。

（確か…同い年…）

自分との間に、何と隔たりがあるものか。剣を手荒くくれるしか能のない娘と、愛らしいとまず思ってしまう少女と。

「…」

胸の中に広がった靄を、首を振って払いのける。

（今はそんなことより考えなくてはならないことが一杯ある）

剣を置き、腰布をとり、湯殿へ、これまた精緻な浮き彫りの施された入り口をくぐる。

広々とした湯船は、他の部分とは対照的に、黒地にほのかに白い筋が入った石で作られていた。卵形になっていて、ややとがり気味の両端には、同じ石から彫り上げられたものらしいクフィラが一羽ずつ羽根を広げている。開いた鋭い嘴の間から、熱い清らかな湯が音をたてて、湯船の中へ落ちていた。これほどの湯をこれほど無尽蔵に用意して振舞える、ミダス公の力に驚く。

「あつ…」

少し足先を浸し、小さく声を上げた。しゃがみ込んだ時にまた、右肩の筋肉を捻った。

（早く治さなきゃ）

同じ場所を怪我し続けているから、治りが遅いのは感じている。だが、それだけではない、体の奥から見えない支配が届いているような気がする。

（怪我をしている部分を知らせるな）

傷ついていると知らせるな。痛みがあると悟られるな。なぜなら、そこを攻められる。そこから崩される。そしてやがて、身動きできなくなっていく、傷ついた部分を癒しもしない、庇いもしない、むしろ晒して歩くようなことをして、なお繰り返し傷つけてしまうから。

（剣の罠）

ゼランがユーノに植え込んだという、危険に自分を晒すような動き方は、こんなところにまで響いているのだろうか。

「…」

唇を引き締め、右肩をそっと左手で覆った。

傷にこんなふうに労るように触れるのは初めてかも知れない。でこぼこしてつるつるした奇妙な手触りを感じると、心のどこかが記憶を思い出して悲鳴を上げる。傷つけられた瞬間の恐怖、また傷つけられるかもしれないという不安、そしてさっきのリディノのようにただただ恐れられ、どれほど訴えようと誰にも伝わる事のない苦痛を、扱いあぐねる脆い自分が剥き出しになって。

(そうか...)

ふいに気づいた。

ユーノが危険に飛び込むのは、ゼランの植え込んだ罠のためだけではなく、きっとそういう自分を見たくないからだ。恐怖と不安と苦痛に向き合えない自分に気づきたくないからだ。

剣を握っていないと生きていくことさえできない、脆くて弱い自分を知りたくないからだ。

(アシャは...気づいてたのかな...)

繰り返し、傷をきちんと治せと言われた、その裏には、強く雄々しい振舞いで突っ張りながら、その実、自分の弱さにも脆さにも向き合えない未熟さを読み取られていたからかも知れない。

(気づいていたよな.....きっと)

仮にもラズーンを継ぐ存在であったとしたら。それに。

(そりゃ...剣士としては...困るよな...)

ましてや、自分が守らなくてはいけない相手で、しかも時に背中を預けなくてはならない存在だとしたら。

(.....怖いよな.....)

きっと、アシャにとって、ユーノとの旅は本当に心身ともに負担だったはずだ。

(私ってほんと.....子どもだよなあ.....)

そんな娘を、どうにかしようと思うはずもないだろうに。

「...」

落ち込みながら湯に滑り込むと、湯に浮かべられたライクの、甘い独特の香りが中枢を柔らかく浸し、蕩けさせていくのを感じた。ゆっくりと体を伸ばし、首を仰げ反らせ、もたれかかれるようになっている窪みに体を寄せる。そろそろと左手を外していきながら、無意識にしかめていた眉を緩めた。

「ふう.....」

意識して息を吐くと、体の緊張が解けた。腕が重く、体が重く、湯の中にやんわりと抱き取られている自分を感じる。

(こうやって、きっと、ずっと、見えないところで守られてきたんだろうなあ...)

夜の闇を怖がっているくせに、わざわざそちらへ背中を向けて強がっている子どものユーノを、アシャが、イルファが、時にはレスファートでさえ、そっと支えてくれていたのだ。

(他に皆.....一杯、いろんな人が守って.....支えていてくれたんだ.....きっと...)

だからこれほど弱い自分でも、こうして今、生き永らえてこれたのだ。

(そして、何とかここまで辿り着けた)

セレドを飛び出したとき、一人で何とか切り抜けていけると思っていた自分は、何と幼かったのだろう。何と視野が狭く、愚かだったのだろう。身近の敵、カザドを凌いでいるからと、ただそれだけで、生きる術も旅する知恵もないまま発っていたら、レクスファでさえ抜け切れなかったかも知れない。

(レスファートやイルファを巻き込み、どうなるかさえ考えないで)

どれほどの命の重みを背負うのかも理解していないまま。

(そう、だよな...)

額から流れる汗に目を閉じる。

(守ることなんて...わかってなかったんだ...)

自分一人が守れない者に、他の誰が守れるのだろう。

(怖くて死にたくなくて生き延びたくて、ただただ必死に走ってきただけなんだ...)

そうして駆け抜けた世界は、遥かに大きく遠く果てなく、様々なもので満ちあふれていて、ユーノ一人など幻のように呑み込んでしまいそうだ。

「小さい.....なあ...」

脳裏に、得たばかりの知識が湧き上がってくる。

ラズーンは実は一つの王国というのではなく、分割統治されていた。

中央の『太皇(スーグ)』が直々に治められている地域(ここは国の外壁のように白い壁で囲まれている)を除き、四人の大公と呼ばれる人間によって治められている。四大公は、ラズーンの周辺を押しえるとともに、『太皇(スーグ)』に直接仕えている存在だ。

ラズーンは、東西に長く、北のほとんどを峻険な山々に占められていた。西部一帯を治めているの



がジーフォ公、南西部を治めているのがセシ公、南と南東部がミダス公、最後に北方の山々を含む東の地方を治めているのがアギャン公だ。

それぞれの大公は、自分の分領地に物見（ユカル）の塔を置き、ラズーン外縁に対して睨みをきかせているが、この物見（ユカル）の塔の内側を繋ぐようにして、ラズーンの外壁が伸びている。

外壁には、ジーフォ公の分領地では西門、セシ公分領地では南門、ミダス公分領地は中央門、アギャン公分領地には東門と呼ばれる入り口が設けられており、その守りを任されていた。『羽根』というのは、その守りについていてる者を総称して呼ぶことばで、四大公の紋章に従って、それぞれ『鉄羽根』『金羽根』『銀羽根』『銅羽根』と呼ばれている。

ここ数ヶ月、ラズーンは諸国の動乱に乗じたガデロ、プーム、モス、クェトロムト、グルセトなど、ラズーン近隣諸国の攻撃をたびたび受けていた。本来ならば、ラズーンにとっての守りの一つとなるはずだった『運命（リマイン）』の暗躍はとどまることを知らず、今では門の開放が、一歩間違えばラズーン崩壊に繋がりがかねない状態となっていた。

その中で、行方知れずとなっていたアシャ・ラズーン、かつての第一正統後継者の帰還は、唯一の明るい話題であり、怯えるラズーンの人々がアシャを迎えた熱狂は無理からぬことだったのだ。

（ギヌア・ラズーン...）

手に掬った湯でざぶりと顔を洗う。

思い出した名前は、もう一人のラズーンの正統後継者と呼ばれた男のことだ。

記憶を取り戻した今のユーノは、宙道（シノイ）を出たばかりの時に襲われたことも鮮明に思い起こせる。

あの時、ギヌアはユーノをすぐ殺すつもりではなかった。野獣が手負いの獲物を前に、噛み砕く肉のうまさを予想して舌舐めずりしている、それが、あのギヌアの不気味さと一番よく似ている。腕一本、脚一本、と次第に体の自由を奪っていき、最後に身動き取れなくなったユーノの喉に剣をあて、命乞いを強要し、少しずつ剣を食い込ませて、あわやのところで慈悲心があるかのように剣を引き、今度は心臓へとじわじわ剣を押し込んでくる、そういうやり方をする気がした。逃れようのない所へ遠巻きにじわじわと追い込んでいく狩人の狡猾さ、ユーノが生き延びようともがけばもがくほど、耐えれば耐えるほど、その死の瞬間を引き延ばそうとするような。

「っ」

ふいに寒気に襲われて、思わず湯を跳ね、ぞくりと体をすくませた。慌てて目を開き、自分が湯に浸かっていることを確かめる。温まっているはずなのに、額には気持ちの悪い冷や汗がにじみ出ている。左手をあげて拭い、再び湯に放り出す。ぼしゃりと音をたてて沈みかけ、僅かに浮く腕に不安が増す。

「.....」

おそらくギヌアはユーノを諦めることなどないだろう。どこまでも執拗にユーノの血を求めてやってくるに違いない。そして、ユーノが最後の一滴を流し切った時、ようやく会心の笑みを浮かべるのだ。

「.....ふ」

噛み締めた唇を開き、息を吐く。胸の奥がひんやりとする。

（カザディノ...）

もう一人浮かんだのは、好色な情けを知らぬ男だった。ユーノを狙って兵を繰り出すうちに『運命（リマイン）』に与した卑怯者。あの男も、ユーノをあっさり殺しはしないだろう。何せ、何年も手こずらせてきたのだから。子飼いの部下を嫌というほどユーノに始末されている。

（良くて拷問...悪くて死.....いや、逆、か？）

「ふ...」

低く嗤った。

（死に方だけは山ほどあるのに、生き方としたらほんの一つしかない）

アシャを守って、セレドを守って、レアナを守って、レスファートを守って、セアラを守って、父母を守って.....それで...？

「.....」

目を開ける。

天井に鎖で引き上げられている、柔らかな光を放つ火皿を見つめる。

（許されれば、いい）

ただ生きること...生き延びることさえ、許されれば。

僅かに微笑み首を振り、祈りを口に出さないまま、湯船から身を起こす。

湯の効能か、体中が解れていて、痛みも少し減ったようで嬉しかった。ぼたぼた落ちる雫を払いながら、湯殿に続くもう一つの部屋を覗き込む。

「わ...あ」

思わず歓声を上げた。

そこは衣装部屋だった。

ありとあらゆる色や形のドレスが所狭しと準備されている。

「お、っと」

入り口のすぐ近くに、柔らかそうな布と下着があるのに気づく。慌てて布で体を拭いて下着をつけ、少し戸惑った。今まで身に着けていたものよりうんと布地が少ない。かろうじて胸と腰を隠す程度だ。

「これ、が、ラズーンのもの、なのかな...」

居心地悪さにもぞもぞしたが、視界を埋める色彩の魅力には堪え難い。引き寄せられるようにおずおずと部屋に踏み込んでいく。

白いドレス、赤いドレス、緑、黒、目の醒めるような黄色。レース、薄布、幾重もの襷、花びらの形に切り抜かれて重ねられた布、紅の帯、紺の帯、虹色に光る布、夜のように深い青のドレス。花を織りなしたレースに小さな宝石がちりばめられている。絞った袖に宝玉を繋いで巻いたものがある、かと思うと、金糸を織り込んだ簡素なドレス、銀糸で鳥を織り込んだ長い裾を引きずるドレス、なかには、下着姿とほとんど変わらない薄布とリボンのみのドレスさえある。

「.....」

ごくり、とユーノは思わず唾を呑んだ。

これほど多様な形や色のドレスなど見たことがない。いつもならレアナに似合う、セアラにはこれ、そう思う感覚さえ追いつかず、ただただ圧倒される。

くるくると周囲を見回して、ふと一枚のドレスに目が止まった。触れると消えるかも知れない、そんな気がして、二度三度、薄布とレースをまさぐって、ようよう手に取ってみる。

それは淡い水色のドレスだった。見事な細かなレースに光沢のある薄布を組み合わせてある。緊張に震えかける指で、そっとそのドレスを身に着ける。

「わ...」

軽くて、とても着やすい。動きやすさも言うことなく、足下のレースも胸元の薄布も、柔らかみの少ない筋肉主体の体を淡く透けさせるような織布も、これ以上は望めないほどの出来映えだ。添えてあった髪飾りを、ためらいながら留めてみる。靴は金色の組み合わせた紐で形作られた華奢なものだ。信じられないぐらいにユーノの足に合う。ゆっくりと回ってみると、ふわりと裾がなびいて広がった。手にまとわりつく飾りの空色のリボンも苦にならない。

「ふ...ふふ」

初めて、くすぐったいような喜びが込み上げてきた。数回くるくると回ってみる。裾はユーノの行く所へ、優しくまとわりつきながら追ってくる。脚に絡むというより、素足を守り、柔らかく包んでくれるようだ。

(少しは、きれいになってる?)

くすりと笑ってドレスの両端を指先で摘み、床に擦れないように少し持ち上げて腰を屈める。レアナが夜会の席でいつもしていた仕草だ。

(それから、いつもこうやって...)

体を起こし、微笑みながら幻の相手にしずしずと右手を差し出す。

「！」

が、突然右肩に強い痛みが走って、ユーノは我に返った。痛みを押さえようと左手を載せ、ぎくりとする。

手が直接、右肩の傷に触れている。

「...っ」

うろたえて、ユーノはドレスの山を見回した。

だが、どれもこれも、ドレスは少女の美しさを十分に引き立てるように作られている。それはとりもなおさず、細いまるやかな肩や華奢な腕、ほっそりとしたうなじ、しなやかな脚や淡くほのかな膨らみへ続く胸元などを剥き出しにし、その上に薄布やレースをあしらってあるということだった。

(傷が.....見える...)

もちろん、その傷でしのげたからこそ、今まで生きてこれたのだ。恥じるつもりは毛頭ない、だが、(どう、しよう...)

ユーノは唇を噛んで、脱衣室を振り返った。一瞬、元の服装に戻ろうかと考える。

けれども、ミダス公の宴に、あの旅の垢に塗れたチュニックとブラウスでは、ユーノばかりか、ミダス大公、ひいてはアシャの顔にも泥を塗ることになる。

かと言って、このドレス、いや、この部屋にあるどのドレスでも、着ていくなれば体中の傷を隠せ

るわけもなく、あれは何だと晒しものにならずにはすむまい。

(いっそ...この姿で出て弁明するか...?)

何と言って? お見苦しいでしょうが、我慢なさって下さい、ラズーンのために受けた傷でもあるのですから、とでも?

(でも.....セレドは、どうなる...?)

事もあろうに、第二皇女がこのような姿になるまで、どうして何も気づかなかったのだと、父母に非難が集まってしまうかも知れない。いくら、ユーノが自ら選んだ役目だと言っても通らないかも知れない。

(なら...この姿で出て.....黙っていればいい)

ユーノはきつく唇を嚙んだ。

(晒しものになっても、仕方がない.....後悔なんてしない)

でも、アシャは?

ふ、と眉根が緩んでしまった。

こんな娘を連れて来たと、おかしな目で見られないだろうか。いや、それよりも、アシャに、こんなみっともない姿を見せてしまうことになる。

(おかしな、ものだ)

アシャなんて、ユーノが怪我をするたびにユーノの体を見ているのだ。今更、傷の一つや二つで驚くはずがない。

(でも...)

宴には他の娘も来るだろう。これがアシャとの別れの宴になるかも知れない今夜、せめてもう少し、当たり前のように装えないだろうか。

(...、仕方、ない、だろ...っ)

ことさら強く、滲みかけた気持ちを心の中で叱咤する。

(これ以上は、無理、なんだから...っ。だからせめて、堂々としてるしか...)

「っ」

振り切ってぐっと唇を結んで顔を上げたたん、ぼろぼろと熱い涙が頬を伝って、慌てて口を押さえた。

(ばかっ! 何を涙なんかっ)

たかが服一枚、たかが一晩のこと、そう思いながらも、次々零れてくる涙を堪え切れずに座り込んだ。

さきほど逃げて行った少女のことが脳裏に浮かぶ。あんな風にまた、驚きと困惑とで怯まれてしまうのだろうか、まあ、あの傷をご覧下さい、と。

(だめだ.....止まらない、や)

口をきつく押さえてしゃくり上げるのを止めた。早く行かなくては、それこそアシャに迷惑がかかると気づきながら、心の痛さに声を上げるのを我慢するのが手一杯で、とても行動に移れない。

(何で、今更、こんなことに.....こだわって...っ)

軟弱者、一体これまで何をしてきたんだ、こんな所で竦んでるなんて。

(でも、だって)

アシャと最後に会うかも知れない、のに?

(せめて...せめて)

少しだけでも、目を止めてほしい。

(最後なら)

最後だから。

(...アシャ...っ)

コンコン。

「っっ!」

ふいに優しく扉を叩く音がして飛び上がる。急いで涙を拭う。

「ユーノ? 用意はできたか?」

(アシャ!)

「ユーノ...?」

久々に飾り付けた銀の髪飾りをいささかうっとうしく思いながら、アシャは扉をそっと押し開けた。そろそろ用意も出来上がっているだろう、ミダス公の屋敷にはリディノのこともあり、華やかな衣装が揃っている。ユーノの艶姿を一番に見るのは自分、そこは譲れないと思いつつ、せっかちに押し掛けた自分に呆れ果てるが、それはそれ、答えがないのをいいことに入り込む。

「なんだ、いるんじゃ...」

「や...」

早々に広間へ出向いてしまったかという心配は杞憂だったが、声をかけた相手が掠れた声で応じたばかりか、部屋の隅で座り込んでいるのにぎよっとする。

「ユーノ？ どうした？」

傷の回復が中途半端だった。疲れも取れていなかったのを無理強いした。イルファに性別について不躰にからかわれた。彼女が落ち込む原因を幾つも一気に思いつき、慌てて近寄る。膝をつき、覗き込み、愕然とする。

「...泣いていたのか？」

「...」

ユーノは無言でかぶりを振る。その髪から、髪飾りが滑り落ちたとたん、かっとなら相手は真っ赤になり、なお戸惑う。

ユーノを選んだのは水色の瀟洒な感じのドレスだ。意外ではあったが、細身の手足を淡く包む気配は十分に魅惑的、正直なところ、さっさと抱き締めてやりたいぐらいだ。

(何が一体)

ドレスを身に付け、髪飾りもつけ、とにかく装いはしているのだ、髪を直してやろうと手を伸ばしたとたん、びくりと大きく震えた相手が右肩を押さえて身を引いた。

「傷むのか！」

(しまった)

湯の温度をもっと確かめておいてやるべきだったか。一人ではなく、手伝いをつけるべきだったか。槍は体の深くを傷つけている、もっと配慮をするべきだったか。

「ユーノ！」

「っ」

肩を覆った左手を掴み、外させようとする。だが、そうさせまいとユーノが身もがいて抵抗する。

(また、こいつは)

「ほら、ユーノ、駄目だ、痛いなら見せろ」

「いや、だ」

「ユーノ！」

激しく首を振られて、アシャの腕を信じられていないようでむっとする。

「俺に見せろ！」

「あっ...」

声を荒げて無理矢理手を引きはがす。右肩を急いで覗き込み、顔を近寄せて肌の状態を観察する。ひどい槍傷だったが、それでも皮膚の上皮化はうまくいっている。繰り返した傷は治りが悪いはずだが、これほどの短時間で循環障害も起こさず、可動域にも支障を残さず回復できたのは奇跡的だ。柔らかそうな肌に刻まれた星形の傷の艶やかさには妙に妖しい気配があつて、ふとそこに吸いついて所有を刻みたくなる。

「大丈夫だ」

自分の感覚の危うさに、アシャは急いで顔を上げた。

「別に悪化もしていな...」

言いかけた声が中空で途切れた。

辛そうに首を背けているユーノの頬に、光るものが伝わっていく。

(なみ、だ...)

旅の途中、どれほど苦しい状況であっても、こんな風にあからさまに泣かれたことなど、ほとんどのないのに。

「ユーノ、どうし.....っっ！」

理由を問いかけた瞬間、視界に入ったものに寒気が走った。

水色のドレスに包まれることもなく晒された、回復したばかりの生々しい星形の傷痕。無意識に走らせた視線に、体のあちこちに走る白や薄紅に引き撃った醜い傷がまともに飛び込んでくる。

(ドレス！)

心臓を切れ味の悪い石の剣で貫かれれば、こんな今にも吐きそうな激痛を感じるだろうか。ミダス公の宴、アシャが出席するとなれば、近隣諸氏も押し寄せる盛大なものとなるだろう。その視線の最中に、この傷を晒して出席しろと、そんな要求を突きつけたのか、アシャは。

必死に周囲を見回すが、ユーノの傷を覆えるようなものはない。

(くそ、俺としたことが！)

平原竜(タロ)に数回踏みつぶされてもいいような配慮のなさではないか。

「...ユーノ...」

囁いて抱き締めようとしたアシャの腕に力がかかる。

「ごめん」

依怙地な口調で言い放って、残った片手で涙を擦り取り、ユーノはこちらを見つめ返してきた。潤んでいた黒い瞳が、一瞬ひどく切なそうな色を浮かべたが、すぐに消え去る。につ、とどこか少年じみた笑みが唇に広がった。

「何でもないよ、アシャ」

ことさら淡々とことばを継いで、ユーノは立ち上がった。

「ちょっとね、ラズーンへようやく着いたんだと思ったら、ほっとして涙が出ちゃった」

「.....」

「参ったね、ボクも子どもだよ。で、どう？ こうすると、少しは女に見えるかい？」

アシャの腕を擦り抜け、少し離れておどけて腰を屈めてみせる。

細い首筋に空色のリボンがまとわりついている。華奢な骨格を覆う皮膚に、まるでそれさえも一つの飾りであるかのような、鈍い光沢を持った傷痕がいくつも交差し、入り乱れている。薄布がかかり、レースが触れて、脆い陰影に彩られた様々な傷痕は、意匠を凝らした刺青に似て、猛々しく目を魅きつけ、息を吞ませる。こちらを見据える黒の瞳の輝き、剣を手にしていないのに、跪かねば今にも首を搔き切れそうな、圧倒的な支配力。

「髪飾りが落ちちゃったろ」

不服そうに呟いて唇を尖らせる、その生き生きとした淡い色。床の上の、白レース銀の花芯に金の蔓に絡まれた水色の花を拾い上げる仕草のしなやかさ。

「アシャが乱暴なことするからさ」

両腕を上げる、目を伏せる、髪にもう一度付け直そうとする、その頼りなさげな指先はどうだ。

「...つけようか」

ふらふらと立ち上がる。

「うん...」

同意を得てほっとする。近づいて、髪飾りを受け取り、ユーノの髪から香る甘いライクの匂いを嗅ぐ。

(危ない)

確かにこの姿はユーノにとって苦痛だろう、だがそれだけではない、この危うい美しさに無関心でいてくれる男がどれほどいるか。

(このままでは出せない)

品定めを訪れたつもりの客達の視線を釘付けにしても、きっとユーノは気づかないばかりか、距離を縮めようとする馬鹿どもに礼儀を持って笑い返したりしてしまうだろう。それを自分の好む通りに曲解する輩など、ここには山ほど居る。

「...よし」

「え？」

「ちょっと待ってろ」

「あ、うん.....え...？」

頷いて振り仰ごうとするユーノの髪に軽く唇を触れたのは、目当てのものを持ち帰るまでのささやかな呪詛だ。

(誰もこいつに触れてくれるな)

それを体現するようなドレスを、アシャは急ぎ足に調達に出かけた。

(どうしたんだろう...)

吐息がふいに近づいたかと思ったらすぐに離れた。キスされるのかと構えた自分が情けなくて気恥ずかしい。

結局つけてくれなかった髪飾りを手に、慌てて部屋を出て行くアシャを見やり、のろのろと鏡の方へ視線を向ける。隣室の香気を伴った湯気にも曇っていない鏡が、ユーノの全身を映し出している。

(まさか...気づいたのかな)

ひやりとして顔が強張った。アシャが入ってきたのに、とっさについ、傷を隠したのがまずかった。

(肩ぐらい隠しても.....そこら中に傷があるのに)

こういうところだけはしっかり『女の子』なんだからな、とうんざりする。

(アシャに余計な心配をさせてしまう)

少女の体に少年の魂を抱いて生まれてきたと思っていた。多くの命が生まれているのだから、時には神様だって入れ間違えることぐらいあるだろうと。なのに、その少年の魂の片隅に、少女の心が潜んでいて、唐突に顔を出してはユーノを脆くさせる。

(しっかりしろ、情けないぞ)

鏡の中の自分に呼びかけた。

(ラズーン存亡の危機に何を言ってる。それに、お前は自分でこの道を選んだ。この傷はその証、言わばお前の紋章じゃないか。月獣(ハーン)の呼びかけに、他の誰でもない、自分がこの運命を選び取ったと宣言したのは嘘なのか)

きり、と唇を噛んだとたん、背後の扉が開いた。

「ユーノ」

振り返ると、片手に白いドレスらしきものを抱えたアシャが姿を見せる。

「それを脱いで、これに着替えろ」

「どうして? 似合わないか?」

「いいから!」

アシャは奇妙に苛立った様子でドレスをユーノに押し付け、くると背中を向ける。

「う、ん」

(そんなに...みっともなかったのかな...)

理由はわからないまま、とりあえず水色のドレスを脱ぐ。白いドレスを手に取ったが、ただでさえドレスを着慣れていないのに、これはまた特別なものらしく、どういう造りになっているのか、全くわからない。

「あれ.....えーと.....うーん.....」

困り果てて、おどおどとアシャを呼ぶ。

「アシャ...」

「できた...、こら、ユーノ!」

「だって!」

振り返りかけて気まずそうに慌てて顔を背ける相手に、かっとする。

「こんなの初めてでわかんないだろ! 着方を教えろよ!」

(レアナ姉さまならわかった)

自分がやはり出来損ないなのだ感じて哀しくなる。

「あー、えーと、だからな」

アシャが背中を向けたままぼそぼそ唸った。

「まず、後ろの帯を外すだろ、それから」

「外すって...どうやってさ」

後ろの帯、がまずよくわからない。見た感じでは数本、似たような布が組み合わされている。

「そのまま外せ」

「だって、なんか妙な形に組んであるよ?」

「あ...そうか」

アシャはあやふやな声で応じて天井を見上げた。

「えーと...だからな、右上の筋を浮かして、左側のを半分ほど引くだろ」

「うん...?」

言われた通り、ユーノはおそるおそる白い組み帯を引いてみる。と、緩むどころか、逆にきゅっと締まる形になってぎよっとして手を止めた。

「締まったよ！」

「締まるはずはない」

「だって……締まったもん！」

「だからなあ…」

うっとうしそうに唸るアシャに涙が出そうになる。

「んなこと言うなら、アシャがやれよ！」

ぶち切れて喚いてしまった。

「ボクには出来ないってば！」

(どうせ、ドレスの着方なんか、想像もできないんだ)

半泣きになったユーノの気持ちなど知らぬ顔で、一瞬体を強張らせたアシャが、そろそろと肩越しに視線を投げてくる。

「待てよ、そいつは…」

溜め息まじりの声に切れた。

「ボクの裸なんて知ってるだろっつ！」

顔が熱くなる。みっともない。情けない。なのに、頼む相手がアシャしかいない。

アシャはユーノが怒鳴ったのに、奇妙な顔になった。困惑と苦笑、その笑みがやがてしたたかで悪戯っぽいものになるのを恨みがましく見上げる。

「いい加減にしろよ、こんなとこまで来て、まだボクを…」

(からかいたいのかよ)

さすがに呑んだ一言が聞こえたように、アシャがひよいと肩を竦める。

「まあ…いいか」

「何がっ」

「いや……ユーノ、お前、ラズーンの風俗について多少知っているか？」

「は？」

ラズーンは性別を持たぬ神が住まうと言う伝説の場所なのだ、そこにこんな生身の世界があったなどとは思ってもいなかった。

「知るわけないだろ」

「…だろうな」

アシャの形のいい唇が奇妙な笑みに歪んだ。その笑みを浮かべたまま、振り向いてドレスを受け取り、組み帯を解きにかかる。

「??」

(何だってんだよ、一体)

訳がわからないまま、それでもアシャが慣れた様子で組み帯と、その下に隠されていた組み紐を外していくのを呆れて眺める。

「ややこしいな……こんなの、一回見たぐらいでわからないや」

何を考えて、こんな複雑なドレスを持ってきたんだ、と首を捻るユーノに、アシャがくすり、と耐えかねたような笑いを響かせる。

「そうでなきゃ『困る』代物なんだよ、これは」

くすくすと笑いながら付け加える。

「誰彼構わずに解かれたんじゃ、『相手』の面目がなくなる」

「相手？」

ますますわけがわからない。

「でも、アシャは解けるじゃないか」

「俺は、な」

少し片目をつぶってみせた。

「状況によって、いろいろな格好をするからな」

「あ、女装趣味か！」

「っ」

がくりと前へ首を落としかけ、アシャはじろりと冷たい目でユーノを見た。

「そんなこと言っていると、脱がしてやらないぞ」

「はんっ」

歯を剥いて笑い返ししながら、ユーノは言い返した。

「脱ぐぐらい、一人でやれるよっ」

そうだ、着るのは難しくとも、脱ぎ捨ててしまうならば、何とでもやりようがあるだろう。だが。

「どうかなあ」

アシャは楽しげに解いたドレスを開いた。下着姿のユーノの肩からすっぽりとかけて、両脇、肩、



両腕の組み紐を再び元通りに組み始める。

「これは『一人』で脱ぐようにはできてないんだ。着るのは一人でできて、な」

「どうしてさ」

「始めはどこの組み紐でも自分で解けるから、着てから侍女達に仕上げてもらう...こうやってな」

「べ！」

ぐっと腰を締められ、思わず妙な声を上げてしまった。きゅっと締め付けられた腰の後ろで、アシャが帯を組み直している気配がする。

「、いたっ」

「どこが？」

「胴」

「じゃ大丈夫、よいしょっと」

「やだっ、何これっ、身動きしづらいつ」

じたばたするユーノの体に、付属していたらしいあれこれの装飾品を紐で留め始める。

「それから、これ、と」

「え...」

「に、これ」

「ちょっと」

「で、こいつ」

「えええっ」

次々増える飾りにひきつった。肩から垂らした金糸織りの薄布は、腰の紅の帯で留められる。首もとにはキャサラン製らしい細かな透かし彫りの金細工、大粒の宝石をぎっちりとしらった額飾りが嵌められる頃には、体中がじゃらじゃらしている感じで、とにかく重い。

「アシャあ」

「泣くな泣くな、最後はこれを羽織って完成、そら」

それら所狭しと着飾った姿をまるで隠すように、純白のマントが肩に留められた。背中から体の前まで回して、合わせ目には美しい金の細工物で留める。

「...まるで...」

「ん？」

「...ううん」

(花嫁衣装みたいだ)

鏡に映った自分の姿にそう思った。

焦茶の短い髪には、宝石を組んだ銀鎖が光っている。その頭を少し覆って、しみ一つない白いマントが体を包んでいる。

「...あ」

ふいに、それが体の傷全てを隠す形のドレスだと気づいで、視界が一気に潤んだ。

「...りがと...」

(アシャ)

わかっていてくれた。ユーノの怯みも疎みも、ちゃんと理解していてくれた。

小さく呟いた感謝が届いて欲しいような欲しくないような、それでも胸を浸す温かな気持ちは信じられないほど心地よく。でも。

(ちゃんと言わなきゃ)

もうアシャとは離れるかも知れないのだから、お礼を伝えなくては、そう思った瞬間、

「さてと、仕上げだ」

「っ！」

突然、顎を押し上げられ、ユーノはうろたえた。

「な、なにっ」

「紅、さしてやるから、少し口を開け」

「あ...うん」

「もう少し...そうだ」

アシャが小指に華やかな紅をつけて、そっとユーノの唇に触れる。

(...だめ...だ)

間近に迫る煌めく紫の瞳に、思わず目を伏せる。締め付けられたせいもあるのだろうか、体中が熱くなつて小刻みに震えてきてしまった。我慢しようとするのに、ふ、とアシャが低く笑った声に、ますます頬が熱くなる。アシャの指は静かにユーノの唇を撫でていく。下唇から上唇、もう一度、下唇。

ついつとアシャの指が離れた。

「よし。閉じて」

「.....」

唇を閉じ、目を開ける。すぐ近くに、濡れたようにあやうい光をたたえたアシャの瞳があった。瞬きする金の睫毛、それが瞳を軽く覆い、伏せられたまま、低い囁きが耳に届く。

「.....もう一度...少しだけ開け」

ごくり、と唾を呑んだ。その場から逃げ出したいような気持ちになる。敏感に察したアシャが、静かにユーノの体を包んでくる。背けようとする顔を、優しく固定された。しゃらり、と髪で銀鎖が鳴る。

「ほら。塗り残しがないか、見るんだから」

「う...ん...」

それはきつと嘘だ。けれど、その嘘に騙されてみたい、そう感う胸が、妖しく揺れて渦巻いていく。少し目を閉じる。乾き始めた唇がなかなか開かない。待ちかねたように、影が動き、気配が迫る。

(ア...シャ...)

ことこと。

「っ!」「!」

響いた音に瞬時にユーノはアシャから身を引いた。相手を見ないように扉を向き、平静な声を装う。

「誰？」

「お支度は済まれましたでしょうか」

ユーノが遅いのを案じてくれたのだろう、侍女の声が応じた。

「わかった」

くるりと振り返る。額の飾りが重い。

「行こうか、アシャ」

「...ああ、そうだな」

振り向くと、アシャはふてくされた子どものような顔で、マントを払って身を翻した。

ミダス公邸の広間に向かいながら、イルファは未だにぶつくさ言い続けている。

「しっかしなあ.....確かにそうしてりゃ、女だが...」

男とも女ともつかぬ、中性的な格好をしたアシャに比べて、鎧を象った胴着に真紅のマント、銀の鎖を肩から垂らしているイルファを、呆れた顔をしてレスファートが見上げる。

「だから言ったでしょ。ユーノは誰よりもきれいな女の人なんだって」

そういうレスファートは濃紺の腰布の上から薄く透けた水色の布と輝きのある白い布の上着、額に銀のサークルをつけている。頭を振る度にさらさら音を立てて流れるプラチナブロンドは回廊の灯に眩いほどで、これほど美しい少年も多々あるまい。

「女...ねえ...」

イルファが複雑な顔で、ユーノを見る。少し肩を竦めて見せると、相手はごしごしと頭を掻いた。

「俺にはどう見ても、アシャの方が女に見える」

「イルファっ！」

「おい」

レスファートが眉を逆立てて怒り、アシャは苦虫を噛み潰したような顔になった。

(ま、確かにね)

苦笑を返すユーノに、アシャはますます不愉快そうだ。

そのアシャは、まるで導師が着るような濃い紺色の衣装を無造作に纏い、ところどころを金の組み帯と紐で留めていた。装飾品と言っても片耳の耳飾り程度、それでも十分にアシャの美しさは人目を惹いた。いつも上げていた前髪を垂らし、その奥から金細工に囲まれた宝石のような紫の目がこちらを見返している。

そうしていると、アシャの端整な優しい面立ちが、別の翳りを帯びて見えた。賢者のような少年のような、女のような男のような、年齢性別も不明になるあやふやな不安定さの中にちりばめられた美。それがアシャを見る者の目を釘付けにする。その不安定な美しさを越え、正体を見定めようと焦る。だが心を構えたたん、捉えかけていた因子は微妙に変化して行って、相対する者は再び置き去られてしまう。

「っ！」

アシャが先に立つのについて、広間の入り口を入ったたん、どよめきが起こって我に返った。

(ここでもアシャは人を圧倒するのか)

苦笑しかけたユーノだったが、その後一気に広がった、いつもとは違う沈黙にきよんとする。

(何だ?)

広間に集まった人々が奇妙な表情で一点を見つめている。その意味を探ろうとして、視線を注がれているのが自分だと気づき、なお戸惑った。隣でふ、とアシャが微かに笑う。

(アシャ?)

そろそろと相手を見上げる。

「どうしたんだろう...」

そっと囁いた声さえ響き渡りそうで、声をより潜めた。

「何か...私、おかしい？」

凝視されているのは『銀の王族』だからだろうか。それとも、知らずに無作法な振舞いをしたからだろうかと不安になる。

「いや...別に」

アシャは妙な笑みを返してきた。

「似合ってるぞ」

「でも...だって」

特に娘達、女達の視線が妙に険しい気がする。だが、それを口に出すのは自意識過剰な気もして口ごもる。

「...そりゃ、静まり返りもするだろうな」

だがアシャには理由が充分わかっていたらしい。しらっとした顔で流す。

「...どういうことだよ」

「気にするな」

「気にするなって...」

(特に無作法というわけじゃないのかな)

取り合ってくれないので、仕方なしに進み出したアシャに付き従う。そのユーノを明らかに追いか

けて来る視線は、かなりちりちりと痛い、理由が全くわからない。こんな目で見られたことなど覚えがない。

「や...これはこれは...」

なぜかミダス公まで茫然としていたらしい。ようよう口を開いたかと思うと、正面の玉座から降りてアシャの前に膝を折った。

「どうぞ、あちらへ」

「いや」

アシャは軽く首を振った。

「今夜はあなたの宴の客だ。ミダス公、そのままに」

「しかし」

「どうぞ」

「...では」

ミダス公は渋々と玉座に戻ったが、腰掛けずに側に立った。その前で、今度はアシャが片膝を折って頭を下げるのに、いささかうろたえた様子でことばを継ぐ。

「よ、ようこそ、アシャ・ラズーン。『氷の双宮』に戻られるまで、ゆっくりと寛がれますように」

近くの似たような、ただもう少し華奢で小振りな椅子に座っていた少女を振り返る。少女は頷いて立ち上がり、緊張した顔で深緑のドレスの裾をさばいて段を降り、アシャの前で深く礼をとった。

「よくお帰りになりました、アシャ兄さま」

それから、ユーノ達三人に向き直って頬を染め、

「よくいらっしゃいました。私がリディノ・ミダス。情け深き『太皇（スーグ）』の下、ミダス大公の娘と呼ばれております」

（やっぱり）

同じように礼を返しながら、ユーノは頷く。

（この人が、リディノ・ミダス）

「ありがとうございます。私はセレドの第二皇女、ユーナ・セレディスです。ラズーンの神の導きにより、ここまで参りました」

くすくすと周囲の娘が笑いを漏らした。きつとした表情になったリディノが振り向き、娘達を制する。大公の娘の威厳は健在らしく、娘達が顔をひきつらせて押し黙る。

改めてユーノに振り向いたリディノは、恥じらうような色に頬を染め、目を潤ませている。

「無作法をお許し下さい。地方を治める者のこと、他国の皇族への接し方を知らないのです。.....ただ、ラズーンでは『ユーナ』というのは男名にあたります。見識の浅さをお詫びいたします」

「ああ.....そう、ですね」

ユーノの胸の内に、甘いとも切ないとも言えない優しさが込み上げてきた。

もう遙か遠い日のことのように思える、セレドにアシャがやってきた日。あの日も、宴の席でこんな風にアシャが名前のごとで失笑を買った.....。

「アシャから聞いています」

懐かしさに笑みを浮かべた。

「リディノ姫、私は国ではユーノと呼ばれることが多かったし、それが気に入っています。だから、どうぞこちらでもユーノとお呼び下さい」

「あら、それなら」

リディノはにっこりとあどけない笑みを見せた。

「私もリディで呼ばれることが好き。どうぞ、そうお呼び下さい.....皆様も」

「はい、リディ姫」

レスファートがきちんと王侯貴族の礼をして応じた。まあ、と軽く驚いて、嬉しそうにリディノがレスファートに向き直る。

「僕はレクスファの第一王子、レスファートです。よろしく」

「はい、よろしく願いいたします、王子様」

「あ、俺はイルファ、レクスファの剣士です」

女と見ればたちまち愛想がよくなるイルファが大声を出した。

「レスファート王子の付き人として旅をして来ました」

どこがだ、という顔になったユーノ達を無視して、イルファは豪快に笑う。

「大変な旅でしたが、無事にお連れ出来て安堵しました」

「お疲れでしたね、どうぞゆっくり滞在なさって下さい」

微笑みを返してリディノは頷き、自分の座に戻りかけたが、問うような目になって立ち止まった。

「あの」

「はい...何か？」

向けられた視線はユーノ、訝しく尋ね返すと、相手は困ったような顔になってためらう。

「失礼ながら...」

「はい」

「あなたは.....アシャ兄さまの『言い交わされた方』なのでしょうか？」

「は?!」

いくらユーノが不調法でも、そのことばの意味ぐらいはわかる。ましてや、この衣装を着た瞬間に感じた感覚が、次に続いたことばをはっきり裏付ける。

「だって...」

リディノは一瞬幼い口調になった。

「それは...ラズーンの花嫁衣装ですので...」

「...っ、ア...シャ...っ！」

堪えようとしたが歯止めは利かなかった。一気に熱くなる顔をアシャに振り向けるが、当の本人は涼しい顔でユーノを見返し、微笑んで答える。

「まあ、そういうことだ」

「ったく！」

ユーノは広間の一角で苛立ちながらアシャを睨みつける。

「道理で娘達が殺気立ってたわけだ」

「そう怒るな」

くつくつとアシャは喉の奥で楽しげに笑う。

「悪気はなかったんだ」

「あってたまるか！」

顔を背けて眉をひそめる。

(こっちの気持ちも知らないで)

広間は今、踊る男女で一杯になっている。楽師の奏でる立風琴(リュシ)が幾重にも重なって音律を紡いでいる。

イルファはその威風堂々とした体格を見込まれたのか、男達に挑まれて酒の呑み比べの真っ最中、レスファートもいつものように女達に囲まれて菓子をもらっている。

「踊ってこないの？」

「一人と踊ると後が怖い」

「...わかるような気がするよ、身をもって」

ユーノは溜め息まじりに答えた。正直、さっきから周囲の女達の視線が痛くてならない。

(そんなのじゃないのに)

素っ気ないアシャに焦れたのだろう、ついに一人の美女が誘いをかけてきた。

「旅のお疲れは存じておりますわ。でも、そのお疲れを、いささかでも癒せればと願う私達の気持ちも受け取って頂けませんの？」

「どうする？」

こそりと尋ねるユーノに、アシャは溜め息を返す。

「行って来る。ミダス公の親族だ」

「ふうん」

気怠そうに壁から離れたアシャを美女が誇らしげに迎え、一気にその周囲に女達が集まった。

(あの中で、まだ見劣りがしないというのが凄いよな)

ちらりとユーノを見やって来る美女の視線の意味は重々わかるが、その美女と並んでもアシャの方が華やかに見えるあたり、罪作りの男だどつくづく思う。

アシャを迎えた女達が、唇の端に浮かべた笑みと一緒にこちらを眺めるのがうっとうしくなって、ユーノもまた体を起こしてテラスへ逃れる。

テラスが突き出した庭園には濃い樹木の影が落ちている。月が昇って辺りを冷たく照らしているのだ。

木々の触れ合う音、ジエブだろうか、覚えのある葉鳴り、鼻腔を清めるような樹の香り。

(やっぱり、夜会は苦手だ)

清冽な夜気を吸い込みながら目を閉じる。

人の思惑を操れると思っている男女、駆け引きを楽しむやりとり、着飾り宝石を煌めかせる人々の掌で躍る酒や菓子、そして誰が上か誰が下かと比較し続けている視線。

(駆け抜けてしまいたい)

心の中にいつも広がる、この果てのない草原の光景を。どこへ辿り着くあてもなく、途中で倒れるかも知れない命も構わない、ただただ己の速度をひたすら上げて走り去ってしまいたい。

きっとユーノがセレドで夜会に出ずにレノを駆っていたのは、自分の容姿のことだけではなく、もっとも猛々しく鮮やかなこの感覚に自分を任せていたかったということもあるんだろう、と初めて気づく。

そして、それはラズーンへ旅立とうと思ったその瞬間にも、胸の底にあった、とも。

(どこまでも、どこまでも)

走り去る金色の影、群れからただ一頭離れた月獣(ハーン)のように、自分の角を振り立てて。

(そうか.....逃げていたばかりじゃ、なかったんだ)

自分の生き様を周囲の基準でばかり考えていたから、自分の容姿を引け目に思って逃げ回っていると感じていた。

けれど本当は、ユーノは誰かと妍を競うよりも、まだ知らない広大な世界を駆け抜けていくことを願っていたに過ぎないのかも知れない。

(それこそ)

そのためにどんな傷を負うことになっても、まっすぐに彼方の世界を進みたい、と。

「...なんだ.....そうか」

微かに笑った。

(誰のためでもない、というのは正しかったんだ)

ユーノはユーノのために、ユーノが本当にしたいことのために戦い続けてきたのかもしれない。

(私の願いを叶える、ために)

今まで感じたことのない開放感に胸が澄んでいく気がした。

(まっすぐに.....いこう)

この命の果てるまで、最後の息を引き取る瞬間まで、思うままに駆け抜けよう。

「ふ...う」

深呼吸をして目を見開いた。

目を閉じる前よりも一層鮮やかに見える夜景に見惚れる。

「ユーノ」

「っ」

ふいに声がかげられ、はっとして振り返った。ゆっくり近づいてくるリディノに緊張を解く。

「お疲れですか？」

「いえ...こういう場は苦手で」

柔らかく微笑む相手に笑み返す。

「この衣装だって無理に着せられたんですよ。あの傷を見せたままというのも、あまりに見栄えが悪いと」

「あ」

リディノはびくんと体を堅くした。頬を赤らめて、おずおずと、

「さきほどは...申し訳ありません.....私」

「ああ」

ユーノは笑った。

「いいんです。誰だってびっくりしますよ」

自分でも信じられないほど軽く答えられた。

「でも」

「気にしてませんから」

「よかった...」

ほ、と溜め息をついたりディノは、ふいに別のことに気づいたようにユーノを見た。

「もう一つ、聞いても構いませんか」

「ええ、どうぞ」

「あの.....その衣装.....アシャ兄さまが着せたのじゃありませんわね？」

「は？」

「あの...だから...」

リディノはもじもじしながら俯いた。耳の辺りまで桜色に染めて小さな声を絞り出す。

「その衣装を男の方が着せるということは.....その.....着せるのを手伝う、ということ、は.....夫と妻...だから...できることであって...」

「あ」

(アシャの奴！)

顔に血が昇る。一人で着れるの着れないの、脱ぐの脱がないのと、妙に拘っていた理由がよくわかって、一層むっとした。

「そんなことはありません」

ことさら強く否定する。

(あのくそ野郎、私が知らないのをいいことに何を考えて)

人をおもちゃにしがたって。

「私とアシャには何の関係もありません」

不安そうなりディノを思わず安心させようとしてしまう。

「本当？ ああ...」

「！」

ふわりといきなり抱きつかれてぎよっとした。

「よかった！ アシャ兄さまが旅に出ていらっしやる間、それだけが心配だったの」

「へ？」

奇妙な物言いに過熱していた頭が一気に醒める。

(今、なんて)

「私、小さい頃から、アシャ兄さまだけがずっとずっと好きだったの！」  
無邪気にユーノを見上げて笑み綻ぶりディノの安堵に、ユーノはことばを失った。

夜は更けていく。人々の祈りと眠りを豊かに発酵させるべく。

「……」

眠れないまま、ユーノは一人、テラスにもたれて遠くの街並を、『氷の双宮』があると言われた方向を見つめている。

「！」

「やっぱり、ここにいたのか」

背後の気配に剣を抜きかければ、それは青い夜着を羽織ったアシャの姿だった。

「ベッドにいないから、どこへ行ったのかと思えば…」

「何の用？」

「近く、お前を『氷の双宮』に送り届ける」

ことさら淡々と響く声が告げた。

「明日か明後日の夜だ」

「夜…」

「人目につかない方がいいからな」

「ふうん」

これは正式な招聘のはず、それなのに、ラズーン到着の歓迎ぶりとは打って変わっての密かな扱いは、やはり何か裏があるのかも知れない。

「ユーノ？」

素っ気ない返事に、アシャが不審そうに覗き込んでくる。不安を問い正されたくなくて顔を背けると、脳裏に別の苛立ちが蘇った。

「何を拗ねてる？」

「拗ねてなんかいない」

「にしては愛想がないな」

(こういうところはとことん無神経だよな)

思わず唇が尖った。

「ユーノ」

「アシャのスケベ」

「な…」

一瞬詰まったような顔になったアシャが、すぐにむっとした声で切り返してくる。

「俺のどこが」

「私にドレス着せる時、何考えてたんだよ」

「あ、ああ、あれ、な」

勢いを削がれたようにアシャが微妙な口調になる。

「だが、あれはお前が着せろと言ったんだろ？」

言い返したものの語尾が甘くなるのに、訴える。

「そのせいで、リディノ姫に妙な誤解されちゃった」

「誤解？」

「そ」

くるりと向きを変え、テラスに背中をもたせかける。

「私とアシャが、その」

さすがにちよつと言出しにくくなって口ごもる。

「その…そういう関係なのかって」

ちらりとアシャがユーノを見た。ユーノの表情から何を読み取ったのか、にやりと唇を笑ませる。

「そういう関係って？」

「だから！」

思わず顔が熱くなった。

「だから、その、夫婦、の関係っ」

「夫婦の？」

「だからっ！」

わからないなあ、どういうことなんだ、と訝しげに瞬くアシャに喚きかけ、広がる笑みからかわれているのだと気づいた。くすくす笑うアシャの視線を舌打ちしながら避ける。

「…ったく、性格の悪い」



ちょっと見栄えがいいからって、人の気持ちを好きなように弄んでいいってことじゃないんだぞ。唸りかけたことばは急いで呑み込む。じゃあどんな気持ちなんだと突っ込まれるのは目に見えている。

だが、アシャはそこで話を終わらせる気はなかったようだ。

「で？」

「は？」

「どう答えた？」

「どう答えたって」

とことんまでからかう気なんだなとむっとした。

「そのままだ。私とアシャには何の関係もない、スオーガの大地ぐらい何にもないって」

後半はでまかせだが、それぐらい言い切っておかないと、後からどんなからかいのネタにされるかわかったものじゃない。

「ふ、うん」

楽しそうに顔を綻ばせていたアシャは、思ったほどユーノが動揺しなかったのが残念だったのだろう、不満そうに唸ってテラスに腕を組んでもたれ、顎を載せた。

「スオーガの大地ぐらい何にもない、か」

ぼそぼそと呟いた後は、黙りこくってしまう。

緩やかに風が吹き渡っていき、沈黙はなかなか破られない。仕方なしに、

「...リディノ姫をどう思ってるの？」

尋ねてみた。

「彼女は...アシャのことが好きなんだって言ってたよ。ずっと.....小さい頃から」

アシャはそれを知っていたらどうか。知っていてレアナに接近したとしたら、本音はどこにあるのか、気持ちはレアナにあるのかりディノにあるのか、そこは確かめておきたい。

「...ちょっとは俺の気持ちもわかりそうなものなのに...」

さっきより小さな呟きがひどくがっかりした響きを宿して、ちょっとほっとする。

(よかった、レアナ姉さまの方が好きみたいだ.....って、ばかか、私は)

自分が好きだと言われたわけでもないのに、何を安心しているんだ、そう思いつつ、

「あ.....えーと...」

応対のことばを探していると、アシャはのろのろと向きを変えた。ユーノ同様にテラスにもたれ、ほう、と悩ましげな溜め息をつく。

「リディノは妹のようなものだな」

「妹？」

「ああ」

一瞬の静けさ、やがて、きっぱりと低い声が告げる。

「俺には、他に好きな相手がいる」

(レアナ・セレディス)

「ふう...ん」

浮かんだ名前が胸を切り裂くような気がして、眉を寄せ、テラスに身を持たせて仰け反った。

「そう...なんだ」

「.....そうだ」

ちらりとこちらをアシャが見たような気がした。レアナを俺に託してくれないか、今にもそう宣言されそうで、心がきりきりと緊張する。

いつの間にか月が明るく昇っていた。夜気は鋭い樹の香りから、甘く香しい花の匂いを漂わせ始めている。月光の中で咲くという花々が開き始めたのだろうか。

(いい匂い...)

目を閉じ、柔らかな香りを吸い込む。その香りの中には、隣に佇むアシャの体温も含まれているのだろう、安堵と平穏を約束された旅の夜が蘇る。

重ね合わせられなくてもいい、このまま隣で、同じ目的のために歩いていけるのなら、今のユーノは、それはそれで満たされるのかもしれない。

(アシャと背中を合わせて戦って)

かけがえのない、唯一無二の親友となる、それもまた幸福なのかもしれない。

「そうだ、ユーノ」

「ん？」

「これを返しておく」

目を開けると、アシャが首からペンダントを外すところだった。セレド皇国の世継ぎを示す紋章、出立の日レアナから託されたものだ。

「ああ...ありがとう」  
(そうか、これもまた、私に戻されるのか)  
皮肉なのか、運命とはそういうものなのか。  
自分が生きる方向を見つめ出した矢先に、再びセレドを担う証を示されるとは。  
(戦え、ということなんだろう)  
自分の在り方を嘆いてばかりいないで、自分の在り方を受け入れて、かけがえのない友人や家族のために心身尽くして働けという天命なのだろう。  
「長く預けて、済まなかった」  
こういうところもアシャに甘えていたのかも知れない、と思った。首に巻き付けたペンダントは冷たく重い。  
(でも、それを担うためにきつと、いろいろなことがあったんだ)  
体中の傷を引き換えに、この重みを支える役目を引き受けられるように鍛えられた、そういうことなんだろう。  
「.....ところで、何をしていた、こんなところで」  
まるで、胸の内を吐き出せと言うようにアシャが問うてきて、苦笑する。  
「今までのことを...思い出してた」  
話すつもりはなかったのに、つい、口からことばが零れた。  
「いろんなことがあったなあ、って」  
風が吹き寄せる。前髪が乱れて伏せた目を隠してくれるから、話しやすくなった。  
「.....よく生きて辿り着けたなあって」  
「本当だぞ」  
アシャが熱を込めて同意した。  
「ガズラやキャサラン辺境区のようなことが、これからも続いたら、俺がもたん」  
「うん...」  
本当に無茶ばかりやってきた。  
「いろいろ、迷惑かけたよね」  
風は樹々の梢も揺らせる。庭のどこかにジェブの樹があるのだろう、いつかの夜のような音律を紡いでいく。  
「長くて.....」  
(私はアシャにお礼も伝えていない)  
「.....幸せな旅だった」  
それを伝えるのがもう胸苦しくて、辛くなった。  
「幸せ？」  
アシャが訝しそうに問い返す。  
「死にかけてばかりだったじゃないか」  
「うん...」  
(それでも、アシャ)  
答えられない続きを、胸の奥でそっと呟く。  
(たとえ途中で死ぬことになっても、その瞬間まで、あなたの側に居られるだろう?)  
それを幸せと呼ばずに、何と呼ぶのだろう。  
滲みかけた涙を一瞬で振り切った。  
「でも、何か、信じられないや」  
「何が」  
「こうして今、ラズーンに居るってこと。あれほど遠かった地に辿りついてるってことが.....目を覚ましたら、セレドの自分の部屋だったりしてね」  
「おいおい、冗談じゃないぞ」  
「わかってる」  
くすくす笑って目を開く。  
「これは現実だ」  
無意識に声がきつくなった。  
『氷の双宮』『太皇(スーグ)』『銀の王族』。  
ラズーンに含まれている謎の数々が、今解かれようとしている。  
だが、心のどこかに、それに飛び込む前に、一時でいい、休息が欲しいという思いがある。もうほんの少し、眠っていたい。なのに、心が張りつめて眠れない。  
(何がある? 何が『氷の双宮』で待っている?)  
その問いかけに対する答えは、いつもわからないままだった。おそらくは、この世界の成り立ちの

意味まで含んでいるだろう、ラズーンの大きい謎。

自分の未来を知りたいというだけではなく、剣士として、彼方を望む旅人としての心が駆り立てられる。

「ユーノ」

「ん？」

「もう、寝ておけ」

アシャがテラスから身を起こして手を伸ばし、そっとユーノの髪に触れた。

「旅の疲れを残しているのはよくない」

（ああ、そうだ）

ここに一人、その謎に精通し、しかもちゃんと答えてくれそうな相手がいたじゃないか。

（旅の途中なら無理でも、今なら）

「アシャ」

「うん？」

「『氷の双宮』で何があるの？」

「.....」

答えないアシャに、ゆっくり頭を巡らせた。相手が、これまで見たことのない厳しい目になっているのに気づく。

「謁見、と言っても信じないだろうな」

皮肉な笑みを押し上げて、アシャはこちらを見つめ返した。

「ちょっと無理」

「...洗礼、と一般には呼ばれている儀式がある。...それが済めば、元の国へ帰れるのが常だ」

「洗礼？」

「.....」

「言いたくないんだね」

ユーノは薄く笑った。

「私が臆病風に噴かれることなんてないの、知ってるくせに」

アシャは瞳を翳らせた。一気に表情の読めなくなった目を『氷の双宮』の方へ投げ、淡々と続ける。

「いずれわかるさ」

軽く前髪を払ってユーノを振り向き、

「そんなことより、早く寝て、旅の疲れをとることだ」

あからさまに話を逸らせた。苦笑いを返しつつ、けれどその先は梃子でも話してくれそうにないと

察して、ユーノは肩を竦める。

「うん...でも興奮してるのかな、目が冴えちゃって、なんか眠くならないんだ」

軽く片目を閉じて続ける。

「もう少しここにいる...わっ」

「だめだ」

反応する隙がなかった。瞬時に距離を詰められ、ふわりと抱き上げられて思わず固まる。

「見ろ、こんなに冷えきってるくせに」

「お、おろしてよ、アシャっ」

「だめだ。お前が寝るのを見届けてから部屋に帰る」

「変に思われるって！」

「ほ一、ここで騒いで変に思われたいのか」

「う」

冷ややかに反論されて思わず口ごもる。

（でも本当に眠くならないんだだけ.....あれ？）

ふあ、とあくびを漏らして目を擦った。今の今まで、眠気の切れ端も感じなかったのに、急に眠くなってくる。

「ほら、眠そうじゃないか」

優しく甘い声が耳元で囁かれる。

（どうして、なんだろ...）

問いかけた頭に、とろとろと温かな霧が忍び寄る。包み込んで思考力を奪っていく。

（あ...ったかい.....から...）

アシャの体に温められるから。規則正しい心臓の音が、安心だと告げるから。

（...だい...じよぶ.....だ...）

ここでは全てを任せて眠りについても大丈夫、そう確信できるから。

その答えに辿り着くまでに、ユーノは深く寝入っていた。



するりとユーノの腕が滑り落ちる。アシャの胸に頭をもたせかけて、柔らかな寝息を立て出した相手を、静かに部屋に運び込む。

「.....かなり長い間居たな」

あちらもこちらもひんやりしている。けれど、アシャの腕の中に居る間に、少しずつ少しずつ温かみを取り戻してくる体が、ユーノと自分の距離そのものに思えて切なくなる。

ぐっすり眠り込んでいるユーノをベッドに寝かせる。

(疲れた顔して)

ちよんと頬を突くと、ん、と小さく呻いて顔を背けた。だが、よほど眠いのだろう、目を覚まさずにすうすうと気持ち良さそうに寝息を立て続ける。

「.....」

ふ、と自分の眉が緩んだのに気づいた。

「.....本当にお前ときたら」

(どこまで心配させたら気が済むんだ?)

もうラズーンの中に入っている。アシャの腕の中に抱え込んだようなものなのに、なぜ、なおもこうして、側に居なくなるかも知れないと不安になるのだろう。

(俺よりずっと遠くを見ている気がする)

ラズーンに辿り着いた時、気のせいだろうか、ユーノは手前にあるラズーンよりも、その後方、遙か彼方にある山々の頂を見つめていたような気がした。

旅の終点はここなのに、ユーノはまだもっと先へ進んで行ってしまいそうな。

そして、その山々にはミネルバの属していた『泉の狩人(オーミノ)』達が居る。

(偶然か?)

ユーノがもし、『銀の王族』の中の特殊な存在であるとしたら、儀式の後に国に戻れるかどうかはわからないと知っている。二百年祭がこれまでのものと違うものになりそうな世界の変貌、それと、かつて大いなる戦いに加わった『泉の狩人(オーミノ)』達が関係してきているのは偶然ではないはずだ。

「...行くな」

思わず零れた自分の声の幼さにたじろぐ。それでももう一度、繰り返してしまう。

「...どこへも行くな」

(俺の側に)

「ここが終わりだ」

そうではないことはわかっている、けれどもことばは力を持つかもしれない。

「俺の側が...お前の居場所だ...ろ...?」

(ああ...俺は)

ふいに気づいた。

自分が捨てたラズーンを目指したのは、不要だと思っている正統後継者を名乗ったのは、ラズーンの王子ならば、この魂を自分に繋ぎ留められるかも知れないと思ったからだ。ユーノが辿り着こうとしているのがラズーンならば、自分がその支配者であればいいと思ったからだ。

(そうすれば、ユーノは俺を求めてくれる...と...?)

「.....ばか...か...俺は...」

思わず自分の髪をぐしゃりと掴んだ。

「そんなやつは...こいつじゃない...じゃないか...」

ベッドの上で無防備に月光に照らされた頬、ああそうだ、ようやくアシャはここまでユーノに近づけた。自分が側に居ても安心して眠ってくれる、その信頼を勝ち得はした、だが。

(俺が欲しいのは)

体を覆うドレスなど、きっと探せばもっと見つかる。なのに、あの広間で、四大公の一人にまでユーノのあの姿を見せようとしたのは、きっと叫びたかったからだ、手を出すな、と。

(こいつの所有者は俺だ、と)

「まったく.....一体何をやってる...」

自分の美貌でなびかなかった。剣の技を見せつけ、常人の知らぬ知識をほのめかしても魅かれてくれず、間近に守り支えても揺れてくれなかった。だから地位と権力で、ユーノを圧倒したつもりだった、なのに。

生まれた故郷からこれほど遠く離れた場所で、自分の生き様を嘲笑されるかも知れないような世界

で、戻る術さえ保障されないこの状況で、アシャと過ごした時間を幸せな旅だったと言い切って笑う。

「...なんで...俺は...そんなことが...嬉しい...？」

視界が滲んだ理由はわかっている。

生まれた理由はなかった。殺される理由しかなかった。存在する意味はなかった。存在しない必要性はあった。

誰が今まで、ユーノのように笑ってくれただろう、数々の飾りを越えた場所にやってきて、アシャの生身に触れてもなお、あなたと居るのは幸福だと見上げてくれる。

「もっと...もっとこいつを.....手に入れたい...んだろ...？」

なのに、側でユーノが眠っている、それだけで満たされていくこの気持ちは何だろう。

「.....違う...のか...？」

小さく呟く声は、戸惑い怯えている。

「.....俺が.....所有されたい...のか...？」

主よ。

ことばが胸に響く。

俺の、ただ一人の主よ。

「.....そう...か...」

微笑んだ。

「俺は.....お前の付き人...だよな...？」

これまでも、これからも。

「ああ.....そうだ」

静かに顔を降ろして、深く眠るユーノの唇に口づけする。

だがそれは欲情というより遥かに深い願い。

「ユーノ.....頼む...」

低く低く懇願する。

「俺を...手放さないでくれ...」

漏れかけた嗚咽をアシャは呑み込んだ。

## 4.刺客

「ユーノ？」

アシャはひよいと部屋を覗き込んだ。が、そこにもユーノの姿はない。

「どこ行ったんだ、あいつ」

再び回廊を歩き出したアシャの手には、五本の銀色の弦を張った楽器がある。ラズーンのもっとも代表的な楽器、立風琴（リュシ）だ。『氷の双宮』へ行くまでにユーノに休息を取らせようと、柄にもなく立風琴（リュシ）を引っ張り出してきたのだが、肝心のユーノの姿がどこにもない。

（こんな所を他の娘に見られでもしたら大騒ぎだ）

溜め息をついて立風琴（リュシ）の表面の細かい彫刻を見つめた。苦笑を浮かべながら考える。

（馬鹿なことをしている）

以前のアシャなら、たかが娘一人のために立風琴（リュシ）まで引っ張り出してくるなんて酔狂なことはしなかっただろう。回りの男がいそいそと、恋人のために花を集め、身なりを整え、恋歌に頭をひねるのを見ては、それほどまでして娘の心を捉えてどうするのだろうと不思議に思い続けていたはずだ。

そんなことに時間を裂くぐらいなら、ラズーン外縁の守りを堅め、世の動乱の方向を見極め、自分の辿るべき道を探し当てたい。

アシャの考えていることはいつもそれだけで、娘の投げる花に見向きもしなければ、類まれなる美姫と言われた娘の歌にも心を動かされなかった。

少年から青年へ、危ういまでに妖しい美貌を保ったまま成長していく彼に、周囲は何とかしてその興味を捉えようとした。四大公は言うに及ばず、あらゆる貴族がアシャを宴に呼び寄せようと躍起になったが、アシャはどれもこれも丁重に断り続け、『氷の双宮』に籠っていた。剣の技を磨き、医術の腕を高め、『太皇（スーグ）』の期待に答えて、深遠な知識をラズーン正統後継者の一人として蓄えるべく。

人はそうした彼を、整いすぎる美貌と石のような心にかけて、『氷のアシャ』と噂した…。

「...そうなの」

リディノはうなじにかかった淡い金髪の巻き毛をうっとうしそうに払って頷いた。

ミダス公邸の一隅、広大な花苑の中には、今を盛りと咲き乱れる淡い紅の花弁のライク、細かく縮れるような黄色の花々、『月光花』とも呼ばれる蒼白いラフレス、そしてユーノが名前も知らぬ大輪の赤い花が溢れるように咲いていた。

そろそろ昼になろうかという日差しは暖かく花々を照らし、甘い香りが空気に混じっている。ブーコが鋭い羽音を響かせながら、その体長より長い金の触覚を振り回して、花から花へと渡っていた。

それを目で追ったユーノは、再び響いたリディノの声に、相手を振り向いた。

「あまりにも周囲に素っ気ないものだから、『氷のアシャ』と呼ばれて……それもそうよね、『西の姫君』の誘いまで断るんだから」

「『西の姫君』？」

「そう。今はジーフォ公の婚約者だけど、アリオ・ラシェットという、とても美しい方」

リディノは行儀良く広げた白いドレスに、ライクの花弁を撒きながら応えた。

対するユーノの格好はというと、いつまでもあの花嫁衣装を着ている訳にもいかず、かと言って、リディノが準備してくれたものには傷を隠せるものはほとんどなし……がために、少年用の緑のチュニックにマント、体にぴったり合ったズボンとシャツと言う出で立ちだ。装飾品がわりにと渡された銀のサークルを額にはめ、ただでさえ男だと誤解されやすい姿に、ますます拍車をかけているのは自覚している。

ユーノは今朝リディノに花を見に行こうと熱心に誘われた。疲れた心には美しい花が一番のはずと繰り返し説かれ、根負けして、今こうやって花を愛でながらリディノの相手をする羽目になっている。

「そうね……アリオはちょっとユーノに似てるわ」

「私に？」

「ええ……長い黒髪の黒い目の…」

眩そうな目をしてユーノを見つめ、リディノは微笑した。

（長い髪…）

ユーノは無意識に髪に触れ、僅かに唇を笑ませた。目の前のリディノの、肩を過ぎて背中に乱れる淡い金色の渦とは比べものにもならない、ぼさぼさの短い毛が指に触れる。

(あの時、切ってしまったんだっけ...)

野戦部隊(シーガリオン)の星の剣士(ニスフェル)として、コクラノの奸計に陥り、『風の乙女(バルセド)の住みか』に転げ落ちた時に。

「ユーノ？」

「あ、ううん。話を続けて」

「うん」

リディノは嬉しそうに子どものような邪気のない笑みを見せた。

「それでね、その『西の姫君』が、アシャの噂を聞いて、私なら大丈夫と言って、アシャと呼ばれたの」

くすつと彼女は悪戯っぽく笑った。

「だけど、アシャときたらね、『あなたほどの高名な女性は、私のような若輩にはもったいなく存じます。また、ジーフォ公が誤解されても、あなたの名前に傷がつくことでしょう。私は、やはり『氷の双宮』で魔物(パルク)の攻略でも考えているのが似合いですよ』って返事をしたのよ。ジュニーの花を添えて」

「そりゃ...」

ユーノは目をぱちくりさせた。

(要するに、あなたの相手より魔物(パルク)の方がまだましってことか)

おまけにジュニーの花だ。

ジュニーは、その花卉から紫の染料を取る濃紫の花だ。実をつけず、根からの株分かれで増えていく花で、それを考えると『えらぬ恋』という答えのだめ押しになる。

「きついな.....怒っただろうね、相手」

思わず親しげな口調になってしまったのは、リディノの人柄の為せる技だった。

朝、ユーノが目覚めると同時に部屋に入って来て、まるで十年來の友人か、実の姉妹のように一緒に花を見ようとねだった。同い年のはずだが、宮殿育ちのリディノは数歳年下のように錯覚する。

(私も宮殿育ちは宮殿育ちだけど)

「ええ、それはひどく」

リディノは肩を竦めて、ペロツと桃色の舌を出した。小動物を思わせる愛らしさだ。

「『西の姫君』は、その時は確かにジーフォ公に求婚されていたけれど、乗り気どころか嫌がっていたという話だし、アシャに対する自分の魅力にとっても自信があったと聞くわ。腹立ちまぎれにジーフォ公と婚約したって」

「ふうん」

(『氷のアシャ』か...)

それは自分の知らなかったアシャだ、とユーノは考えた。

ユーノの知っているアシャは、いつもユーノの身を気遣ってくれるし、庇ってくれる。怪我をすれば手当をしてくれ、無茶をすれば叱ってくれる。セアラにも父母にも優しく、特にレアナには...

(私は.....いつも幻なんだ)

ふ、と胸が痛んだ。

アシャは、いつもユーノを通してレアナを見ている。ユーノの身を気遣ってくれながら、レアナの心配を考えている。身を挺して庇ってくれるのは、『銀の王族』としてのユーノだ。手当をしてくれるのは、レアナの妹としてのユーノだ。叱るのはセレド第二皇女としてのユーノだ。

何も無いユーノ自身を、アシャが愛してくれることは、おそらくあり得ないだろう。

その証拠に、ユーノが記憶を失った時、アシャは野戦部隊(シーガリオン)にユーノを残してこうとしたと、ユカルが言っていた。

「そのアシャをね、初めて『氷の双宮』から引っ張り出したのは私なの」

「え？」

「私もね、他の人と同じように、アシャに夢中だったの。一度『氷の双宮』から『羽根』に伝令のために自ら出てこられた時ね。こんなに美しい人がいるのかと思った.....信じられなかったわ」

その時の、リディノの気持ちがユーノにはよくわかった。

セレドの往来で倒れていたアシャが、初めてこちらを見つめた時。ユーノの付き人となるべく、夜会に姿を現した時。

(世の中には、これほど綺麗な男性がいるのか、と...)

驚くとともに心を奪われた。奪われて、その想いに戸惑って、伝えることも思いつかなかった矢先に、アシャが言った、守ってやりたい女、一生かけて、その心を捉えるのに悔いがないと思った女性、レアナ、と。



ユーノの想いは伝えるに伝えられなくなってしまった。伝えられずに、忘れることもできずに、アシャが優しくしてくれるたびに、胸の痛みを耐え続けてきた。幾度も幾度も、ふいと口に出してしまいうようになっては、自分の姿を思い起こした。

そんなヤワな育ち方はしていない。誰の手も当てにはしていない。

そう、アシャだって.....。

ユーノの煩悶に気づかず、リディノは楽しそうに話を続ける。

「それで、おとうさまにねだったの。アシャを呼べるような夜会をしてって。なかなかうんと言って下さらなかったけど、それでも最後には根負けなさったわ。だけど、アシャは『西の姫君』まで断ったほどの人だし、私、正直言って途方にくれてしまったの。それでね、ある日『氷の双宮』を訪ねたの」

「え」

ユーノはぎよっとして目を見開いた。

この間聞いた話では『氷の双宮』はラズーンの四大公と言えども、許可なしに入ることのできない所、ということだったはずだ。

「一人で？」

「ええ」

リディノは平然と頷いた。

「だって、私、どうしてもアシャに来て欲しかったの」

(一途なんだな)

胸に湧き上がったのは感嘆だ。好きな人に夜会に来てほしいばかりに、国中のふれで禁じられている所へも乗り込んでいくというまっすぐさ。

(私には、そんな一途さはないな.....。アシャの口からレアナ姉さまのことを聞くのにも、びくびくしているだけだ)

「だから、あの白い壁の所へ行ったの。そうしたら、どうしてわかったのか、小さな扉が開いて門兵が出て来て腕を捻り上げられて.....ほんとに痛かったわ」

リディノは泣きそうな顔をしてみせた。ちょっと尖らせた口元に淡い影が落ちて柔らかそうだ。

「泣き出しそうになっていたら、もう一度扉が開いて.....そこにアシャがいたの」

リディノはこの上なく幸福な笑みになった。

「白い扉を背にすらっと立っていてね、顔つきは厳しかったけど、温かい声で、『何事だ』って。私、今でも、その声を覚えている」

(私も覚えてるよ、リディノ)

もしできることなら、アシャの声を全て心に刻みたいと思っていた。いつ切れるかわからない命の糸を手繰っていくユーノだからこそ、アシャの声の一言一音をも逃すまい、と。

優しい囁きは耳が覚えている。叱りつける声は胸が覚えている。温かな窘めは目が覚えている。そして、夢の中で聞いたことがある熱っぽい声は....。

「アシャは」

リディノの話が再び始まって、ユーノは我に返った。甘ったるく溶けかけていた心を引き締める。

「私に近づいてきてね、『放してやりたまえ』って。それから『ミダス大公の息女とお見受けするが、『氷の双宮』に何用でしょうか?』って深く礼をとって。私、体が震えて、何が何だかわからなくなって、とうとう泣き出してしまったの。そうしたら、そっと肩に手を置いて『泣かないで。私に用ですか?』って」

うっとりとした表情でリディノは語り続ける。

「私、泣きながら、夜会に出て下さいって。何度もお願いしたの。『考えてみます』って言われただけだったから、だめなんだと思っていたら、その夜の夜会にアシャが姿を現したの...」

居並ぶ人々のどよめき、呆然とするリディノに、アシャは近づいてきて、「あのような願いを受ければ、男としては来ない訳にはいかないでしょう」と微笑んだのだそうだ。

「夢のような夜だったわ」

アシャが態度を軟化させ、あちこちの宴に顔を出し始めたのは、その後のことだったと言う。

「いつの頃から、アシャ兄さまと呼ぶようになっててね.....アシャ兄さまは、私のこと、リディって...」

淡く頬を染めて俯くリディノに、ユーノは切ない想いになった。

(同じように...報われないね)

なぜなら、アシャの好きなのは、セレドのレアナなのだから。

「ねえ、旅の間、アシャ兄さまはどうされていたの？」

「ああ...」

ユーノは唇を綻ばせた。リディノが、わざわざユーノを花苑に誘い出したわけがわかったのだ。そ

れに気づいて、リディノが耳まで赤くなる。

「ごめんなさい.....だって、私、アシャ兄さまのこと、いろんなことを知っておきたいの」

「わかったよ。アシャが好きなんだね」

「ええ」

素直な答えに微かな心の痛みを感じながら、ユーノは旅の話を面白おかしくしゃべり出した。血なまぐさい話はできるだけ避けて、珍しそうなこと、祭りの話、イルファの大食いのことなどを話す。

それをリディノはきらきらと目を輝かせて楽しそうに聞いている。

(可愛いな)

男ならきっと、レアナか、こういう少女を相手にしたいんだろうな、とユーノは思った。

「ん？」

回廊の角を曲がって歩いてきたアシャは、突き出したテラスの手すりに腰掛け、足をぶらぶらさせている少年を見つけた。

「レス？」

「アシャ」

呼びかけに顔を上げたが、すぐにぶいっと不愉快そうな顔で外を向いてしまう。

「.....機嫌が悪そうだな」

笑いかけるアシャに、きらりとアクアマリンの瞳を光らせて、レスファートは頷いた。

「うん。ぼく、キゲン悪いの」

「どうした？ イルファは？」

「まだ寝てる」

「まったく.....あいつは食うか寝るかしか知らないな」

「それ、何？」

レスファートはアシャの片手の立風琴（リュシ）に興味を湧いたようだ。

「ああ。立風琴（リュシ）だ」

「りゅ...し？」

「そう、『風の豎琴』とも呼ばれているよ」

「アシャ、弾けるの？」

「少しはな。ユーノにでも聴かせようと思ったんだが、どこにいったかわからなくてな」

「.....」

「レス？」

ユーノの名前を出したとたん、レスファートは再び不機嫌そうな顔になった。

「ぼく、あの人、きらい」

「あの人って？」

「リディノ...って人」

アシャは瞬きした。

「どうして」

「だって...」

レスファートは膨れたまま答えた。

「全然ユーノを返してくれないんだもん」

「え？」

「朝からずっとユーノと一緒に話してるのに、ぼく、まぜてくれないんだ」

「なんだ...」

（そうか、リディノと一緒に居るのか）

「お前、仲間はずれにされて怒ってるのか？」

「だって！」

少年は顔を紅潮させて反論した。

「ユーノ、独り占めにしてるんだもん！ ぼくだって、ユーノの側にいたいもん！」

「ユーノを独り占めにされてると腹が立つのか？」

「立つの！」

「じゃあ、もし俺が独り占めにしたら、どうなる？」

アシャはテラスにもたれて笑いかけた。

「アシャが？」

きよんとした顔でレスファートは問いかけた。

「どうして？」

「どうしてって.....まあ、その、理由はどうでもいいから」

アシャは微妙に口ごもる。脳裏に過ったのは、心を閉ざしたレスファートが、アシャとユーノの間に割り入った光景だ。

「どうだ？」

「うーん...」

レスファートは少し首を傾げた。日差しにプラチナブロンドを透けさせて考え込み、小さなこぶしを頬に当てる。アクアマリンの目が一瞬どこか大人びた色をたたえ、こちらを向いた。

「腹立つ」

「腹が立つか」

「うん……でも」

ほ、とレスファートは小さく溜め息をついた。

「…アシャならいいや」

「え？」

レスファートの声が、子どもの声にふさわしくない深さを響かせて翳るのに、アシャは相手の横顔を見つめた。

「なぜ？」

「……よくわかんないけど……アシャなら、いいんだ」

少年は考え込みながら続けた。

「他の人だとね、ユーノの胸が苦しくなるの……きゅうってしまっていっちゃって、すごく痛いんだ」

「……」

「だけど、アシャといると……痛くなんない。…ううん、痛くなっても、痛くない」

「痛くなっても痛くない？ どういうことだ？」

「わかんないよ」

レスファートはかぶりを振った。

「なんか、ごちゃごちゃしててわかんない。でも、ユーノが苦しくならなくてすむんだもん」

にこり、と少年は笑ってみせた。

「だから、腹立つけど、アシャならいい。だけど、ぼくを置いてっちゃ、やだ」

「レス」

くすりとアシャは笑った。片腕でレスファートを抱え上げる。

「お前は健気だな」

「ケナゲ？」

「ああ」

「わかんない」

びとりと首にしがみついたレスファートに微笑む。

「そのうち、わかるさ」

「おーい！」

回廊の向こうから、聞き慣れたどら声が響き渡った。それを追うように、トーンと木の板を打ち合わせたような音が聞こえる。

「何？」

「昼の合図だろ。ほら、イルファが来た」

「どこに行ってたんだ!!」

ドタドタとイルファは回廊を走り寄ってきた。

「もう俺は飯を食い終わったぞ！」

「イルファ、ずるい！」

「何がずるい」

のうのうとした顔でイルファは目を剥く。

「起きたら腹が減ってた。で、飯を食った。どこがおかしい？」

「確かにおかしくはないな」

アシャが苦笑いする。

「でも、ずるいもん！ ぼくもお腹すいたもん、なんで呼んでくれないの」

「呼んだけどいなかった」

「絶対呼んでないっ」

「呼んだぞ、レスー、アシャーって」

「どこで」

「飯を食いながらだなあ」

「ひどいっ」

レスファートが抗議し始めたが、イルファは堪えた様子もなし、仕方なしに最後は盛大に、イルファなんか大嫌いだーっ、とののしって、少年は唇を尖らせた。

昼を告げる音は、花苑の中でおしゃべりに興じていたユーノとリディノの耳にも届いた。

「あら…」

「何だい？」

「食事の合図よ。香木を叩くの。行きましょ、ユーノ」

「ああ…」

頷いて立ち上がろうとしたユーノは、ぎくりと体を強張らせた。再びゆっくりと腰を降ろす。

「どうしたの？」

不審そうにこちらを見下ろすリディノに、何気なく笑ってみせる。

「ちょっと用を思い出した。先に食事を始めてくれる？ リディ」

「え、ええ…じゃあ、なるべく早く来てね、ユーノ」

「わかった」

片手を上げて応じるユーノに首を傾げながら、花の間を歩み去っていくリディノの後ろ姿をじっと見つめる。気がかりそうに振り返り振り返りして離れていく相手に、強いて笑って手を振る。リディノは頷き、誰かに呼ばれたのだろう、やや足を急がせて遠ざかっていく。

その姿が視界から消えると、ユーノはゆっくり息を吐いた。

(これで、巻き込む心配はなくなったな)

「もういいだろう？」

背後に潜んでいる気配に声をかける。

ぐっ、と無言で、腰のあたりに突きつけられていた剣が押された。

いつの間に忍び寄っていたのか、寸前までユーノに気配を掴ませなかったところからみて、かなりの遣い手だと思われた。急いで勝負をかけるのは命取りだ。

「わかった」

答えて、前方に目を据えた。じつとりと汗が滲んでくる。

「声はたてない」

再び剣が突いてきて、腰の剣へ滑りかけたユーノの左手を制した。

「両手を上げろ」

低く掠れた声が応じた。

「右手は上げられないんだ」

「日常生活に支障はなかったはずだ」

「！」

(こいつ、知ってる)

頭の中で思考が目まぐるしく回転する。

背後の気配がユーノを狙っていることは、リディノが居る時に仕掛けてこなかったことでわかる。何かの理由があって、ユーノ一人を狙おうとしているのだ。

だが、そもそも、ラズーンの外壁内で命を狙われるということが妙だ。外からやってきた者は、『羽根』の守りを受けてしか中に入れない。『羽根』が守りとして付き添い、中に入れるほどの人間なら、余程の身元証明がないと無理だろう。つまり、この中にいるということは、ラズーンにとって敵ではないと証明されたも同じだ。

なのに。

(視察官(オペ)の連れて来た『銀の王族』か、視察官(オペ)の知っている者、そして、視察官(オペ)自身…)

あるいは、『羽根』の中に裏切り者がいるか。

「っ」

だが、今はそこまで追及していられる状態ではなかった。

再びゆっくりと、だが確実に剣が突き込んでくる。ぴっ、と衣服が裂けた音がした。

「わかったよ。手を上げればいいんだろ」

舌打ちしてのろのろと手を上げた。

(どうする？ こうもぴったりくつつかれてては動けない)

「立て」

聞きようによっては葉ずれの音としか聞こえないほどの囁きが命じた。

「わかった」

ゆっくりと片膝を立てる。この瞬間を狙うしかない。ふいに素早く立ち上がりかけ、慌ててついでにしようとする剣の前で身を沈める。

「?!」

背後で妙な叫び声が上がると同時に、片手をついて体を回し、背後に素早い蹴りを入れた。衝撃があって、チィ…ンと音をたてて、剣が飛ぶ。

「はあっ！」

続けさまにユーノが繰り出した蹴りを、潜んでいた相手はトンボを切って避けた。落ちた剣が花苑の中に突き立つのと同時に、ちらりと見えた男が花の中に身を隠す。

「ちっ」

ユーノは息を潜めて気配を伺った。

風がライクの甘い香りを吹き寄せる。ふいに、すぐ側の花びらが舞い散るのに、とっさに身を引いた。間一髪、マントが引き裂かれただけですむ。抜き放った剣に、ガキッ、と重い音をたてて食い込んだものがあった。

「！」

それが何かを認めた瞬間、ユーノは顔から血の気が引くのがわかった。

「お前...」

「ちいいっ！」

「っ！」

ユーノの表情に何を悟ったのか知ったらしく、男は忌々しげに舌打ちした。剣を交えながら、足蹴りをかけてくる。

(この戦い方！)

円を描くような剣の動きに、ユーノは苦戦した。その視界の隅の方で、もう一つ、音もなく現れた影があるような気がする。気配だけだが、突き立った剣を引き抜き、一歩、また一歩と近づいてくるように感じる。だが、ユーノは目の前の男に応戦するのに手一杯だ。

「く...うっ」

左手で必死に相手の攻撃を止めながら、ユーノは歯を食いしばった。

(早く、こいつのことをアシャに伝えなくちゃ...)

もう一人、敵がいるような気配を感じつつも、目の前の男が一瞬怯んだように剣を引いたのに、思わず焦りが出た。

(早く.....この短剣は.....この戦い方は.....視察官(オペ)の...)

ドスッ!

「!!」

一瞬、ユーノの体が凍りついた。

突然右肩を貫いた激痛に、のろのろとそちらを見やる。

「.....う」

肩を貫き通した剣が真紅に濡れていた。狙い違わず、治りかけていた傷の中央を刺し貫いて突き出した剣の切っ先から、ぬめぬめと赤く光るものが玉となり、ぽとりと滴る。

それは次第に間隔を縮めながら、花の上に音をたてて散った。

「...あ!!」

自分が何をしているのかもわからぬままに振り返ろうとしたユーノは、ぐっと剣を捻られて悲鳴を上げた。同時に、ユーノの意識は、終わりのない夜の中へ崩れ込んでいった。

「遅いな...」

「うん...」

レスファートが頷くのに、席についていたアシャは入り口の方を振り返った。

ユーノはまだ姿を現さない。

「あら、それは立風琴（リュシ）？」

リディノがアシャの席の横を見遣って尋ねる。一瞬しまった、と顔を引き攣らせたが、アシャは仕方なしに頷いた。

「ええ...まあ」

「珍しいわね、アシャ兄さまが立風琴（リュシ）を持っているなんて」

「ユーノに聴かせるんだって」

「む...」

レスファートが無邪気に答えるのに、アシャは思わず額に手を当てた。え、と訳がわからぬような顔でアシャを見たリディノが、気を取り直したようにねだる。

「ねえ、ユーノが来るまで、一曲弾いて？」

先に食べてて、というユーノのこぼを伝えた上で、もう少し待ってみましょうと提案したのもリディノだったので、場繋ぎの意味も込めたのだろう。

「ぼくも聴きたい」

「私も、久しぶりにお聴きしたいですな」

レスファートに重ねて、ミダス公が穏やかに促した。

「確か、ラズーンーの詩人が双手を挙げて迎え、膝を屈して教を乞うたと聞いておりますぞ」

周囲の視線に、アシャは歯切れ悪く応じた。

「それが、その、調弦もまだですから」

「時間はまだありそうよ」

リディノが入り口を見やって振り返る。

「お願い、アシャ兄さま」

その潤んだような瞳にアシャは昔から弱かった。自分が理不尽な力を振り回しているような妙な罪悪感を感じる。

仕方なしに立風琴（リュシ）を抱え、音を合わせ始めた。

一弦、二弦.....

「何を歌いましょう？」

「何でもよいが...」

「私、あれが好き」

リディノが小首を傾げて小さく口ずさんだ。銀鈴を震わせるような声だ。

「ああ.....『花苑にて』」

「そう、その三つ目の」

「『瞳の哀しさ...』か？」

「ええ」

アシャは溜め息をついた。

よりもよって、ユーノに聴かせようと思った詩を選ぶことはないだろうに、と心の中でぼやく。が、だめだと言えば、どうしてかと問われるだろう。リディノが自分にまだ執着しているとわかった今では、余計な混乱を招くようなアシャの想いを伏せておきたい。

軽く一本の弦を弾き、歌い出す。

「瞳の哀しさに

心を魅かれる

魂の色に

心を魅かれる

それを罪だと誰が言おう？

花苑にて

涙こらえる幼き少女よ

私の想いに気づいて.....！」

「いたっ!!」

ピンッ！

「どうしたの?!」

「どうした?!」

異口同音に、リディノとイルファの問いが、アシャとレスファートに投げられた。

「う...ん」

レスファートが右肩を押さえて目をばちばちさせている。

「何か今、すごく痛かった...」

「アシャ兄さまは？」

「いや...」

アシャは呆気にとられて、立風琴（リュシ）を見つめた。その中の、最も切れにくいはずの中央の弦がいきなり切れてしまったのだ。

「弦が...」

「第三弦が？ おかしいわね.....めったに切れないのに...」

「レスは？」

さすがに心配そうにイルファが尋ねるのに、レスファートは弱々しく笑ってみせた。

「だいじょうぶ。もう痛くないよ」

「モスの奴らに捻られたのが残ってたんじゃないのか？」

「ちがうよ！」

レスファートは唇を尖らせた。

「ぼく、そんなヤワじゃないもん。あの時だって、ぼくが『そう』だったんじゃないくて、ユーノが...」

言いかけて、その恐ろしい符号に気づいたように瞳を大きく見開いた。

「ユー...ノ...が...」

「遅すぎる」

アシャは顔をしかめて席を立った。立風琴（リュシ）を置き、剣を握る。自分が酒食にふさわしくない猛々しい気配を放っていることは承知していたが、溢れる殺気が止められない。鋭くりディノを一瞥する。

「ユーノは？」

「あ、あの...」

静かな声音が孕む怒気に、リディノが顔を青ざめさせた。

「花苑の東の端に...」

「東だな」

「待って、アシャ！」

「おい！」

飛び出すアシャに続いて、異変を感じたレスファートとイルファが追う。

そこで何があったかは一目瞭然だった。

踏み散らされた花々、荒らされた地面、切り裂かれたマントの切れ端。

（一人...いや、二人か）

すばやく周囲を見渡し、状況を見て取る。

「おい...アシャ...」

イルファが険しい声で唸った。

「こいつあ、どういうことだ？ ラズーンの中で狙われるってのは.....もう『運命（リメイン）』の手が」

「ああ」

苦々しい思いで同意する。

こうなっては、ラズーン内部の裏切り、それも視察官（オベ）クラスの離反を考えざるをえないだろう。宙道（シノイ）の時に抱いた疑いが、アシャの心の中で大きな闇となって広がっていく。

「アシャ...」

震え声で囁いたレスファートが、アシャに身を寄せ、ぎゅっと服を掴んでくる。その視線は、目の前のラフレスの花に注がれている。

ラフレスは、毒々しい紅をその身に浴びていた。『月光花』と異名のある蒼白い花が鮮血に濡れているのが、姿のないユーノの運命を暗示しているように思える。

身を屈め、そのラフレスを折り取る。

すぐ近くに、これ見よがしに、刀身の半分以上が汚れた長剣が地面に突き立てられていた。ねっとりとした赤で染まっているばかりか、吐き気がするようなぐずぐずした塊までこびりついている。



おそらく、この剣はユーノの華奢な体を貫き通した、そういうことだ。  
そして、その大怪我をしているはずのユーノの姿は、花苑のどこにもない。  
レスファートの口元からカタカタと小さな音が響く。恐怖のあまり歯の根が合わないのだろう、必死に服にしがみついて、何とか倒れるのをこらえているようだ。剣を握った片手で体を支えてやると、小さな泣き声が漏れた。

「ゆ...の...お」

「上等だ」

自分でも信じられぬほど冷えた声音になっていた。

こんな風に、まるで哄笑を残していくような演出をしたがるのが誰か、アシャは熟知している。標的はユーノではない、アシャなのだ。ユーノは、またもや、アシャへの嫉妬に巻き込まれたのだ。

ぎり、っと奥歯が鳴った。顔から一切の感情が消えたのがわかった。

「どうした...？」

「アシャ...ひっ」

飛び出したアシャ達を案じてやってきたらしいミダス公とリディノが、少し離れたところで惨状に気づいて立ち竦む。振り向くと、リディノの薄緑の目が吸い付けられるように血塗れの長剣に止まり、無理矢理広げられるように大きく開かれる。

「あ...」

両手を口に当てる。瞳からぼろぼろと涙が零れた。

「私が.....私...が...ユーノを一人にした...から...」

「あなたのせいじゃない」

アシャはそっけなく応じた。

もはやリディノの存在も疎ましいだけ、周囲の全てが遠ざかり、消え去っていく。

白い何も無い空間に一つの声だけが響く。

(俺が、いなかった)

ぐしゃりとアシャの手の中でラフレスが握り潰された。

「そう、遠くには行けなかったはずだ」

アシャは机の上の地図を睨みつけた。

「あれからすぐにミダス公の領境に『銀羽根』を手配したが、まだどこからも連絡は来ていない」

「もう分領地を出ちまったんじゃないのか？」

「いや」

イルファのことばに、アシャは首を振った。

「そんな暇はなかったはずだ。いくらギヌアだろうと、あれほど早くこっちが反応するとは思っていなかったに違いない」

「こっちにレスがいることを忘れてたんだな」

「能力を過小評価してたんだろう。.....レスにユーノを探させる手も考えたが」

アシャは少し唇を噛んだ。部屋の隅で丸まって眠っているレスファートに目をやるが、首を振りながら続ける。

「ユーノが瞬間に気を失うぐらいだ。ギヌアだったら、傷を抉り直すぐらいのことはやりかねない」

ぎりぎりとして中身を締め付けてくる痛みをしばし耐える。

「そいつは、まずいな、レスがもたん」

イルファも難しい顔になった。

「ユーノ一人、それもあれだけ出血している人間を、そう簡単に移動させることはできない。まだ、ミダス公の領地から出ていないはずだ。領内中に緊急の告示が回っているから、おいそれとは動けないだろう」

「もし『銀羽根』の中に裏切り者がいたら？」

イルファの問いは、アシャが何度も考えたものだ。

「可能性はあるが...」

自分の唇が吊り上がるのがわかった。おかしくはない、楽しくもないのに零れるこの笑みは、縛られ遮られている昏い欲望が満たされるのを待っている、雌伏している獣の笑みだ。

「今夜は動けない。動いたとたんに、自分の命がなくなるぐらいわかっているだろう」

「ふ、ん...」

机の火皿の灯が揺らめいて、不気味な影を部屋の壁に踊らせる。

「それに.....おそらく、裏切り者は視察官（オベ）だ」

苦いものを噛み潰す声になった。歯ぎしりしたくなる怒り、揺らぐ世界を同じように支え守って

はずの仲間が、こともあろうに、かけがえのない存在を卑劣な手口で奪い去ろうとしている。

「宙道（シノイ）の時に、そうじゃないかとは思っていたが」

「とすると、何か」

イルファはラズーン全土を地図で眺めた。

「今、ラズーンに集まっている視察官（オペ）の中にそいつがいると？」

「ああ」

アシャは目を細めた。

「ユーノを連れ出すに連れ出せず、どこかに押し込めて、自分は何食わぬ顔で別の屋敷に居るんだろう……そうしているだけで、ユーノは確実に死ぬからな」

ユーノが死ぬ。

考えたくないその状況を、己が易々と口にしてはいるのに呆れるが、ことばにためらっているほど余裕はない。今必要なのは、的確な現状把握と残された時間の算定、その間に何をどうすれば、ユーノを生き延びさせられる策が打てるか考えることだけだ。

（もし、そいつを見つけたら）

アシャは目を細めて、地図をゆっくり見渡した。

（何をしよう？）

幸い、ここはアシャの本拠だ。全権限がアシャには与えられる。誰の何をどのように扱おうとも、正面からアシャを止められる者などいない。

「ふ…」

小さく漏らした吐息に、イルファが何か言いたげに上目遣いにアシャを見る。

（もし、それが……ユーノの屍体を見つけた後だったとしたら）

そいつは何かを考え何かを感じる人間であったことを後悔するような状況になるはずだ。

（俺に自制は期待するなよ？）

誰にともなく嘲笑する。

もっとも、今の状態では、ユーノが生きている間に見つけたとしても、そう待遇を変える気にならないが。

「…同情するな」

ぼそり、とイルファが呟いた。

「ん？」

「ユーノを襲った奴に」

「…どういうことだ」

「おいおい、勘違いするなって」

じろりと見返したアシャに、イルファがばたばたと両手を振る。

「お前がそれほど殺気だってるのを見るのは、初めてだってことだ」

「そうか？」

イルファの目に浮かんだ恐れに、にっこり笑い返してみせる。さぞ、凄まじい笑みだったのだろう、珍しくイルファがぎくりと身を縮めた。

「だからだなあ…『そいつ』を俺に向けるなって…」

ぶつぶつぼやきながら、小さく溜め息をつく。

それには構わず、アシャは再び地図を眺める。

（動け）

同じ視察官（オペ）の考えること、ユーノを連れて潜めそうな所を、今、片端から『銀羽根』にあたらせていた。それも、できるだけ派手に騒がしく、言い換えれば何か大事があったのだと周囲が噂するぐらいにやってのけろと命じている。

ユーノがまだ生きている可能性があって、繰り返される搜索に次第に場所が絞られていき、見つかる可能性が大きくなっていけば、裏切り者は危険を冒してでもユーノを隠した場所に走るだろう。ユーノが見つければ、彼女は裏切り者の顔を知っている。その口から破滅がもたらされるのは必至、何が何でもユーノにとどめを刺そうとするはずだ。

全てを読み込み、アシャは万に一つの機会を待っている。牙を立てる瞬間に己の力を叩き込むべく、獲物が目の前に現れるまで静かに毛繕いしている野獣。

首から背中産毛が勝手に立ち上がっていくような感覚、静謐で残忍な心がふつふつと満ちていく。

（動け）

包囲網が狭まっていく。その場しのぎの発想の愚かさが、じりじりと襲撃者の心を火あぶりにしていくだろう。

（うろたえて、動け）

その時が、お前の最後だ。

「！」

ふいに屋敷の端がざわめいた。

救いを得たようにイルファが跳ね起き、アシャが戸口を振り返る。

「アシャ・ラズーン！」

突然開け放たれた扉から、はあはあと息を切らせて、『銀羽根』の一人が飛び込んできた。

「わかりましたっ」

「誰だ」

「セータ・ルムです！」

駆け通しに駆けてきたのだろう、今にも顔れそうな体を膝に手をつけて支え、

「自宅近くの、古い空き家に急いで駆け込んでいくのを見たとのことです」

知らされた場所は、ミダス公の花苑からそれほど離れていない。何より、手配した搜索は領域周辺からミダス公邸に収束していく形の包囲、セータが駆け込んでいった空き家は、まだ搜索の手が届いていないはずだ。

そこへわざわざ仲間から離れて単独で駆け込む何があったのか、アシャの命に背いてまで。

理由は火を見るより明らかだ。

「イルファ！」

「おう！」

ほっとしたようにイルファが剣を掴む。その側を擦り抜け、ようやく息が整った『銀羽根』に続いて、アシャはイルファと共に部屋を飛び出した。

「悪いな...」

「.....」

空き家の屋根の破れ目から差し込む月光に、一枚の黒い布になったような人影の低い掠れ声を、ユーノは夢うつつで聞いていた。

「はっ...はっ...はっ...」

荒い呼吸を続けながら、何とか相手の言っていることを理解しようとする。気持ち悪い汗が、体中をぐっしょり濡れさせている。剣に刺し貫かれた右肩は麻痺して既に感覚はなかったが、汗とは違う生暖かいものが絶え間なく流れ続けているのはうすぼんやりと感じていた。

「本当は、もう少し生きられるはずだったんだが.....。ギヌア様が殺してはならんとおっしゃっていたから、このまま本拠へ連れていく予定だったんだ」

「は...、うっ」

乱れる呼吸に額から汗が流れ落ちていく。

「ギヌア様は先に戻られたから、あの包圍にはひっかかってはおらんよ」

男は含み笑いをしてユーノを覗き込んだ。

「お前は無駄死にと言う訳さ」

(裏切り...者...)

呼吸が苦しく、ことばにならない。必死に空気を求めるのに、いつまでたっても息苦しさはなくならなかった。

この空き家に運び込まれ、気がついてからずっとそうだ。

そればかりか、息苦しさはじわじわと増して行って、呼吸を続けることさえ苦痛になりつつあった。息苦しさから逃れようと喘ぐ。喘ぐことが苦しくて、呼吸が止まりそうになる。呼吸が止まりそうになると、息苦しさに耐え切れず、できるだけ空気を吸い込まずにはいられない。

ユーノはさっきから、その堂々巡りを繰り返していた。

「放っておいても、いずれは死ぬだろうがな.....その出血じゃ」

男は、ユーノの右肩辺りに眼をやり、ぶるっと体を震わせた。

「槍傷を抉るなんて.....ギヌア様らしいさ.....並の人間にできることじゃない...」

語尾が怯んだように戸惑った。それを振り切るかのように相手は、一つ顔を振り、はっきりした声で言い放った。

「だが、あのアシャが余計な手配をしてくれてな。こっちが危ないんだ。悪いが死んでもらう」

ユーノの頭上に掲げられた短剣が月の光を明るく跳ねる。天を突き上げていた切っ先はくると向きを変え、容赦なくユーノの胸元に一気に下がってくる。

(い、やだ...)

霞む意識に半ば本能的に片手を伸ばして近くの柱を掴み、短剣の進路から逃れようとぐっと体を引き寄せた。

「つつ...」

激痛が体中を駆け巡って気が遠くなる。が、少なくとも、相手の気は削ぐことはできたらしく、短剣は中空に浮いたまま止まった。

「ほ.....まだ.....けるのか.....たいした.....だね、お前.....さ」

男の声は波打つように響いて、よく聞き取れない。

耳鳴りがする。吐き気が込み上げる。目眩がして、体の力が抜けてくる。手放すまいとたぐり寄せた気力が、今の動きで一気に削られた。

ユーノはぐったりと首を落とした。呼吸だけが別人のもののように活発に、いや切羽詰まって最後の足掻きのように続いている。

「可哀想だな。安心しろ、今、楽にしてや...っ！」

ふいに、空き家の中に光が満ちた。

短剣を振り上げ、今しも振り下ろそうとした男が、ぎくりと動きを止める。首を薙ぎ払うように突き出した長剣に、震え声で誰何してきた。

「だ、誰だ」

「それを聞くのか」

アシャは冷笑した。

「ここで何をしているのか、俺に説明してもらいたいものだな、セータ・ルム」

「アシャ……ラズーン…」

声が今にも泣き出しそうに掠れた。

「剣から手を離せ。小細工をするなよ」

冷やかに命じると、は、と如何にもかしこまって答えた相手の手から、突然力が抜けて緩んでしまったと言いたげに短剣がユーノめがけて落下する。あまりにも唐突、あまりにもさりげない、他の人間相手なら絶妙の間合い、だが。

チン！

「小細工をするな、と」

セータの手からまっすぐ落ちた短剣は、アシャの蹴りで進路を狂わされ、遠くに跳ね飛んだ。

「言ったはずだが？ お前の耳は使い物にならないようだな」

同時にアシャは首筋にあてていた剣を軽くセータの首に食い込ませた。とろり、と溢れた血の色は鈍い。まだまだ表皮一枚傷つけただけだ。

「無用なものなら、このまま一気に削ぎ飛ばしてみるか」

「…ひ…っ」

セータが絶句して体を凍り付かせた。それもそのはず、剣の刃の向きを少し変え、首の皮を剥ぎながらそのまま耳へ振り上げてみようかという気配を滲ませたからだ。

「う、う、あ」

じりじりと這い上がろうとする刃は、僅かに角度がついている。耳どころかざっくりと、かなりの厚みで皮膚を削ぎ落としかねない深みへ食い込んでいく。

(それでもまだ、死ぬまでには至らない)

アシャは淡々と考える。

どこまで押し上げれば命に関わるか、どのあたりまでならただの脅しで済むか、とっくに熟知している事柄だ。ユーノの命を危険に晒しているのはわかっているが、多少この相手でも殺気を逃がしておかないと、とんでもないことまでやりかねない自分がいる。

「こっちを向け」

「え、あ…」

首に刃を当てられたままで振り向けば、自ら首を切断するようなもの、男の戸惑いと恐怖に薄く嗤う。

「死にたいんだな」

ぐ、となおも強く剣を押し付けると、セータが絶叫した。

「わ、あっ！ 向きます、向きます！ だから、お願いします、その剣を緩めて、くだ…さいっ」

喉は既に朱色に濡れている。求めに応じて刃を少し離してやると、みるみる流れる血が増えた。

「な…んで……なんでこんな…小娘に…」

セータは泣き声だ。

「なんで、アシャ・ラズーンが…っ」

慌てて首の傷を手で押さえながら、ひい、と声にならぬ悲鳴を漏らしたセータの震える脚が今にも崩れそうだ。壊れかけた操り人形のようにぎちぎちと必死に振り向こうとする相手の側を、さっと通り抜けながら、数カ所の急所を一気に殴りつける。

「がぶっ…」

くると白目を剥いた相手が前へのめるのを、アシャはイルファに向かって押した。

「こいつを縛っておいてくれ。後でじっくり訊きたいことがある」

「あ…ああ」

イルファが呆れ返った顔でセータを受け止めた。

「お前、魔物（パルク）の顔をしてるぞ」

満更冗談でもないそのことばは、もうアシャの意識には入らなかった。

床の上に倒れたまま、息を喘がせているユーノを覗き込み、用意の布を裂く。

「あ…あうっ」

止血薬をしみ込ませた布を右肩に巻くと、ユーノが小さく声を上げて仰け反った。

(やっぱり槍傷の中央を扶られてる)

顔が強張ったのがわかった。床に広がった出血量、忙しく浅い呼吸を繰り返す様子、傷の状況を改めて確認する。

(ここでは駄目だ)

胸の奥が氷河のように冷えた。

(回復どころか、保たせられない)

荒々しい呼吸を続けるユーノの、汗で濡れそぼっている髪をかきあげながら、静かに声をかける。

「ユーノ？ わかるか、ユーノ？」

「あ…」

「答えなくていい。わかるんだな」

「ん…」

慌ただしく呼吸を続けながら、ユーノは弱々しく首を上下に動かした。少しほっとしながら、手持ちの袋から緑の粒を出す。

「痛み止めだ。呑めるか？」

「……」

半分意識がないのだろう、あやふやにユーノの首が上下に揺れた。見えているとは思わないが、頷き返してアシャは開いたままのユーノの口の中、舌の上にそっと薬を載せた。苦しげにもがいて口を閉じ、ユーノが顔を歪めて飲み下す。何とか喉を通ったとたん、はああっ、と深い息を吐いて、再び荒い呼吸に戻る。

「もう一粒」

「…ぐ…」

ユーノは目を閉じて唇をきつく締め、粒を呑み込んだ。呼吸を奪われたのと同じなのだろう、反動でしばらくはせわしなく呼吸し続けるだけ、アシャの呼びかけにも反応しない。次々と流れ落ちる汗が苦痛を物語る。

「…ユーノ」

堪え切れず、アシャはそっと、その頬に触れた。

震えながらぼんやり見開いた相手の眼の中を覗き込むように、ことばを繋ぐ。

「ちょっときついが、すぐ薬が効いてくる、我慢しろよ」

「…」

微かに首が縦に動いた。

その体の下へ静かに、けれど一歩も引くことのない強さで手を差し入れる。

「あ…！…!!……っ！」

上げかけた声を、歯を食いしばってユーノが堪えた。床から掬い上げられる動作さえ激痛を生むのだろう、ぎいつ、と歯のきしむ音がある。

「もう少し……よし…いいぞ」

「う…ふ…」

吐息とともに、ユーノはアシャの腕に頼りなく抱かれ、胸に頭をもたせかけてくる。細心の注意を払って立ち上がり、振り返る。

「イルファ」

「ん？」

「俺はこれから『氷の双宮』に行く」

セータを丁寧に馬に縛り付けていたイルファが、生真面目な顔で見返した。

「ここではユーノが保たない。あそこなら、何とか助かる」

「わかった。で、こいつ、どうする？」

「地下牢見つけて放り込んどけ。何があっても逃がすな。死なせるな」

声音は激していない、だが言い切ったことばの容赦なさが届いたのだろう、イルファがぞくりとした顔になった。

「それから、ミダス公に事情を伝えてくれ」

「わかったよ」

いつもなら俺もついて行くのだ、二人きりになるつもりなのかだの、本気か冗談かわからない絡み方をされる状況だが、さすがにイルファも茶化す気にならないのだろう。

「充分わかった」

誓いを立てるように神妙に繰り返した。

